



令和3年度 障害者等による 文化芸術活動推進事業 事例集

はじめに

文化庁では、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」に基づく「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」及び「文化芸術活動基本法」に基づく「文化芸術推進基本計画」に沿って、鑑賞の機会の拡大・創造の機会の拡大・作品等の発表の機会の確保など、文化芸術による共生社会の推進に関する施策の総合的かつ計画的な推進に取り組んでいます。

令和元年度からは、障害者等による文化芸術の鑑賞や創造の機会の拡充、作品等を発表する機会の創出などを図る取組、人材育成に資する取組等、共生社会を推進するための様々な取組を、各種団体に委託実施しているところであり、この度、令和3年度の各団体の取組を関係者間で共有し、各々の取組の改善に繋げるため、事例集としてとりまとめました。

令和3年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響が続き、計画の変更や縮小を余儀なくされた事業もありましたが、前年度の経験を活かし、臨機応変な対応や創意工夫によって、オンラインによる取組の広がりなどの成果に繋がった事業もあり、様々な取組の参考にしていただける内容となっています。

この事例集を関係者が活用することで、より一層、文化芸術による共生社会の推進が図られることを願うものです。

文化庁地域文化創生本部

目次

01	さっぽろパペットシアタープロジェクト「北のおぼけ箱」 公益財団法人 北海道演劇財団	……4	20	ホスピタルシアタープロジェクト2021ーすべての子どもたちと家族のための多感覚 演劇の上演ならびにアートマネジメント人材育成事業 特定非営利活動法人 シアタープランニングネットワーク	……42
02	多様な障害のある子どものための多感覚演劇上演事業とインクルーシブ演劇ネットワー ク事業 NPO法人 アートワークショップすんぶちよ	……6	21	高齢ろう者×アートプロジェクト2021 公益財団法人 現代人形劇センター	……44
03	「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2021 一般社団法人 MIMIX Lab(媒体融合Lab)	……8	22	熊川宿若狭美術館を拠点とする芸術文化推進事業 特定非営利活動法人 若狭美&Bネット	……46
04	「ユニバーサル・アート」が花咲くまちづくり！～輝く共生社会実現に向けて～ 特定非営利活動法人 いちかわ市民文化ネットワーク	……10	23	「表現未満、プロジェクト」共生社会実験場・街の文化創造発信拠点 「たけし文化センター連尺町」 特定非営利活動法人 クリエイティブサポートレッツ	……48
05	～いつでも、だれでも、どこへでも～ 「ミュージアム・アクセス・センター」設立事業 特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン	……12	24	CONFUSION INCLUSION～Presence～ 特定非営利活動法人 ポパイ	……50
06	障害者による文化芸術活動の推進に関する実態把握事業 株式会社 ニッセイ基礎研究所	……14	25	障がいのあるアーティストによる支援学校の文化芸術推進事業 社会福祉法人 素王会 アトリエ インカーブ	……52
07	声のカプロジェクト 株式会社 朝日新聞社	……16	26	障害のある児童や成人の身体的芸術活動(ブレイクダンス)の創造と発表の機会を 確保・充実させる取り組み 日本アダプテッドブレイキン協会	……54
08	多様性を育むダンス&美術プロジェクトー障害のあるアーティストの発掘&育成、 ファシリテーター育成、及び、発表の場づくり クリエイティブ・アート実行委員会	……18	27	舞台芸術鑑賞サービス ショーケース&フォーラム 一般社団法人 日本障害者舞台芸術協働機構	……56
09	バレエによるインクルージョン促進事業 公益財団法人 スターダンサーズ・バレエ団	……20	28	障害者の舞台芸術支援と支援人材の育成に関するプラットフォーム Open Arts Network Project (オープンアーツネットワークプロジェクト) 社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会	……58
10	社会と知的障がい者施設を演劇でつなぎ、地域のプラットフォームをつくる事業 一般社団法人 日本演出者協会	……22	29	日本・アジアの障害のある人の舞台芸術作品と先進的な鑑賞支援に関する海外発信 社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会	……60
11	やってみようプロジェクト 公益社団法人 日本劇団協議会	……24	30	日本センチュリー交響楽団 特別支援学校コンサート 公益財団法人 日本センチュリー交響楽団	……62
12	プロの音楽家を介在したインクルーシブ体験と地域ネットワークの構築 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団	……26	31	こんにちは、共生社会(ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ) 特定非営利活動法人 ダンスボックス	……64
13	インクルーシブデザインによるアクセシビリティ・コーディネート・スキルの開発事業 公益財団法人 東京都歴史文化財団	……28	32	NEW TRADITIONAL:障害のある人の表現と伝統工芸の相互発展 一般財団法人 たんぽぽの家	……66
14	日本版 The GARDEN 公益財団法人 東京都歴史文化財団	……30	33	障害者アートの権利保護と作品販売等に関するハンドブックの制作 一般財団法人 たんぽぽの家	……68
15	国際芸術祭実施に向けてのろう者の芸術活動推進事業2021 (副題:育成×手話×芸術プロジェクト) 社会福祉法人 トット基金日本ろう者劇団	……32	34	地域と共につくる島根インクルーシブシアター・プロジェクト2021 公益財団法人 しまね文化振興財団	……70
16	自閉症患者や認知症高齢者、その家族、介護者等による対話型絵画鑑賞事業及び物語 創作プログラムの普及と成果の海外発信事業 一般社団法人 アーツアライブ	……34	35	障がいのある人との表現活動の実践によるモデルづくり NPO法人 シアターネットワークえひめ	……72
17	新国立劇場主催演劇公演等における観劇サポート 公益財団法人 新国立劇場運営財団	……36	36	パーキンソン病患者によるダンス活動の普及事業～オンライン編 一般社団法人 パラカダンス	……74
18	社会的養護のもとにある障害児等による地域間交流から生まれるパフォーマンス作品 の創作と発表 特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち	……38	37	～障がいのある人もない人も共におどろう～「はぐくみのダンス」 公益財団法人 都城市文化振興財団	……76
19	アルテ・エ・サルデー「マラー／サド」～日伊精神障害者共同演劇配信プロジェクト～ 特定非営利活動法人 東京ソテリア	……40	38	音楽体験を通じた不登校児童生徒の社会的接点を作る音楽プログラムの開発と実践、 及びその検証 一般社団法人 楽友協会おきなわ	……78
			39	ゆいまーるミュージックプロジェクト 一般社団法人 琉球フィルハーモニック	……80

事業名 さっぽろパペットシアタープロジェクト 「北のおばけ箱」

団体名 公益財団法人 北海道演劇財団

所在地：北海道札幌市

URL：http://www.h-paf.ne.jp/

事業概要 発達障害のある児童にアートを通じてコミュニケーション力や自己肯定感を高める療育を提供する児童デイサービス「ピングアート」と、札幌市こどもの劇場「やまびこ座」・札幌市こども人形劇場「こぐま座」で活動する子どもたちを対象に、アイヌ民話を題材に、ワークショップを積み重ね、パペットシアター「北のおばけ箱」を創造し、発表。それぞれの個性とそれを生かす共生の意識を育み、地域の文化(アイヌ文化)に触れて地域への理解を深め、子どもたちと地域社会のつながりを広げるとともに、障害のある子どもとの文化芸術活動の経験を共有し、人材の育成を図る。

実施内容

●さっぽろパペットシアタープロジェクト

「北のおばけ箱」(原作/知里真志保編訳「アイヌ民譚集」
「えぞおばけ列伝」より)

①ワークショップ

[演劇ワークショップ](8回)

開催日：2021年11月13日～2022年2月16日

場所：ピングアート美園、札幌市こどもの劇場やまびこ座(研修室・ホール)

参加人数：延べ277人(小学生～大学生)

参加費：無料

[舞台美術・人形製作ワークショップ](10回)

開催日：2022年1月4日～2月1日

場所：ピングアート美園・ピングアート北野、札幌市こどもの劇場やまびこ座(美術工作室)

参加人数：延べ154人(小学生～高校生)

参加費：無料

[アイヌのウポポと踊りのワークショップ](3回)

開催日：2022年2月6日～2月8日(3回)

場所：札幌市こどもの人形劇場こぐま座、札幌市こどもの劇場やまびこ座(研修室・ホール)

参加人数：延べ96人(小学生～高校生)

参加費：無料

②公演

開催日：2022年2月19日～20日

場所：札幌市こどもの劇場やまびこ座

参加人数：194人

参加費：18歳以上1,200円、5歳～17歳500円、
5歳以下無料

出演：やまびこ座・こぐま座パペットユーススクール、
やまびこ座遊撃舎ほか(総42人)

内容：北海道の面白いおばけたちがたくさん登場するアイヌの昔話「アイヌの民譚集」(知里真志保編訳)を題材に、児童デイサービス「ピングアート」で活動する発達障害の子どもたちと、劇場やまびこ座、人形劇場こぐま座で活動する子どもたちを対象に、演劇ワークショップ、舞台美術・人形製作ワークショップ、アイヌのウポポと踊りのワークショップを積み重ね、台本の理解、舞台美術・人形デザインから製作を通じ、パペットシアター「北のおばけ箱」として公演しました。併せて英語字幕を投影し、地域に暮らす外国籍の子どもたちにも広く鑑賞の機会を提供し、子どもだけでなく、大人も、楽しめる機会となりました。



ワークショップの様子



ピングアートの子どもが描いた仮面

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

新たな挑戦に取り組み、障害のある子どもたちの表現の幅を広げる

「ピングアート」と当財団は、演劇「ぐりぐりグリム～シンデレラ」(2018年・2019年)、札幌交響楽団と俳優による音楽劇「ピーターと狼」(2021年)で、子どもたちそれぞれが物語を理解し、舞台に何が必要かを考え、「絵」を描いて作品を創作し、それを専門家が舞台美術にまとめるという手法で協働を重ねてきました。今回のさっぽろパペットシアター「北のおばけ箱」では、アイヌの民話を楽しみ、デザイン画を描き、それが人形や仮面などの立体作品となる過程を体験することで、平面から立体へと表現の領域を広げ、立体的に考える力

を育みました。

特に大きな仮面づくりは、様々な素材を組み合わせ、体全体を使って仕上げ、技巧の向上にもなりました。また、舞台美術づくり、劇場入口での展示や作品の無料プレゼントなどにも取り組み、大きな挑戦となりました。

子どもたちが表現と技巧の幅を広げ、自身の可能性と新たに出会うことで、観客に、多様な子どもたちの存在と彼らの可能性を伝えることができたと共に、障害のある子どもたちの活動を広く知ってもらう機会となりました。

それぞれの得意と個性を活かし、舞台を創り上げ発表

「ピングアート」の子どもたちが日々の活動の中で楽しみ、工夫し、人々とのコミュニケーション手段としている「描く・創る」という得意と、「やまびこ座・こぐま座パペットユーススクール」と「やまびこ座遊撃舎」の子どもたちの「人形製作と操作」「演技」という得意、そしてマレウレウのマユンキキさんによるウポポ(歌)と踊り、遊びのワークショップからの新たな表現を、専門家たちがひとつにまとめ、公演しました。新型コロナウイルス感染症の影響下で、それぞれが日常的に活動する場所で実施せざるを得ませんでした。参加者が、互いに学び、それぞれの得意と個性を生かし、多様な社会・

文化の中で人々が暮らす共生の意識を育むことが出来ました。また、「ピングアート」の作品で彩られた舞台に、小学生から大学生まで42人の子どもたちや学生が立った公演は、演劇と人形劇がひとつとなった完成度の高いエンターテインメントに仕上がりに、観客から好評でした。特に18歳以上の参加者が70%と大人が楽しめる舞台となったことは、参加者ひとりひとりがアーティストとして成長し、評価された大きな成果だと考えます。今後、障害者の文化芸術活動が、正しく評価され、それが励みとなり、積極的な社会参加へとつながると期待しています。

事業実施における工夫

演劇に特化した公益法人として、「文化芸術による共生社会の実現」というミッションに取り組んできましたが、この取り組みの地域への定着と今後の広がりのある持続を図るための工夫として、同じ公益法人である公益財団法人さっぽろ青少年女性協会が管理運営する「こどもの劇場やまびこ座」「こどもの人形劇場こぐま座」と連携し、事業を行いました。これまで蓄積してきた互いの専門知識とスキルで、より多様な創作活動の経験を積み重ねられるワークショップを行い、障害

のある子どもたちの創作に、新たな表現方法と創造活動の幅と、多くの人にその成果を発表できる場を提供できたと考えます。また、それぞれの専門性を活かし、障害のある子どもとの文化芸術活動の経験を共有できたことで、このような活動に関心を持ち、支える新たな人材の育成につながり、今後、地域での取り組みの多様性と活性化、障害者の文化芸術活動の地域への定着が進むと期待します。

新型コロナウイルス感染症の影響

当初は、各施設の子どもたちが同じ舞台に立ち、交流を図る計画でしたが、臨機応変にスケジュールを組み換え、感染症対策をとりながらワークショップを行いました。オンラインでの実施も検討しましたが、特に障害を持つ子どもとは直接的なコミュニケーションが重要と判断し、参加人数を調整したり、「ピングアート」のスタッフが専門家の講習を受けてサポートするなど、対面での実施としました。「ピングアート」の子どもたちの人形製作や舞台美術製作体験も計画していましたが、子どもたちのデザイン画をもとに、参加した大学生やスタッフが完成させました。

事業名 多様な障害のある子どものための多感覚演劇上演事業とインクルーシブ演劇ネットワーク事業

団体名 NPO法人 アートワークショップすんぷちよ

所在地：宮城県仙台市

URL：http://www.sun-pucho.com

事業概要 重度障害のある子どものための多感覚演劇の創作と上演を行う。多感覚演劇とは、五感を使って楽しむ演劇。じっと座って、静かに鑑賞することが求められる通常の演劇公演と異なり、声を出したり、一緒に踊ったり、観客が居心地が良いと思う方法で鑑賞することを前提としている。またセリフやストーリーを重視せず、視覚、聴覚、触覚など感覚に働きかける構成で、観客は俳優との相互関係的なやりとりを楽しむことができる。そのため4組～6組という少人数の定員で上演する。

実施内容

●障害のある子どものための多感覚演劇「ちいさなうみ」の創作と上演

開催日：2021年11月20日～21日

場所：宮城野区中央市民センター第三会議室

対象：障害のある子どもとその保護者

定員：各公演、親子4組

参加人数：14組(大人26人、子ども15人)

参加費：1組1,500円

内容：多感覚演劇「ちいさなうみ」の創作と上演を行いました。上演では1回4組の少人数の定員で、4人の出演者が相互に関わり合うことを重要視しました。観客の周りには様々な楽器や道具を置き、それらを劇中で使い、作品に参加してもらう工夫をしました。音を出したり、一緒に踊ったり、光で照らしたり、影で遊んだり、観客も1人の出演者として作品に貢献し、エンディングでは参加者一人一人の名前を入れて、オリジナルの歌を会場のみんなで歌い、参加してくれたことを讃えました。4人の出演者のうち2人は音楽家をキャスティングし、コントラバスとヴァイオリンの奏者が劇中、様々なオリジナルの曲を演奏したり、効果音として楽器から様々な音を出す演出を施しました。



影絵シアターを作って楽しむ子どもたち



ちいさなうみ上演の様子

●宮城野区子ども舞台芸術祭「フラットシアターフェスティバル」の企画・運営

開催日：2021年11月20日～21日

場所：宮城野区中央市民センターロビー他

対象：障害の有無問わず、3歳～10歳の親子

定員：各プログラム8組

参加人数：33組

参加費：1組1,500円

内容：障害や年齢に関わらずあらゆる子どもたちが舞台芸術に触れ、交流する機会をつくるため、フェスティバル形式として、「ちいさなうみ」の上演に合わせ、2つの人形劇作品を上演しました。人形劇では、チェコで人形劇を学び、現在は岐阜県を中心に活動するアーティスト谷口直子さんによる人形劇あかずきんと、おおきなかぶを題材に影絵人形劇をつくるワークショップを開催し、販売しました。



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

公立文化施設との共催で、障害者の舞台芸術に対するハードルとノウハウを共有するきっかけに

事業全体を通して、会場となった宮城野区文化センターとの共催事業とすることで、障害のある人が施設に来館し、鑑賞体験することに対する配慮の考え方を共有するきっかけとなりました。ちいさなうみに来場した重度障害の子はチューブでの経管栄養の注入が必要でした。食事の時間が上演時間の前後となっていたため、事前にご連絡いただき、上演前に別室を用意することで、食事を予定時刻の通りに摂ることが出来ました。医療ケアの度合いが高いほど、外出を伴う社

会経験から離れてしまう傾向にあるのは、こうした日々のケアを、外出先で満足に行えないという課題にあるようです。共催施設との協議の上、今回の件を対応したことで実践から得られる学びを共有することが出来ました。次年度以降は研修会として障害者対応に関する学びの場を作り、団体内だけでなく、地域の文化施設へ様々な障害に対する合理的な配慮のノウハウを波及させていきたいと思ひます。

ソフトのバリアフリー化にかかるコスト、協働という地域資源の活用で解決の糸口を見つける

様々な障害の種類に対応して、文化芸術の鑑賞や参加の機会を生み出していくには、どこのセクターが担おうとも財政的、人材的な資源が不足しています。しかし、今回のように公立文化施設と地域のアート団体が共催し、それぞれの知見や資源を生かし合うことで、課題解決の糸口が見えてきました。

障害者対応は、本来マニュアル化されたサービスではなく、障害のある人が住まう、まちや地域の人々のマインドに依るものだと考えます。文化施設を起点にした様々な取り組みを行うことで、そうしたマインドを醸成して行くことが重要だと感じました。

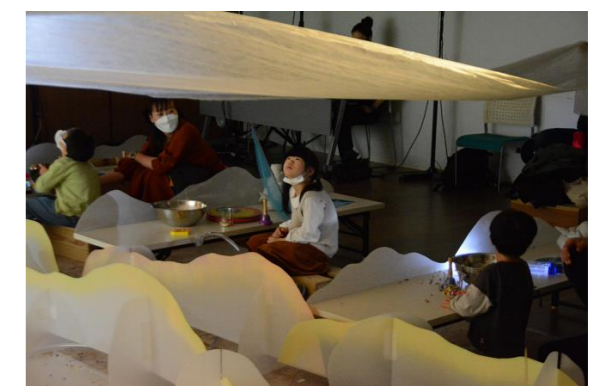
事業実施における工夫

コロナ対策ガイドライン(緊急舞台支援ネットワーク作成)に基づいた対策をした上で、インタラクティブな関わり合いができる演出・構成を実現出来ました。本来であれば、観客と俳優が接近して、関わり合いながら上演していた作品ですが、

今回は距離をとり接触しないという制約があったため、釣竿に小道具を下げて近づけてみたり、光や影を活用して関わりあうなど、制約の中から様々なアイデアが生まれました。



人形劇「あかずきん」に挑戦する子どもたち



「ちいさなうみ」を観劇する親子

新型コロナウイルス感染症の影響

身体の特徴や、病気、障害によっては感染が生命に関わるため、情報は届いていても、予約に結びつかないという状況がありました。「見に行きたいけど、行くことができない」「外出はできているが、近所の公園までが限界」「予約はしてみたが、当日の感染状況により行くかどうかを見極めたい」などの声が聞かれました。

事業名 「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2021

団体名 一般社団法人 MMIX Lab (媒体融合Lab)

所在地：宮城県仙台市

URL : <http://mmix.org>

事業概要 アートによるインクルーシブ社会の実現という活動趣旨に賛同するアーティストやデザイナーをはじめとするクリエイターと、障がい者の作品などの展示ギャラリー、コロナ禍でも表現活動ができる移動ギャラリーなど、障がい者の創造的な場の創出を行い、支援活動の交流拠点としても使えるようにする。さらにデザインや広報活動、グッズ開発などを専門家の支援のもと行い、展示や販売を行ったり、東京の美術大学助手のアーティストらとの展覧会なども行う。また情報の受発信を行い、コロナ禍でも表現活動を止めない！アートによるインクルーシブ社会の実現に向けた企画を実施する。

実施内容

●MMIX+「東北東京展」(「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2021)

開催日：2021年8月13日～8月22日

場所：スペース・ゼロ(東京都渋谷区)

参加人数：137人

参加費：無料

内容：アーティスト・パルコキノシタや開発好明と東京の美術大学助手のアーティストらとアート・インクルージョンの障がいのある表現者が協働でアート作品やインスタレーションなどの展示を行いました。インクルーシブな表現の場を創る！コロナ禍でも表現活動を止めない！プロジェクトでもあります。

●アート・インクルージョン2021(「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2021)

開催日：2021年10月2日

場所：JR長町駅前広場(宮城県仙台市)

参加人数：500人

参加費：無料

内容：宮城県の福祉サービス事業所を中心に、食品や小物、アクセサリなどのマルシェなどと併せて、障がいのある表現者の作画による新作マスクなどのグッズ販売や、軽トラを改造したオリジナルの移動ギャラリー内でのアート・インクルージョンの表現者の展示、パルコキノシタや村上によるアートワークショップなどを実施しました。仙台市太白区長も参加されました。

●「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」

2021 in あすと長町復興公営住宅

開催日：2021年10月17日

場所：あすと長町復興公営住宅集会所(宮城県仙台市)

参加人数：23人

参加費：無料

内容：アート・インクルージョンの表現者の作品を展示し、あすと長町復興公営住宅住民に鑑賞してもらいました。

●「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」

2021

開催日：2022年3月22日～3月27日

場所：スペース・ゼロ(東京都渋谷区)

参加人数：293人

参加費：無料

内容：アーティストとアート・インクルージョンの障がいのある表現者が協働でアート作品の展示やVR作品などのバーチャル体験ができました。インクルーシブな表現の場を創る！コロナ禍でも表現活動を止めない！プロジェクトでもあります。



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

アーティスト・クリエイターの派遣による障がい者とのワークショップ・グッズ開発協働事業

魅力的な作品を創っている障がいのある表現者は多いにも関わらず、発表の場は少なく、工賃も低い状況です。アート・インクルージョンファクトリーに、クリエイターを月2回程度派遣し、当施設に通う障がい者と、展示用の制作やグッズ開発を行うワークショップなどを実施しました。また毎月SNSなどで情報の受発信を行い、コロナ禍で開発した障が

いのある表現者の作画を活用した新作のマスクをはじめ、アートグッズ、ノート、ペン、Tシャツ、小作品のアクセサリなどのマルチプルグッズを展示したり、ワークショップなどの発表の場で紹介や販売が行われ、障がい者の工賃向上に繋げることが出来ました。

「アーティストと障がい者」の拠点整備及び展覧会・トーク事業

仙台のB型福祉作業所「アート・インクルージョン・ファクトリー」内のスペースをはじめ、宮城県石巻市の「コトのアート研究所」内や大崎鳴子の古民家ギャラリー、軽トラを改造したオリジナルの移動ギャラリーを整備し、作品制作やワークショップ、展示などもできる交流拠点を増やし、コロナ禍でも活動できるようにしました。さらに仙台のJR長町駅前広場や復興公営住宅にも出張で展示やワークショップを実施しました。東京都渋谷区(SPACE ZERO)の「アーティストと障がい者」の展覧会では、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を行った上で、アーティスト・パルコキノシタや開発好明、東京の美術大学助手のアーティストらと、アート・インクルージョンの障がいのある表現者が協働でアート作品やインスタレーションなどの展示を行いました。また、移動ギャラリーでの展示ワークショップ事業を初めて開催しました。

トと障がい者」の展覧会では、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を行った上で、アーティスト・パルコキノシタや開発好明、東京の美術大学助手のアーティストらと、アート・インクルージョンの障がいのある表現者が協働でアート作品やインスタレーションなどの展示を行いました。また、移動ギャラリーでの展示ワークショップ事業を初めて開催しました。



事業実施における工夫

オンラインLIVEやQRコードなどで動画コンテンツを発信し、波及効果がありました。アーティスト・クリエイターの派遣による障がい者とのグッズ開発協働事業でも、新作マスクなど商品開発を行い販売する事で工賃向上を図りました。

また、宮城県内で活動している他の障がい者支援団体などとも連携し、アートのできるソーシャルインクルージョンの企画なども組み込み、今後の仙台市内・宮城県内での波及効果を図りました。

新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染拡大にともない、事業所でもテレワークを導入し人数制限での勤務となる中、ワークショップやパフォーマンスなどは一部オンラインLIVEでの展開となりました。

新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、実施スタッフは抗原検査キットを用いて直前に検査を行いました。また3密を避け人数制限や検温、アルコール消毒、連絡先記入など新型コロナ対策を行った上で実施しました。Web会議システム(Zoom)でミーティングを行ったり、QRコードでYouTube画像発信などICTも活用し実施しました。対面とは異なる取り組みとなりましたが「表現活動を止めない！」新たな展開や可能性を感じる結果となりました。また展示ワークショップも、軽トラを改造したオリジナルの移動ギャラリーでのアート・インクルージョンの表現者の展示などを行い、コロナ禍でも持続可能な表現活動ができる交流拠点整備となりました。

事業名 「ユニバーサル・アート」が花咲くまちづくり！ ～輝く共生社会実現に向けて～

団体名 特定非営利活動法人 いちかわ市民文化ネットワーク

所在地：千葉県市川市

URL：https://www.ichibun.net/

事業概要 障害者芸術文化活動を通して、生きいきとした共生文化の創造と交流、そして賑わいのある街(地域)を産み出すために、5カ年計画として「ユニバーサル・アートが花咲くまちづくり！」事業に取り組んでいる。今年度は1年目事業として、市内並びに隣接都市の方々とともに、シンポジウム、専門講師による身体表現とアートのワークショップ、レクチャー&交流カフェなどの実践的な取り組みを通して、共感的な協働ネットワーク「ユニバーサルアート・ネット」を構築。そして成果発表として、千葉県内の2つの文化施設での舞台パフォーマンス発表、美術作品展を文化施設とまちなか店舗で開催し、芸術と美術の合同イベント「ユニバーサルアート・フェスティバル」を実施する。

実施内容

●ユニバーサル・アートが花咲くまちづくり！シンポジウムと体験ワークショップ

開催日：2021年7月31日

場所：全日警ホール(市川市八幡市民会館)

対象：当事者、文化施設、芸術団体、障害者福祉事業所職員、企業、行政など、活動に興味のある方どなたでも参加自由。

参加人数：50名

参加費：1,000円

講師：吉原廣(市民文化プロデューサー・劇作家・演出家)、三橋綾子(流山生涯学習センター長)、安西真幸(振付師・ダンス講師)

内容：福祉事業所職員や障害者支援関係者が現場で実践できる「心と身体で遊ぶワークショップ」についてのレクチャーと、実際に参加者が体験するワークショップを実施しました。

●トーク&レクチャーカフェ(T&L)

開催日：①2021年8月21日 ②9月4日

③10月16日 ④12月5日

場所：①スペースにわにわ ②土曜café

③みどりtoゆかり ④アトリエローゼンホルツ

参加人数：①9人 ②10人 ③14人 ④8人

参加費：1,000円

内容：「ユニバーサル・アート」の発展像を巡って、講師を招き4テーマ別に学び語り合いました。

①《障害者の表現したい気持ちに寄り添い社会につなげる》

②《街とつながるアート》

③《福祉×アート×ビジネス》

④《視覚障害者と共に楽しむアート&プレイ》

将来の地域文化交流の拠点となるべき4会場を巡回して開催。事例紹介の後、サポート上の重要点を再確認することで、ある福祉事業所職員は自身のサポート場面に置き換えながら共感反省している姿が印象的でした。そして、日常生活や街の中にもアートがあることの発見や効果などを自由に意見交流できたことも、新鮮な成果がありました。

●ミラクル・アート展&パフォーマンス

開催日：①2022年2月4～6日

②2022年2月18～19日

場所：①市川市行徳文化ホールI&II

②千葉県文化会館大ホール

内容：市川市、千葉市とその近郊でアート活動を実施する7つの団体と個人で活動するアーティスト合わせて28名の作品を、2都市の文化会館ロビーと市川市内まちなか展示会場7店舗にて展示。11月に流山生涯学習センター(流山エルズ)を会場に開催しました。アートワークショップで生まれた、大きな共同作品もロビーを彩りました。また、障害のある人たちを中心に構成するパフォーマンス・カンパニー7団体が、ひとりひとりが輝くダンスや音楽のステージパフォーマンスを披露しました。創造と発表の機会を通して、街や人がつながる共生文化社会を目指します。

「トーク&レクチャーカフェ」の様子



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

出会う・話す・体験する。「心が動く」ところから共生文化社会がスタートする

シンポジウムでは、千葉県東葛地区の文化施設、芸術団体、障害者福祉事業所、企業、行政等の関係者とともに、障害者芸術文化活動の実情と要望、課題の把握、並びに事業推進に向けた協働ネットワーク「ユニバーサルアート・ネット」の結成をめざす力強いシンポジウムとなりました。また、文化施設からの報告では、ユニバーサルな取り組み事例の報告とともに、地域に必要とされる文化センターとしてのいくつかの困難な課題も報告されました。「からだ遊

びワークショップ」では、シンポジウム参加者が自らワークショップを体験することで、創造の喜びと楽しさを実感でき、共生文化社会への有効なアプローチとなると確信することが出来ました。「テーマ別グループ討議」では、①障害の種別や団体間の壁をどう超えるか？②地域の芸術文化の核をどう生み出すか？③支援と協働のあり方は？といったテーマを通して、ユニバーサルアートとまちづくりのグランドデザインをイメージしていきました。

人材育成と研修により豊かな創造機会が生まれ、障害者等の文化芸術の先駆的発展への期待

障害者芸術文化活動の実践団体や支援団体は、規模を拡大したり、分野の壁を超えることが困難です。今回の交流カフェを通して、分野を超えた交流の基本は「学びに新鮮

であり、交流に面白さあり」と確認し合えました。第1年度の4会場を地域の新たな拠点として協働ネットワークを拡大していきます。

「表現する」+「見てもらう」機会は自己肯定感を高め、そして人や街を元気にする

「ミラクル・アート展&パフォーマンス」では、身体表現活動とアート作品の発表と鑑賞の機会を創出することで、障害者の達成感や自己肯定感を高め、社会との豊かな関係を築く第一歩となることを目指しました。

在り方を検証し直すことで、共生文化芸術を中心とした理想的な街づくりへ展望を切り開こうと思います。「ユニバーサル・アートが花咲くまちづくり」が人を街を豊かに元気にすることを願っています。

さらに公的文化施設を始め、地域の市民芸術文化活動の

事業実施における工夫

私たちは、2005年以来、障害のある子どもや青年を中心にした舞台芸術活動である「チャレンジド・ミュージカル」を公演し続けて、「創造する楽しさと人間的成長」を享受してきました。そして、美術や工芸といった芸術文化と出会うことで「他分野の方々と協働する面白さ」を知り、また各地の文化振興財団や文化施設の方々と「地域に

おける文化施設の存在意義」についての議論も深めてきました。「固定のフィールドを超えて交流することがとても刺激的で、具体的な成果も大きい」と実践的に実感できれば、どんどん協働ネットワークを広げていけると確信しています。



「身体表現ワークショップ」の様子



「まちなかアート展」の様子



「アート表現ワークショップ」の様子

新型コロナウイルス感染症の影響

障害のある人や高齢者にとっては、感染を恐れて活動を停止することが文化的にも生命的にも致命的な悪影響となります。それ故に、感染防止に努めつつ、「活動成果をどう保証していくかを緻密に実践的に模索していく」ことが必要です。特に、参加者が不安やストレス等で孤立しないように、保護者を交えた細やかなコミュニケーションを深めるように心がけました。

舞台表現や身体表現では、制限が多いとはいえ、オンライン活動を積極的に取り入れる努力と工夫が必要でしたが、そのための経費の増額が主催者の大きな負担となりました。

事業名 ~いつでも、だれでも、どこへでも~

「ミュージアム・アクセス・センター」設立事業

団体名 NPO法人 エイブル・アート・ジャパン

所在地：東京都千代田区

URL : <http://www.ableart.org/>

事業概要 障害のある人がいつでも、だれでも、どこへでも、健常者と同じようにミュージアムを訪ね、かつ豊かな鑑賞体験を保障するためのサービスを提供する「ミュージアム・アクセス・センター」を設立する。センターに連絡をすれば、障害の特性に合わせた鑑賞ガイドや手話通訳者が紹介され、好きな時にどこのミュージアムにも出かけることができるようにすることを旨とする。まずはセンター設立の準備段階として、体制づくりと、持続的な事業を構築するため、ケーススタディを行うとともに、多様なステークホルダーへの調査を実施する。

実施内容

人材面とシステム面の2つのワーキンググループを立ち上げ、人材面のワーキンググループでは、各ステークホルダー（ミュージアム関係者、障害当事者、鑑賞サポーター等）ごとにミュージアムでの鑑賞に関するヒアリングを実施し、必要なサービスやプログラム、環境整備などのニーズを把握しました。事業モデル構築に関するワーキンググループでは、事業化に必要なシステムの構築と、自走可能な資金調達等について検討し、事業の立ち上げに向けた具体的なプランの構想を立てました。並行して、ミュージアム・アクセス・センターの概略やサービス、システム、運営方法などについて有識者と協議する機会を設けました。

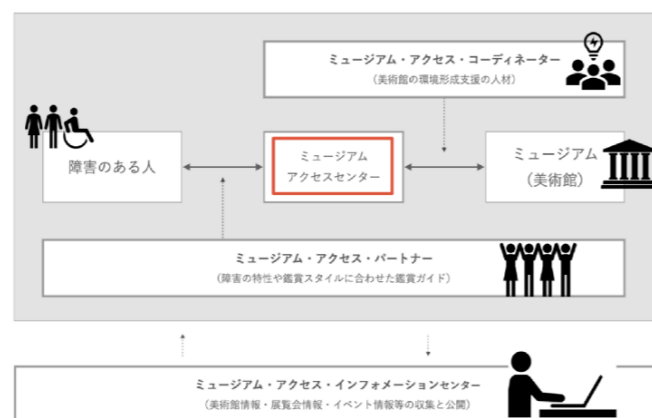
●ワーキンググループの各専門家、有識者による事業化検討の協議

- ①ワーキンググループによる会議の実施(21回)
- ②有識者との意見交換(3回)



ワーキンググループによる会議の様子

- ヒアリング調査
 - ①障害のある人のミュージアムにおける鑑賞に関する実態調査
 - ・当事者・支援者ヒアリング(25件)
 - 内 容：美術鑑賞の課題と現状、展覧会等の情報収集方法、困りごとへの工夫や対応策、ミュージアム・アクセス・センター構想への意見
 - 対 象：視覚障害、聴覚障害、発達障害、精神障害、身体障害、若年性認知症の当事者および支援者
 - ・ミュージアムヒアリング(10件)
 - 内 容：障害のある鑑賞者への取り組み、外部団体との連携について、今後の展望
 - 対 象：国内6館、海外4館
 - ②事業モデル構築のための事例調査(9件)
 - 内 容：全体構造のデザイン、協働の視点、人材育成、コミュニティ育成、社会投資



事業の構想図

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

いつでも、だれでも、どこへでも、ミュージアムへのアクセスが可能になる環境を保障する

現在、障害のある鑑賞者のための事業を継続的に展開しているミュージアムは、令和元年度の文化庁の実態調査によれば、わずか12%にとどまります。今回、障害のある鑑賞者のプログラム・環境整備に積極的・先進的に取り組む国内6件の美術館にヒアリングを実施しましたが、それらの館でも人員や予算の制約から、継続的な取り組みがむずかしい状況にありました。創作分野と比較して大きく

遅れている鑑賞分野の環境が向上するためには、ミュージアムの事情に左右されることなく作品やミュージアムへのアクセスを可能にすることが必要であり、そのためにはミュージアムが単独で課題に取り組むのではなく、本事業「ミュージアム・アクセス・センター」のような外部専門サービスの確立が必要であること、また求められていることが分かりました。

個々のニーズへの対応のための、「第3の存在」として期待される役割

本事業によって、鑑賞をしたい障害のある人「障害のある鑑賞者」と、「ミュージアム」の間をつなぐ「第3の存在」に期待されることが明らかになりました。

当事者のヒアリングからは、ニーズや課題は個々によって全く異なり、見たいときに、見たい方法(スタイル)で見るとともに、障害の特性に拠らないきめ細やかな鑑賞サービスが必要であること、国内ミュージアムのヒアリングか

らは、担当者が独自で対応している状況があり、他館と知見を共有し相談するための場が求められていることなどが感じられました。また、当事者や支援者からセンターを働き口として期待する声も挙がり、多様な人材と共に「第3の存在」として本事業を推進していくことができると考えます。

事業化を目指して—鑑賞支援のモデル 人材育成 ネットワークの創出

今後は、ビジネスモデル構築を見据えて、実際にケーススタディを行い、持続可能な鑑賞の事業モデル実施、鑑賞をサポートする各種人材の育成とパートナーシップの構築、ミュージアムのアクセシビリティに関する交流機会の創出を行っていきます。首都圏や地方都市など一部で運用を

実験的に開始し、その後全国各地で人材を募りノウハウを公開・共有することで、全国への展開を図り、日本中のミュージアムにおけるアクセシビリティの改善と向上を目指したいと考えています。

事業実施における工夫

本事業では、ミュージアム関係、障害関係からのアプローチに留まらず、IT関係者らとの協働を行い、人材のマッチングや、寄付をはじめ資金調達の新しい仕組みも含めた、

ミュージアム・アクセス・センターを支える新しいスキームや、社会的なムーブメントを構築しようとしています。

新型コロナウイルス感染症の影響

ヒアリング調査はほぼ全ての回でオンラインのビデオ会議ツールを用いて実施しました。当事者のヒアリングでは、対象者に協力いただきながらオンライン上で十分な情報保障を行えるよう確認しました。聴覚障害のある人とのヒアリングでは、手話通訳のほかに、本人のニーズに合わせて文字通訳やUDトークを活用しました。また知的障害のある人や精神障害のある人とのヒアリングでは、個々の認識に合わせて、分かりやすい言葉や図を用いたヒアリングの承諾書や調査の説明資料を作成しました。

事業名 障害者による文化芸術活動の推進に関する実態把握事業

団体名 **株式会社 ニッセイ基礎研究所**

所在地：東京都千代田区

URL：https://www.nli-research.co.jp/

事業概要 令和2年度までに実施された障害者の文化芸術活動に関する調査研究や実態把握を踏まえながら、各芸術分野の統括団体や先行モデル団体等にヒアリング調査を実施。また、様々な障害種別の当事者団体や支援団体、文化芸術関係の中間支援団体などにもヒアリング調査を行い、次期の「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」(以下「基本計画」)の策定に向けて、障害者による文化芸術活動に関する文化芸術団体の取組状況を把握・分析する。

実施内容

以下の事業を、文化庁と協議の上、各回2時間程度で実施しました。

●各分野統括団体のヒアリング

開催日：2021年9月1日、8日、10日 各回2時間程度

場所：オンライン

内容：公益社団法人日本芸能実演家団体協議会の正会員団体、及び文化庁の委託事業実施団体を傘下を持つ統括団体などから、音楽、舞踊、演劇、美術など各芸術分野の統括団体8団体(各団体1～3名の参加で計15名)に、以下の項目のヒアリングを実施しました。

- 障害者を対象とした文化芸術活動の先行モデル(鑑賞、創造、発表、交流等)
- 障害者を対象とした文化芸術活動の現状や課題(環境、人材、財源、理解等)
- 障害者を対象とした文化芸術活動における連携の在り方(文化芸術団体と障害福祉団体、行政と民間、中間支援団体等)
- 障害者の文化芸術活動の推進における文化芸術団体及び統括団体の役割と今後の可能性

●先行モデル団体のヒアリング

開催日：2022年2月4日、7日、21日 各回2時間程度

場所：オンライン

内容：上記の「各分野統括団体のヒアリング」で情報を収集した先行モデルに加え、専門研究会からの助言や情報提供、インターネット検索等を行い、各芸術分野において障害者の文化芸術活動に取り組む先行モデル団体20団体に、以下の項目のヒアリングを実施しました。

- 障害者を対象とした文化芸術活動の実績、取り組み内容(鑑賞、創造、発表、交流等)、成果
- 障害者を対象とした文化芸術活動に必要な配慮や工夫(アクセシビリティ、支援方法等)
- 障害者を対象とした文化芸術活動に取り組む際の問題点、課題
- 障害者を対象とした文化芸術活動での連携すべき機関や連携方法(文化施設、障害者福祉施設、障害者芸術文化活動支援センター等)
- 障害者の文化芸術活動の推進における文化芸術団体の役割と今後の可能性

●関連調査の整理・分析

開催日：2021年7月～2022年2月

内容：文化庁と厚生労働省による過去の既存調査のポイントを抽出・整理し、障害者による文化芸術活動の取組状況の現状や課題について、障害者文化芸術推進法に定められた11の基本施策ごとに整理しました。

文化庁：障害者文化芸術活動推進に向けた劇場・音楽堂等取組状況調査(令和2年度)、障害者による文化芸術活動の推進に向けた全国の美術館等における実態調査(令和元年度)、障害者の文化芸術の鑑賞活動及び創作活動実態調査(平成29年度)

厚生労働省：全国の障害者による文化芸術活動の実態把握に資する基礎調査(令和2年度)、全国の障害福祉サービス事業所等における文化芸術活動の実態に関する基礎調査のための研究(令和元年度)

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

●専門家研究会

開催日：(第1回)2021年7月6日、16日

(第2回)2022年2月28日、3月7日

場所：オンライン

内容：専門家による研究会を設置し、調査の進め方、ヒアリング対象、調査結果の分析や考察について、専門的な見地から助言を得ました。専門家は、文化庁と協議のうえ、障害者の文化芸術活動、文化芸術団体の運営、文化政策などに詳しい5名を選出し、2回の研究会を実施しました。

●当事者・支援団体ヒアリング調査

開催日：2022年2月14日、15日、22日

場所：オンライン

内容：「2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた障害者の文化芸術活動を推進する全国ネットワーク」の構成団体、障害者による文化芸術活動を支援する団体26団体に、以下の項目のヒアリングを実施しました。

- これまでの障害者文化芸術活動に関する取組等
- 第1期障害者文化芸術活動推進基本計画期間の現状認識について
- 第2期障害者文化芸術活動推進基本計画に期待すること

事業の効果

幅広い芸術分野の取組を把握し、次期の基本計画策定に有益なデータ収集ができたこと

厚生労働省による障害福祉サービス事業所等への試行調査(令和元年度)と、障害福祉施設、障害当事者、障害者芸術文化活動支援センターを対象とした全国調査(令和2年度)の結果を参照することで、文化芸術振興と障害福祉の両面から、施策の成果や課題について検証しました。文化施設での障害者を対象とした取組や、障害福祉施設での文化芸術活動等の「施設」に焦点を当てた調査では、美術分野での活動が多く割合を占めました。そこで本事業で

は、芸術活動を専門的・継続的に実践する「団体(または個人)」を調査対象としたところ、音楽、舞踊、演劇などの幅広い芸術分野で、障害者を対象とした取組を把握出来ました。また、施策を具体化する方法が、芸術分野での創作方法、表現様式、創作者(実演者)と鑑賞者との関わり方によって異なりました。こうした結果を活用することで、次期の基本計画での施策や事業の立案に際して、戦略的に検討することができると考えます。

全国各地のモデル事例を収集し、異分野、異なる地域の情報や意見の交換ができたこと

先行モデル事例の情報収集にあたっては、東京都、大阪府といった大都市以外に活動拠点を置く芸術団体や芸術家に関する情報収集と、活動拠点の地域バランスに配慮しました。統括団体へのヒアリングや専門家研究委員会の意見をベースとした第1次リスト(58団体)では、地域別の割合が東京都36%、東京都以外が64%で、芸術分野別では舞踊29%、美術26%、演劇26%、音楽12%、中間支援7%となりました。文化庁との協議を踏まえた団体のヒアリング対象(20団体)では、東京都40%、東京都以

外60%で、舞踊25%、美術、音楽、演劇がそれぞれ20%、中間支援15%となりました。また、ヒアリングではグループインタビュー形式を採用し、同じグループで、異なる芸術分野や異なる地域の団体が情報や意見を交換することが出来ました。それにより、障害者の文化芸術活動を牽引する団体間での経験や知見を共有し、お互いに刺激を受けながら、今後の活動への示唆やアイデアが得られることができたと考えます。

事業実施における工夫

弊社では、厚生労働省による障害者総合福祉推進事業で令和元年度と2年度に実施した「全国の障害者による文化芸術活動の実態把握に資する基礎調査」などの実績がありました。令和2年度調査では約4万7千件の全国の障害福祉施設を対象としたアンケート調査、全国7ブロックの都道府県・障害者芸術文化活動支援センター対象の研

修で、計7日間で約100人にグループインタビューを行いました。昨年度までの調査プロセスで培われた人的なつながりに加えて、これまでの文化芸術分野に特化した調査研究の情報の蓄積やネットワークを、今年度の事業に最大限に活用することが出来ました。

新型コロナウイルス感染症の影響

当初は、すべての参加者に一つの会場に参集していただき、対面形式でのグループインタビューを実施する予定でしたが、すべてのグループインタビューをオンラインに変更しました。対面形式ならではの親密な交流は適いませんでしたが、移動や宿泊等、地理的な条件が問われないため、集まりやすかった点も挙げられます。また、オンラインでは聴覚障害のある参加者のためのUDトークや手話通訳者の手配など、情報保障にも配慮しました。

団体名 株式会社 朝日新聞社

所在地：東京都中央区

URL：https://www.asahi.com/corporate/

事業概要

視覚障害のある高校生たちが、声による伝え方の多様性を学ぶことで、自分自身の可能性を再発見することを目指すプロジェクト。声の演技の第一人者である人気声優を、講師として全国の盲学校に派遣し、特別出張授業を開催。子どもたちに、声の演技の基礎体験を通じて、気持ちを声にのせることの大切さやその方法を学んでもらう。視覚障害児および晴眼児の高校生を集め、「インクルーシブ合宿」を開催し、朗読劇を共同で作りに上げる。最後に、これらの取り組みを発表するPODCAST配信番組を制作。

実施内容

●特別出張授業(のべ5回開催)

開催日①:2021年7月12日

場所:筑波大学附属視覚特別支援学校

内容:高等部朗読劇発表会に特別審査員として、声優・水田わさびさんを派遣しました。生徒の朗読劇を鑑賞し審査するほか、水田さんが独自の視点で輝いていた生徒を選び、「声のカプロジェクト賞」を授与しました。

開催日②:2021年11月19日

場所:香川県立盲学校

内容:声優・山口由里子さんを講師として派遣。発声練習や呼吸法・感情表現を行った後、応用編として詩の朗読を行いました。

開催日③:2021年11月23日

場所:筑波大学附属視覚特別支援学校

内容:声優・古川登志夫さんを講師として派遣。発声練習や呼吸法・表現のテクニックを学んだ後、応用編として長いセリフを使った感情表現の練習を行いました。

開催日④:2021年12月3日

場所:群馬県立盲学校

内容:声優・水田わさびさんを講師として派遣。発声練習や呼吸法・感情表現を行った後、応用編として水田さんオリジナルの詩の朗読を行いました。

開催日⑤:2021年12月20日

場所:北海道札幌視覚支援学校

※通常学級の高1,高2・19名が参観し、道内の盲学校3校(旭川・函館・帯広)にもオンライン配信を実施しました。

内容:声優・三上枝織さんを講師として派遣。発声練習や呼吸法・感情表現を行った後、応用編として「へえっていうゲーム」で気持ちや背景を言葉にのせる練習を実施しました。

●インクルーシブ合宿の開催

新型コロナウイルス感染防止対策のため、3回にわたる集中講義の形式に変更しました。協力企業である青二プロダクションの声優養成所・青二塾の稽古場およびスタジオを借りて、高校生たちに本格的な声の表現体験を積んでもらいました。

開催日:2022年1月30日、2月12日、20日
(各日14:00~16:00)

場所:青二塾/AIONスタジオ(東京都港区)

対象:筑波大学附属視覚特別支援学校 6名、
筑波大学附属高等学校 3名

講師:古川登志夫さん(声優)、柿沼紫乃さん(声優)

内容:視覚障害のある高校生6名と晴眼者である高校生3名に、本格的な声の表現体験を受けてもらい、共同してラジオドラマの制作・発表を行いました。3週連続で集中して参加してもらい、声による表現のスキルアップだけでなく、障害の有無に関わらずお互いの理解を深めることを目的としました。台本は、講師の古川さん・柿沼さん書下ろしによるオリジナルのものを使用。収録したラジオドラマは、朝日新聞PODCAST、朝日新聞、本プロジェクト特設サイト、声優専門雑誌「声優グランプリ」HP、青二プロダクションHPで公開しました。



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

機会の提供とそれによって自身の可能性を広げる

視覚障害があり盲学校に通う子どもたちは、普通学級の子どもたちと比較すると、何かに挑戦する機会が少ない傾向にあり、地方では更に顕著になります。本事業では全国の盲学校を対象に一流の声優による声の表現の出張授業を行い、生徒たちに「声に自分の想いをのせる方法」とその大切さを学ぶ機会を提供しています。ドラえもんやピッコロなど、誰もが知るアニメのキャラクターの声を務める第一線で活躍する声優が、目の前で授業を行うことは、子どもたちにとって貴重な経験であり、より多くの子どもたちに

授業を行い続けることが重要であると考えます。そして授業の中で子どもたちそれぞれが声の表現で喜怒哀楽が伝えられること、ちょっと言い方を変えることでこんなにも相手に気持ちが伝わるのか、ということを実感してもらい、その表現を自分たちができていることに気付いてもらいます。声の表現を日常生活や日々のコミュニケーションで生かしてもらい、自信を積み重ねて自分たちの世界をより広げていってもらうことを期待しています。

障害の有無にかかわらず相互理解と、障害に対する社会の理解向上

インクルーシブ集中講義では、視覚障害のある高校生と、晴眼者である高校生に共同で作品制作に取り組んでもらっています。アニメや声優が好き、という共通のテーマがあり、複数回にわたって共同作業を行うことで、例年最終日にはとても仲が良くなっています。障害の有無に関わらずお互いを理解しあうようになることは、共生社会創出への大きな一歩であると考えます。また、今の社会全体は、障害者といわゆる健常者が接する機会が極端に少なく、駅のホームドアや点字ブロックの必要性などの、視覚障害に対しての理解が依然低いまです。まずは、視覚障害がど

ういった障害で、普段どのような風に暮らし、どのようなサポートや声掛けが必要なのか、といった基本的なことを、より多くの人を知ることが必要であると考えます。そのため、本事業ではメディアを使った情報発信にも力を入れており、特設サイトには現役の学生記者に取材・執筆してもらったレポートの掲載など、志の高い学生たちと創るウェブサイトを設置しています。今の社会の担い手はもちろん、これから社会の重要な担い手になる層の、視覚障害に対するリテラシー向上に貢献できていると考えます。



事業実施における工夫

学校での出張授業をメインの事業としており、学校および担当の先生が本プロジェクトに参加しやすいよう、柔軟に対応することが、重要であると考えました。学校ごとに、生徒数や生徒の特性・重複障害学級の規模や、授業方針が異なるので、学校の希望をうかがいながら、授業をカスタマイ

ズしました。また、先生とのやり取りに重要な授業計画書をあらかじめ作り、事前に共有しておくこと、学校内での申請にかかる先生の負担が少なく済み、より先生の協力を得られやすくなりました。

新型コロナウイルス感染症の影響

学校からはオフラインでの開催を望む声が大きく、今年度は、開催時期を調整し、出張授業はほぼオフラインで開催することができ、前年度オンラインだった学校に直接出張授業を行うことができたため、講師・生徒双方の喜びもひとしおでした。インクルーシブ集中講義については、オミクロン株が猛威を振るう最中での開催のため、参加者全員に抗原検査を行い、さらに講師と生徒がいる部屋を分けて、ビル内リモート授業という形で開催しました。

多様性を育むダンス&美術プロジェクト- 障害のあるアーティストの発掘&育成、ファシリ テーター育成、及び発表の場づくり

クリエイティブ・アート実行委員会

所在地：東京都港区

URL：https://muse-creative-kyo.com/

クリエイティブ・アート実行委員会は、障害の有無や年齢、性別、民族の違いに関わらず、自らとコミュニティのアイデンティティを同時に表現できる活動を提供するとともに、新しいアートと社会のあり方を探求してきた。本事業では障害のある人達と障害のない人達がそれぞれ異なる創造性を学びあいながら、美術・ダンス事業において主に東京でワークショップを実践し、ファシリテーター育成を行う。そのほか美術では、視覚障害者を中心とした作品制作活動の他に、鑑賞する活動と、展覧会を東京および地方で開催し、ダンス事業では、地方でワークショップと公演を開催する。

実施内容

●多様性を育む美術プロジェクト

触覚を通じた彫刻の鑑賞ワークショップと、触覚における体験ワークショップ・トークを開催しました。素材の選択やつくり手の思い、考えがどのように形になっているのかなど、ふれる鑑賞を通して作品の本質に迫りました。また、製作した作品を展示して展覧会も開催しました。

開催日：【絵画】2021年6月5日、7月10日、8月8日、9月4日、10月9日、23日、12月11日、2022年1月8日、2月12日 【造形・粘土】6月6日、19日、7月4日、11日 【造形・ファブリック】7月25日、8月1日、29日、9月5日 【造形・紙】2022年2月19日

場 所：北区文化芸術活動拠点ココキタ等(東京都)

参加費：障害のない人4,500円/1回
障害のある人2,500円/1回

【ファシリテーション】

場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都)

対 象：造形活動の指導を行なっている人、指導的立場を目指す人、ファシリテーションに関心のある人

参加費：(全3回)13,500円

参加人数：各回2人

【触覚とアート・ワークショップ&トークシリーズ】

①触覚を探検するワークショップ&トーク

開催日：2021年7月31日

場 所：ビジョン・センター(神奈川県)

参加人数：113人

②さわって体験するワークショップ&トーク

開催日：2021年9月11日

参加人数：30人

参加費：晴眼者・視覚障害者：1,500円

(ライブ配信)：1,000円(視覚障害者無料)

【彫刻の鑑賞ワークショップ・シリーズ】

①「彫刻のおもしろさにふれる -具象からの出発」

場 所：北区文化芸術活動拠点ココキタ

②「空間の芸術にふれる -「場」の探究」

場 所：神奈川県立近代美術館 葉山

【展覧会】

絵画、造形ワークショップで制作された作品を展示し、発表の場をつくりました。

場 所：勝央美術文学館(岡山県)、
アーツ千代田3331(東京都)

●多様性を育むダンス・プロジェクト 響と踊ろう

「インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響-kyo-」のダンサーと共に、障害のある方、ない方それぞれ異なる身体の動きや特性を活かしながらダンスをつくっていくワークショップを実施しました。ダンスの型やステップにとらわれず、自由に身体と遊んでみるコミュニケーション・ダンスで、午前午後に分かれてワークショップを実施しました。

場 所：新宿村スタジオ、本町区民会館/大集会室等(東京都)

【地方公演】

場 所：仙台銀行ホール、イズミティ21小ホール(宮城県)

参加人数：ゲネ公開112人、本番120人



造形ワークショップ



絵画ワークショップ

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

創造的な活動を通じてアートの可能性を模索—障害のあるアーティストの発掘・育成、発表の場づくり

定期的にワークショップを開催することで、障害のある人達とない人達が共に活動する場を提供するだけでなく、今年度は主に視覚に障害のある人達を対象に観賞プログラムを導入し、触覚による造形活動だけでなく、触覚により美術作品をどのように享受するのかを考え、体験できる機会づくりを積極的に行なうことで、障害のあるアティ

ストの育成について多角的に取り組みました。また、社会の意識を変えていくことにつなげるため、昨年と同様、障害のある人の質の高い美術作品を紹介する展覧会、障害のあるダンサーを含むカンパニーのダンス公演を行い、プロフェッショナルなアーティストとしての活動を紹介しました。

質の高い指導者(ファシリテーター)の育成と地方へのネットワークづくり

ファシリテーター育成ワークショップでは、美術、ダンスとともに、実際にどのように現場をリードしていくのかという視点で参加者自らが考えるという実践的側面を強化することを心がけました。コロナウィルス感染症の影響で、地方でのワークショップの開催が難しい現状でしたが、岐阜県障がい者芸術文化支援センターとの共催により、長年障害者との造形活動を行なっている西村陽平氏を講師にオンラインでのトークを開催し、支援者の輪をさらに広げていくことを試みました。また触覚とアート・シリーズでは、オンラインでの参加を積極的に導入し、地方からも参加し

やすい仕組みづくりを行なったことで、今まで以上に、活動を広く知ってもらうことが出来ました。ダンスのワークショップ(響と踊ろう)は、午前中は指導者向けのファシリテーション・ワークショップとして地元の特別支援学校教諭の方々、ダンス教室の方々向けに実施しました。障害者を含むインテグレイテッド・ダンス・カンパニー響-Kyoの地方公演は、コロナウィルス感染症のために仙台市1か所だけになりましたが、障害のある人達の質の高い豊かな舞踊芸術活動の場を作り出し、地方の方々に鑑賞してもらう機会を継続的に展開することが出来ました。



ダンスワークショップ「響と踊ろう」の様子



仙台公演

事業実施における工夫

クリエイティブ・アート実行委員会は、1990年から一貫して障害のある人、また、アートにアクセスする機会の少ない人々との活動を行っています。障害のある方々との表現活動に関心があり、アーティスト力のあるアーティストに関わってもらおうということを一貫して続けることで、参加者の創造力を引き出し、質の高い作品が生み出すこと

に重点を置いています。広報では点字チラシを作成し、障害者施設・盲学校に重点的にチラシの配布をするだけでなく、HPをリニューアルして情報をわかりやすく掲示したほか、SNSなどを使って効果的に情報が届けられるように工夫しました。

新型コロナウイルス感染症の影響

感染症の波が一旦おさまった6月に活動を開始しましたが、夏の緊急事態宣言の発令により、特に地方での活動の実施は困難でした。美術では触覚とアートのトークシリーズにオンラインを導入、岡山での展覧会は閉幕後もWEB上で紹介したりと、オンラインの利用に積極的に取り組みました。一方、全体的にワークショップの人数を制限し、また参加者もコロナの感染拡大の状況によってキャンセルが増えるなど、昨年同様に集客には苦労をしました。1月以降の感染拡大においては、ワークショップのキャンセル、また、日程変更を余儀なくされました。ワークショップの参加者には検温、手洗いなどをしていただき、定員を決めることで、三密を回避して開催し、オンライン配信で実際に会場に来られない方にも内容を届ける取り組みをしました。

事業名 バレエによるインクルージョン促進事業

団体名 公益財団法人 スターダンサーズ・バレエ団

所在地：東京都港区

URL：https://www.sdballet.com/

事業概要

当法人では、以前より「リラックスパフォーマンス」による公演を実践している。リラックスパフォーマンス(原語:Relaxed Performance)とは、自閉症やコミュニケーション障害、学習障害などにより、通常の劇場環境になじむことが難しい人たちやその家族が、よりリラックスした環境で舞台鑑賞を楽しめるように、と英国で発祥した公演形態で、シェークスピア・グローブ座をはじめ、英国内の主要な劇場やバレエ団を中心に広がりを見せている。

実施内容

●リラックスパフォーマンス

「白鳥の湖」(全1幕)&「迷子の青虫さん」

開催日①:2022年2月6日

場所:彩の国さいたま芸術劇場

参加者数:344名

開催日②:2022年2月23日

場所:愛知県芸術劇場

参加者数:785名

参加費:一般4,000円/子ども2,000円

※子どもは4歳~高校生。4歳未満入場不可。

内容:「白鳥の湖」と「迷子の青虫さん」をリラックスパフォーマンスの形態で上演しました。古典バレエの名作「白鳥の湖」は45分に凝縮し、初心者でもわかるように解説付きでお届けしました。個性豊かな虫たちの世界がバレエになった「迷子の青虫さん」は、小さな生き物たちの小さな世界を描いた新感覚のバレエです。この2作品を、普通のバレエ公演より少しだけリラックスした雰囲気の中、自閉症やADHDの症状などによりちょっとした支えを必要とする方々、バレエ鑑賞が初めての方も、構えずにリラックスして鑑賞を楽しんでいただけました。



「白鳥の湖」より

上演するプログラムの内容は変えることなく通常のバレエ公演で求められる鑑賞マナーを以下のように緩和しました。

- ・上演中でも、休憩が必要になった場合、客席の外に出ることができる。
- ・客席の照明を完全に暗くしない。
- ・突然大きな音が出る場面は、ボリュームに配慮する。
- ・完全な静寂ではなくても、皆で鑑賞を楽しめる環境づくりに努める。
- ・車いす席を用意する。
- ・特設サイトでの事前の情報共有により、ご家族や同伴の方の不安を和らげる。



「迷子の青虫さん」より



開演前に物語とマイム(手の動き)の解説

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

障害のある人たちに、本格的なバレエの鑑賞機会を提供

本事業では、これまで劇場での舞台鑑賞が難しかった人々に、本格的なバレエ公演の鑑賞機会を提供することを目指しました。また、障害のある人だけを対象とするのではなく、

障害のある人も一緒に楽しめる公演として提供することで、個々の多様性を受け入れるインクルーシブな社会の実現に寄与することが期待できます。

リラックスパフォーマンスのコンセプトを周知させたい

リラックスパフォーマンスをこれまで実施するなかで、視覚や聴覚に障害のある人の鑑賞サポートつきの公演だと思って来場されたお客様や、通常のバレエ公演を想定して来場

されたお客様がいました。この事実を踏まえて「リラックスパフォーマンス」というコンセプトを、よりわかりやすく周知させることが課題であると考えています。

事業実施における工夫

①リラックスパフォーマンス形態の導入

バレエを含む通常の舞台公演鑑賞は、自閉症や学習障害をもつ人々にとっては耐え難い困難を伴うため、不安を煽るものをできるだけ除外するために、下記を実施しました。

- ・公演ガイドとなる特設サイトを設置…当日の詳細スケジュールや劇場の様子が事前にわかることで、不安を取り除く。
- ・上演前の事前アナウンス…開演前に行うプレトークにて、リラックスパフォーマンス形態の説明を行う。
- ・照明の調整…上演中も完全な暗転は避ける。
- ・休憩エリアの設置…鑑賞中に気分を休めることができる休憩エリアをロビーに設置し、舞台の様子が見られるようにモニターも用意する。
- ・上演中の客席の出入りを可能にし、無理なく鑑賞する環境を作る。
- ・通常の鑑賞マナーを緩和した公演であることをチラシや特設サイトに明記し、リラックスパフォーマンスの趣旨の周知と障がいのある方を受け入れる雰囲気醸成に努める。

②演目の選定

バレエを初めて鑑賞する観客、特に次代を担う子どもを多く惹きつけるために、バレエといえどもが思い浮かべる「白鳥の湖」と、小さな生き物たちの小さな世界を描いた新感覚のバレエ「迷子の青虫さん」を選択しました。「白鳥の湖」は短縮版でありながら、ストーリーの流れを損なうことなく、オリジナルの魅力が凝縮されるよう演出に工夫をしています。また、バレエの予備知識がなくてもストーリーを理解できるように、あらすじの解説をしました。

③料金設定

障がいのある子ども・家族のいる家庭にとっては、最後まで観ることができるかわからない公演のチケット購入は、無駄になるかもしれない出費であり、額が大きければ大きいほどリスクとなるため、障がいのある人と一緒に「行ってみよう」と思えるような適正な価格を検討しました。

新型コロナウイルス感染症の影響

【影響】

・開催地域周辺の特別支援学校等でのワークショップの実施・特別支援学校ダンス部との共演を中止。

【対応】

・オンラインでのワークショップを検討し、実施。

事業名 社会と知的障がい者施設を演劇でつなぎ、地域のプラットフォームをつくる事業

団体名 一般社団法人 日本演出者協会

所在地：東京都新宿区

URL：https://www.jda.jp/

事業概要

「演劇で人と人、地域・社会と人をつなげる」ことを目標とし、演劇表現活動により施設利用者の社会参加を促すとともに、施設への偏見をなくし、地域の共生社会実現に向けた取り組み。福祉施設の利用者との取り組みでは、2020年にはコロナ禍で実現できなかった、対面での演劇ワークショップによる短編劇の創作、発表会を実施。地域とつながることが目的の一つであるため、公演場所を施設屋上テラスとし、利用者44名全員参加による演劇創作にチャレンジし、表現する楽しさ、共同で創作する楽しさ、自信の獲得を目指す。

実施内容

東京多摩学園の利用者・職員とともに、短編劇「奥多摩しいたけ物語」を創作し、100名以上の観客を集め、施設の屋上テラスで上演しました。また、オンラインによるシンポジウムを実施し、ネットワークを拡げました。

創作に向けて、まず利用者、職員、園長と内容の意見交換を実施。講師間で協議し構想を決め、ワークショップと稽古を重ね、実施しました。

●施設利用者・職員向け演劇ワークショップ

開催日：2021年8月21日～11月3日

会場：東京多摩学園

参加人数：利用者44名、職員9名

参加費：なし

内容：計16回実施し、1日3時間半の稽古に利用者4名、職員9名が参加しました。演技・ダンス・音楽に分けた対面による演劇ワークショップと短編劇「奥多摩しいたけ物語」は、シアターゲームからスタートして、参加者の可能性と魅力を引き出しながら、台本への組み込みを行いました。また、舞台美術の一部を製作するワークショップも行い、演劇に親近感を持ってもらえるよう努めました。

●小公演「奥多摩しいたけ物語」

開催日：2021年11月3日

場所：東京多摩学園 屋上テラス

参加人数：(出演)利用者44名、施設職員9名
(観客)100名以上

内容：奥多摩の山並みに囲まれた施設の屋外テラスに上演スペースとパイプ椅子の客席を設置し、上演しました。地域の方々に観てもらうために、実行委員による直接の声掛け、町役場による回覧板、置きチラシ、ツイッターにより広報しました。当日は送迎車も用意し、100名以上の観客が来場し、アフタートーク、質疑応答も実施しました。

●シンポジウム「障がいのある人たちとつくる演劇の可能性！」2回実施

開催日：①2021年8月9日 ②12月5日

参加人数：①78名 ②58名

内容：①は宮崎県のこふく劇場を主宰する永山智行、奈良県のたんぼぼの家アートセンター HANAの佐藤拓道、石川県を中心に社会包摂活動をしている黒田百合の3名をゲストに、②は佐賀県の佐賀大学小松原修、東京都のダンスカンパニータバマ企画の田畑真希の2名で実施しました。障がい者施設関係者と演劇人の学びと交流の場になりました。



演劇ワークショップの様子



公演当日の様子



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

利用者の魅力を最大限伝えるための台本づくり

今年度は東京多摩学園の利用者44名全員が出演することを目標に、一人一人の得意不得意なことを知るためのワークショップを2日間行いました。また今回「共演者」となった山下園長及び職員スタッフと話し合い、日頃の利用者の方の言葉をそのまま台詞にしたり、質問に答える形としました。上演台本は、自然と共存している多摩学園の

成り立ちと日頃の利用者さんの営みを取材して、しいたけ作りの日々と自然との繋がりをファンタジーとして表現する構成に組み立てました。実際の営みを伝えることを内容としたことで、利用者さんも職員の皆さんも生き生きと演じられ、観客の皆さんには喜びと学びの場となったように思います。

利用者さんと職員の参加による演劇創作のチャレンジ

もう一つの目標の、職員の皆さんの参加も実現出来ました。このことによって施設内での繋がりが強くなりました。稽古では利用者さんが互いに助け合い、認め合っている姿が随所に増えていきました。出番のない時も仲間の練習に見入り、出番になると意気揚々と登場する姿に、全員で一つの作品を創っている意識が共有されていたと思います。特に進行役の軽度利用の2名は、自分たちの台詞

で大変にも関わらず周囲に気を配り、重度の方をフォローし、舞台作りの要となっていました。本番ではシーン毎に拍手と笑いが沸き起こり、アクシデントも俳優の魅力につながり、むしろ一番の出来を見せてくれました。障がいがあってもなくてもみんな繋がって、共に楽しむ演劇となりました。他の施設の方からは、利用者さんとの普段の関わり方の参考になったとの声をいただきました。

美術・衣装などのビジュアルリティが意欲を生み、理解を助ける

「自分達で作る上げる」感覚を大切にするため、利用者の方へ舞台美術のワークショップを行い、創作に加わってもらいました。奥多摩の豊かな自然を表現する様々な虫の絵を描いてもらい、それをセットに貼り付け、またスズランテープによる飾りを創作しました。自分たちの作ったものが飾られていることに、嬉々として「これ私が描いたよ！作った

よ！」と伝える姿は自信に溢れ、演劇創作を意欲的に楽しんだことがよく分かりました。また、花・虫・猿・しいたけなどの役には、わかりやすくカラフルな衣装を創作し着用してもらうことで、その役を楽しむ大きなきっかけとなりました。障がいがある参加者の才能を様々な活かす一例となったように思います。

シンポジウムによって新たな学びと相談の繋がりが生まれた

全国各地の福祉施設の関係者、公共劇場の職員が視聴され、多くの質問・意見交換があり、このような場の必要性を強く感じました。座談会を別に設け、それぞれの問題点を

を話し合ったこと、終了後にも連絡を取り合っていることは、この取り組みの大きな成果だと考えています。

事業実施における工夫

日本演出者協会は、全国の約600人の演出者の団体のため、各地での施設の状況や、社会包摂活動の状況を知ることができます。また海外の社会包摂事業の研修に行った演出者、自身が障がいを持っている演出者も社会包摂部員にあり、国際演劇交流セミナーにおいて海外の講師を招いての講座も継続していることが強みであり、特徴だと考

えています。今後このような事業をする際は、まず低予算で身近な素材でできることが重要なポイントだと感じます。また既成の演劇の方法に捕らわれず、利用者の日常の言葉や行動から「楽しくみんなでつくる」ことが重要であり、幸福に繋がるポイントだと思います。

新型コロナウイルス感染症の影響

訪問前の対策として、関係者は検温による体調管理と、訪問毎にPCR検査を受け、陰性確認を義務づけました。訪問時には、JR奥多摩駅のトイレで「マスク交換・手洗い・うがい・全身殺菌(市販スプレー使用)」をルール化。施設では学園の対策に沿って行動し、入園時は玄関で「検温・手指消毒」、「氏名・団体名・体温」の記録を残しました。園内で、講師・スタッフはマスク着用とし、ワークショップ・本番当日も徹底しました。

事業名 やってみようプロジェクト

団体名 公益社団法人 日本劇団協議会

所在地：東京都新宿区

URL：http://www.gekidankyo.or.jp/

事業概要

演劇によるコミュニケーションワークショップを通してつながりを持ち、生きづらさを感じることのない「共生社会の実現」を目指して活動している。今回の事業では地域の劇場やNPO・福祉施設・大学などと連携し、多様な「社会包摂型プログラム」を展開。共有する楽しさ、コミュニケーションの楽しさなどを体感するワークショップを開催するとともに、このような活動が参加者・社会に与える影響について調査分析を行う。

実施内容

秋田、東京、埼玉、兵庫、沖縄で、高齢者や在日外国人、特別支援学校や児童養護施設など、さまざまな方を対象に、演劇的手法を用いたワークショップを実施しました。

●「にほんごであそぼう」in 小野市

開催日：2021年7月、2022年1月

場所：小野市うるおい交流館エクラ(兵庫県小野市)

参加人数：129人(延べ)

参加費：無料

内容：在日外国人が、安心して「にほんご」を話せる場をつくり、地域の外国人同士、日本人とのコミュニケーションを体験するワークショップ。身近な生活を題材にした場面や風景などを取り入れ、ジェスチャーゲームやグループ創作などを行いました。今年度は外国人家族対象の回も企画し、0才～中学生の子どもたちも多く参加しました。

●「医療的ケアを要する在宅医療児とその家族の災害時の共助のあり方について考える演劇ワークショップ」

開催日：2021年8月～12月

場所：公立大学法人 名桜大学(沖縄県名護市)

参加人数：324名(延べ)

参加費：無料

内容：台風襲来の多い沖縄県において、避難生活が困難になる医療的ケアが必要な医療児と、その家族の共助のあり方を考えるワークショップを実施しました。名桜大学看護学科の学生とともに、避難所を想定したトラブルを「シミュレーション演劇」としてグループごとに制作し、具体的な支援のあり方、コミュニケーション方法について考えました。最終回は地域医療施設のスタッフも交え、ワークショップで得た体感から備えや対処法について話し合いました。



高齢者対象の回



外国人家族対象の回



学童の子ども達対象の回

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

本事業は芸術団体が行う演劇ワークショップの社会的価値を可視化し、その価値を共有することを目的にスタートしました。現代社会には、様々な理由から生きづらさを感じている多様な立場の人がいます。そのような人たちが排除さ

れることのない「共生社会の実現」を目指し、社会的に疎外されがちな立場にある人が、ワークショップを通して周囲とつながりを持ち、社会参加の機会を得ることを狙いとして実施しました。

同じ市民として外国人も地域につながった

技能実習生として市内在住の外国人が多い兵庫県小野市では、職場を越えて外国人同士、地域の日本人と親しく接することは少なく、また国際交流協会が主催する日本語教室や行事に参加できない外国人も多く、地域社会から孤立している課題がありました。外国人が日本人と触れ合い安心して「にほんご」を話せる場「にほんごであそぼう」を企画し、外国人のみならず地域住民、職場の上司、民生委員、ボ

ランティアなど多くの方々に参加いただきました。このワークショップによって、日本人・外国人お互いの先入観がなくなり、地域住民の相互理解がすすみ、外国人参加の交流会や防災訓練の実施へとつながりました。劇場が寄付で集めた育児・学用品の提供なども生まれ、このプログラムを通してさまざまな支援へと繋がりました。

高齢化社会での共生

今後も加速する高齢化社会において、高齢者の独居生活や社会からの孤立、認知症の予防と症状の抑制などの課題があり、高齢者施設入居、デイサービス利用の軽度認知症の方を対象に「からだであそぼう」を実施しました。演劇ツールの体験を通して想像力と創造力を、深い呼吸や発声で脳を刺激するプログラムです。初年度は1か所での実施でした

が、活動は広がりを見せ、今年度は周辺地域のグループホームや社会福祉協議会、高齢者地域ボランティアグループでの実施が実現出来ました。高齢者の方の導き方、声かけなどコミュニケーションのあり方のプログラムを、地域見守りボランティアの方を対象に実施することにより、さらなる地域社会の豊かな共生が進むと感じています。

事業実施における工夫

当事業は、NPO団体や各施設、大学など協働団体の協力が不可欠なため、事前事後に関係者間で綿密な打ち合わせ、振り返り、今後の課題を時間をかけて行いました。参加者ひとりひとりの個性、生活環境、気を付けなければならないことなどを共有し、プログラム設計、当日の実施に取り組みました。また、対象が多岐にわたる複数のプログラムを実施しているため、講師間で課題や情報共有を行い互いにスキルアップを目指しました。



演劇ワークショップの様子

新型コロナウイルス感染症の影響

事業内で予定していたすべてのワークショップで、変更を余儀なくされました。協働先と情報把握に努めながら日程の延期、会場場所の変更、募集人数の制限などの工夫を行い、実施に向けて対応しました。プログラム内容も床ではなく椅子を使用したり、換気・消毒はもちろんのこと、屋外での実施に切り替えたワークショップもありました。昨年は不測の事態で急遽オンラインへ切り替えができませんでしたが、今年度はオンラインを活用し予定していた高齢者施設での実施が実現できています。感染対策は当法人の「新型コロナウイルス感染防止のためのガイドライン」を基本とし、適宜対応しました。

事業名 プロの音楽家を介したインクルーシブ体験と地域ネットワークの構築

団体名 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

所在地：東京都墨田区

URL：https://www.njp.or.jp/

事業概要 実施団体所属のプロ演奏家が、小学校の特別支援学級・通常学級を対象として、鑑賞体験、楽器体験、創作体験の場を提供。楽器体験や、弓の使い方、ヴィブラート奏法に注目して「良い音とは?」「良い演奏とは?」を考え、主体的に音楽を鑑賞する体験をしてもらう。また、鑑賞を通じて児童ひとりひとりの感じ方の違いを知り、互いを認め合いコミュニケーションを図ることを目指す。今年度の新しい取り組みとして指揮者体験というものを取り入れ、ハーモニーを奏でるだけでなく、それを聴いて表現するという芸術についても取り組む。

実施内容

●指揮者になってみよう

開催日：2021年12月14日、15日、20日、22日

場所：墨田区立業平小学校(東京都)

対象：特別支援学級児童3～6年生

参加人数：14名

参加費：無料

曲目：ベートーヴェン「運命」

モーツァルト「アイネクライネナハトムジーク」

内容：楽譜に無い強弱や、テンポチェンジなど、指揮者の振り一つで様々な表現があるということ、また人によって指揮は全く違うということを知り、自分ならどのように表現したいかを想像してもらった後、実際に順番に弦楽四重奏にむかって指揮をしてもらいました。指揮の米田さんを迎え、アドバイスやいいところを褒めるなどして、それぞれの表現を認め合う時間もつくりました。

また、動画で、とても癖のある指揮者の様子を見て、こんな表現もあるのかということも勉強しました。自分の体つきでどんな風に音が変わるのかも、他の人のものを観察することで理解してもらったことが出来ました。



実際にプロの弦楽四重奏に向けて指揮体験
生徒たちの個性が光りました

●日本で一番ハーブに詳しい小学生になる

開催日：2022年12月2日、3日

場所：下田小学校(静岡県)

対象：普通学級の生徒と支援学級の生徒

参加人数：220名

参加費：無料

曲目：ヴァイオリンとハーブのアンサンブル(チャルダッシュ、等)

ハーブのソロ(リスト「ためいき」、春の海等)

内容：ハーブを持ち込み、弦が何本あるかなどを間近で確認してもらいました。また、希望する児童には実際に体験してもらい、どのような音が出るのかを体で感じてもらいました。ハーブの音色はどうして美しいのか、音はどのように伝わるのかといったことを体感してもらいました。また他の児童が演奏する音を聞いてもらうことで、興味関心をひくことが出来ました。



ハーブの細部を生徒の皆さんに遠くからでも見えるようモニターを利用

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

違いが分かるから面白い—楽器体験・音色や奏法の違いを知って、主体的な音楽鑑賞の体験をする

一般的な音楽鑑賞教室は、児童が演奏を聴くだけの受動的な関わり方になりがちですが、本事業では、簡単なルールを知ることによって楽しめるスポーツのように、楽器を演奏できなくても「知っているから楽しい」「違いが分かるから面白い」と感じられる取組を実施しました。写真のハーブ以外にも、ヴァイオリンやチェロの楽器体験、また、指揮者体

験を通じて、児童の多様な反応を得られ、積極的な参加姿勢が見られました。また楽器の音色の違いやヴィブラートの弾き方の違いを通じ、演奏の多様性や聴き方の多様性を知り、自他を認め合う意識を育てていくことを目指しました。

プロのオーケストラ奏者ならではの本格的なクラシック作品を取り上げた

児童が飽きるという理由で、短い曲や流行のアニメやポップミュージックのアレンジを取り上げる音楽鑑賞教室が少なくない中、弦楽四重奏やハーブのために作曲された本格的なクラシック作品を取り上げました。鑑賞前に曲の構成や作品中の各楽器の役割、作曲の背景等を、イラストや

例えを用いてわかりやすく説明し、各奏者が、その作品の好きな箇所と理由を紹介するなどして、主体的な鑑賞の手助けと成り得る導入を行いました。その結果、10～15分の作品を集中して鑑賞する児童の姿が見られました。

実施校の拡大。地域を面でとらえて文化芸術の創出機会を増やしていく

今年度は昨年度に引き続き、特別支援学級に加えて、通常学級での実施が実現しました。また新たな学校・地域での実施も実現し、この活動を見学に来た団体から、同じような取組をやらせてもらってもよいか、というような問い

合わせも受けました。これらからも分かるように、進め方や内容・レパートリーや演奏者のアウトリーチスキルなどが、回を重ねることによって上昇してきたと感じられました。

事業実施における工夫

言葉だけの説明が伝わりにくい場合があることを想定し、イラストや映像モニターを使用したり、分かりやすいイメージに例えた説明を心掛けました。コロナ対策のため、

なかなか近くに集まって見るということが出来ない中、モニターで拡大することで距離を保ちながら実施することを心掛けました。



生徒のヴァイオリン体験



指揮を皆で鑑賞 どのような表現があるかを観察

新型コロナウイルス感染症の影響

予定していた実施校が複数中止になりました。また実施しても、予定していた楽器体験などのプログラムが、ソーシャルディスタンスを確保する観点から中止となり、内容の一部を変更することとなりました。ディスタンスを保ちにくい楽器体験やグループワークは学校の判断で実施・中止を決めてもらいました。中止になった場合は、体験の代わりにモニターを使って楽器の細部を見せるなどの工夫をしました。

事業名 インクルーシブデザインによるアクセシビリティ・コーディネート・スキルの開発事業

団体名 公益財団法人 東京都歴史文化財団

所在地：東京都墨田区

URL : <https://www.rekibun.or.jp>

事業概要

「情報アクセシビリティ」をテーマに、芸術文化活動における情報保障のあり方を検討するとともに、情報支援を導入するコーディネーターに必要なスキルの開発に取り組むプログラム。これまでの文化施設では、施設設備のバリアフリーやユニバーサルデザインに向けた取り組みが行われてきた。本事業では、障害当事者を巻き込むデザイン手法「インクルーシブ・デザイン」を新たに取り入れ、トーク、ワークショップ、調査・検証を実施。各所との連携により、国内の文化芸術活動における「情報アクセシビリティ」を再検討するとともに、スキルのあり方と人材育成の効果の検証を行う。

実施内容

本事業では、「Cultural Future Camp インクルーシブ・デザインで新しい文化体験を共創する」と題し、オープン・レクチャーと短期集中ワークショップを筑波技術大学と協働で実施しました。あわせて、都立文化施設を含む国内外文化施設の情報アクセシビリティの実地調査と、オープン・レクチャーや短期集中ワークショップにおける情報保障支援策に関する検証を実施しました。

●オープン・レクチャー《全3回》

開催日：2021年11月23日、12月12日、
2022年1月29日

内容：芸術文化における「情報アクセシビリティ」をテーマとするレクチャーをオンラインで開催しました。文化施設が合理的配慮に取り組む上で重要となる知識や、情報保障学を通じた芸術文化活動に関する研究、これからのインクルーシブ・ミュージアムのあり方について広く紹介しました。文化・福祉関係者のみならず、学生や研究者など多くの人々が視聴しました。また聴覚や視覚に障害のある視聴者にも届けられるよう、手話通訳や字幕支援など効果的な情報保障支援を講じました。

●短期集中ワークショップ《4日間連続》

開催日：2022年2月17日～20日

場所：東京都江戸東京博物館会議室およびZoom
ウェビナー（公開フォーラム（成果発表のみ））

内容：五感（視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚）を活用した芸術文化鑑賞体験の創造をテーマに開催。デザインの専門家や芸術文化活動従事者、障害当事者など公募にて選抜した20名の参加者と、文化施設職員・アーティストなど多彩な経歴を持つ講師・ファシリテーターが一堂に会し、交流。レクチャーとグループワークを通じて、芸術文化の新しい楽しみ方やアクセシビリティ・コーディネートのスキルの共創・開発に取り組みました。最終日は、共創・開発したアイデアの成果発表の場として公開フォーラムを開催。Zoomウェビナーを使用し一般に向けて公開することで、ワークショップを通じて生まれたアイデアを広く提案・共有しました。

●調査・検証

都立文化施設を含む国内文化施設6施設を対象に、情報アクセシビリティの実地調査を実施しました。ろうおよび盲ろうの視点から、取組について満足度等を評価・検証。また、本事業の上記2つのイベントを通じ、イベント開催に必要な情報保障支援の有効性や妥当性を検証・分析しました。その結果は、短期集中ワークショップ内にて報告しました。さらには同事業報告書において掲載・公開することで、より広く情報を発信しました。



第2回オープンレクチャー「第2回 情報保障学からひろく芸術文化活動」 情報保障支援として、手話通訳と字幕支援(要約筆記)を実施。視聴者が見やすい画面づくりに努めた。

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

情報アクセシビリティの今を紹介、あらたな可能性を示唆

情報保障学の専門機関である筑波技術大学の協力を得たことで、専門的実践と知識に基づいた情報アクセシビリティについて理解・検討を深めることが出来ました。オープン・レクチャーでは、筑波技術大学で取り組まれている文化芸術における情報アクセシビリティに特化した実践について紹介しました。併せて、オンラインイベントにおける情報保障支援策を検討し、示しました。また、文化施設が提供する支援体制の実態と、それを利用するリードユーザー

の評価という2つの側面から、文化施設における情報アクセシビリティについて調査し、その結果を短期集中ワークショップのなかで報告しました。情報アクセシビリティの取組の現状を実践的に発信することで、情報アクセシビリティが可能にする芸術文化体験を示すとともに、芸術文化の専門性を考慮した情報支援策の新たな可能性や、情報保障支援策のひとつの具体的なモデルケースを提案することが出来ました。

インクルーシブ・デザインによる共創の重要性を再確認

一連の事業を通じて目指したことの一つに、さまざまな身体特性を持つ人々が交流するプラットフォームを作ることで、「インクルーシブ・デザイン」による共創をより意識してもらうことがありました。オープン・レクチャーでは障害当事者でもある専門家を招き、盲・ろうといった身体特性を持つ人々の文化と、その独自の認識方法について改めて示すとともに、そのような身体をもつ盲・ろう者が文化施設の活動に参画することで、どのような共創的な取組がなされ、可能となるのかを紹介しました。短期集中ワークショップでは、障害の有無に限らず、さまざまな言語、文化的背景、専門性を持った人々が集まり、思考し、対話・交流し、多様な知覚を通じた楽しみ方のアイデアやコーディネートスキルを共創しました。短期間ではありましたが、異なる身体・文化を持つ人との交流に関する新たな気づきや、複数のコミュニケーション手段の可能性、一人ひとり異なる芸術文化の楽しみ方があることを改めて

体感することで、参加者自らがアクセシビリティをコーディネートする技術・思考を獲得することが出来ました。参加者の多くは、すでに文化芸術分野や福祉分野などで活動しています。今回の共創体験を通じて得た気づきや捉え方・考え方、共創したアイデア、あるいは交流で構築されたネットワークを持ち帰り、それぞれのフィールドで展開する可能性を見ることが出来ました。



短期集中ワークショップの様子 写真：佐藤基

事業実施における工夫

当財団は博物館・美術館、文化ホール、劇場を含む12の都立文化施設を運営しています。そのため、これまで培ってきたノウハウと実践に加え、情報保障学の専門機関である筑波技術大学と取り組むことで、各芸術文化表現に即した情報支援の効果的・効率的なあり方について検討することが出来ました。また、文化施設とアーティスト、障

害当事者にとどまらず、新たに情報保障に携わる専門家らと、ネットワークを意識的に構築する場を設計しました。その結果、「情報保障支援／情報アクセシビリティ」を軸に、アクセシビリティ・コーディネートのスキルのあり方を見直し、より思索的な五感を通じた芸術表現ならではの楽しみ方をデザイン・提案する取組を実施出来ました。

新型コロナウイルス感染症の影響

感染症拡大の影響を考慮し、将来的にトークイベントのオンライン開催の機会が拡大していくことを視野に入れ、オンライン実施における情報保障支援などを模索する方向性へと変更しました。一方、短期集中ワークショップに関しては、インクルーシブ・デザインの考えや、また、リアルでの交流・ネットワーク構築が重要であると捉え、一部Zoomを用いたリアル会場を実施を続投しました。事前の検温の呼び掛けや手指消毒、常時換気を徹するとともに、筑波技術大学とともに、各障害のある参加者に対応した感染症拡大対策に取り組めました。結果として、リアル・オンライン両面における情報保障支援について検討することが出来ました。その他、当初は海外文化施設における取組も視野に入れた現地調査を計画していましたが、国内文化施設の重点的对象へ変更することで、より密な調査が可能となりました。

団体名 公益財団法人 東京都歴史文化財団

所在地：東京都墨田区

URL：https://www.rekibun.or.jp/

事業概要

2012年ロンドン・パラリンピックの文化プログラムとして注目を浴びた作品「The Garden」について、その誕生から東京公演の計画までを、演出家とパフォーマーが振り返るセミナーをオンラインで開催。障害のある人々による舞台芸術活動の展望と課題について、プロセスに深く関わってきた日英のキーパーソンが語り合い、今後の障害者による舞台芸術活動の発展に繋げるための方策を共に考える。

実施内容

●東京芸術劇場 社会共生セミナー

「障害のあるアーティストの舞台芸術～ロンドン、東京、そして未来」

開催日：2021年11月26日

場所：オンライン開催Zoom

日英逐次通訳、日本手話通訳、英国手話通訳、UDトーク付

参加人数：65名

参加費：無料

内容：2012年ロンドン・パラリンピックの文化プログラムとして注目を浴び、2016年にブラジル・リオデジャネイロでも上演された「The Garden」(野外エアリアル作品)の日本版作品を創作し、東京パラリンピックに合わせて東京で上演することを計画しました。2019年にオーディションでキャストを選抜し、オーストラリアの指導者のもとでトレーニングを積むなど、準備を進めましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020年夏に次ぎ、2021年夏の上演計画も、残念ながら中止になりました。しかしながら、セミナーの形態で「The Garden」の創造と10年にわたる歩みを振り返り、障害のあるアーティストたちの活動のこれからについて共に考える場を設けました。セミナーは2部構成で、第1部は作品「The Garden」について、その誕生から東京公演の計画までを、演出家と出演パフォーマーが振り返りました。第2部は、障害のある人々の舞台芸術活動の展望と課題について、プロセスに深く関わってきた日英のキーパーソンが語り合うとともに、今後の障害者による舞台芸術活動の発展に繋げるための方策を共に考えました。



社会共生セミナー 当日の様子



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

障害者による優れた文化芸術作品がもたらすものと、その影響力

障害のあるプロの俳優やスタッフによるイギリスの劇団「グレイアイ・シアター・カンパニー」で芸術監督を務めるジェニー・シーレイ氏の演出による「The Garden」は、高さ4メートルの揺れ動くポールの上でパフォーマンスを行う野外エアリアル作品です。高度な技術が必要とされるエアリアル・パフォーマンス作品に障害があるアーティストが挑んだ事実について、本セミナーでは、演出家自身と出演パフォーマーの語りを通して、鑑賞者の感想から社会の変化まで幅広いトピックスについて、参加者たちに伝えまし

た。健常者が持ちがちな偏見や価値観を覆し、また、障害当事者にとっても、強い意志を持って挑めば実現できるという自信に繋がることなど、「The Garden」プロジェクトがもたらしたさまざまな成果が確認されました。さらに、障害当事者自身がイニシアティブをもって文化芸術の機会を創出することの重要性が、熱く語られました。今後の障害者による舞台芸術活動を考える上で、目指すべきあり方の一つとして多数の人々と共有できたことは、本事業の大きな成果だと考えています。

障害者による文化芸術活動を取り巻く課題の洗い出し

障害者による文化芸術活動に関する助成のあり方について、日本とイギリスの比較が行われました。作品創造や上演という事業単体への助成ではなく、団体を維持し持続的な活動をするための団体運営経費の支援、また、障害者の文化芸術活動参加を促すための、情報保障や移動介助等に対する補助が、日本でも求められるという発言が相次ぎました。障害者の起用が特別なことでなくなれば、芸術団体が障害のあるキャストを受け入れやすくなり、新しい雇用が生まれ、チャンスが増えます。こうした好循環のシステムが日本にもできれば、文化芸術が多様でより豊かなものになるだろうという、前向きな議論が展開され

ました。障害のあるパフォーマーと芸術団体を結ぶ役割としての人材の育成が急務であるという指摘もありました。団体や公演主催者だけではなく、障害を持つ個人がサポートを申請できる仕組みや、障害当事者がさまざまな活動を自発的に行うための社会的支援の必要性など、アクセシビリティについても話し合われました。日本では、障害当事者が主体的に活動することのできる環境づくりは緒に就いたばかりですが、現在の日本におけるさまざまな問題点と課題を浮彫にする有意義なディスカッションとなりました。

事業実施における工夫

野外公演が中止を余儀なくされ、オンラインセミナーを企画した際、単なる代替事業ではなく、逆に公演ではできない要素を取り込もうと計画を策定し、全国の公共劇場や施設で、障害のある人々との活動を進めようとしている“創り手”の方々に参考となること、創作意欲を喚起すること、また、障害当事者や障害者施設の方々が自ら“作り手”として動き出すのを促すようなことを、語ってもらう機

会としようとしていました。美術館・劇場・コンサートホールを運営する当財団のネットワークを通して、地域を問わず広く広報することができ、結果、全国から多様な参加者を得ることが出来ました。さらに、日ごろから連携を取らせていただいている団体の協力のもと、手話通訳、UDトークなどの情報保障を施すことができ、障害のある方々も多数ご参加いただけました。

新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症の影響により、残念ながら2020年夏に続き2021年夏も公演事業は中止となりました。しかしながら、「The Garden」プロジェクトの意義と成果を改めて確認し、東京公演の計画にいたるまでの全プロセスを先行事例の一つとして広く紹介することは、今後の日本における障害者による舞台芸術活動の発展を目指していくために意義あることと考え、公演をオンラインセミナーに振替えて、事業を実施することにしました。イギリスと日本から、「The Garden」事業に深く携わった人などキーパーソンの3人をスピーカーに招いてセミナーを開催した結果、先行事例を通じ貴重な知見の数々を多くの参加者と共有し、未来に向けて一同がともに考える機会を持ち得たことは、本事業の大きな成果だと考えています。

事業名 国際芸術祭実施に向けてのろう者の芸術活動推進事業2021（副題：育成×手話×芸術プロジェクト）

団体名 社会福祉法人 トット基金日本ろう者劇団

所在地：東京都品川区

URL：http://www.totto.or.jp/

事業概要

ろう者自らが主体となって進める芸術活動が、国際芸術祭創設に相応しいレベルで結実するよう各年の実績を重ね、ネットワークを広げている。演劇部門では、インクルーシブな演劇を代表する「手話狂言」を、都主催の「Tokyo Tokyo FESTIVAL」に参画して実施、また昨年の継続活動に加え、2021年度より新たに演劇作品に欠かせない「音楽」について議論を深めていく。映画部門では、ろう者主体の作品製作のため学びの場を設けていく。美術部門では、当事者（ろう者）と非当事者の相互学習の場を広げてきたが、今年度より更に演劇・美術の枠を超えた作品創りをすすめている。

実施内容

●「ろう者のオンガク」ディスカッション

開催期間：2021年6月～2022年3月

場所：オンライン

参加人数：ろうの有識者5名

内容：今年、演劇部門内から新しく発足したオンガク部門では、目で育ってきた、音が耳に入らない人たちの「ろう者のオンガク」について考えるディスカッションを行ってきました。「自分が心地よいと思うもの」について、それぞれの特徴や共通点を探ることから始まり、約9ヶ月間、ろう者コミュニティや個人の中にある「オンガク」についてオンラインで議論を重ねてきました。年度末には現時点での考えを提案する報告会を行いました。
※表題の「オンガク」は、ろう者の中にある「音楽」を表します。あてはまる用語がないため仮称として「オンガク」としています。

●育成×手話×芸術プロジェクト「アートを通して考える3」＜聴者とろう者のディスカッション＞

開催日：2022年1月15日、2月12日

場所：オンライン

参加人数：2回 合計200人

参加費：無料

内容：第一回にアーティストのYoshi氏、東京藝術大学教授の齋藤典彦氏を招き、無音の世界と音の世界のはざまを生きる生き方とともに、その知覚の境界を超える表現の可能性についてお話しいただきました。第二回はギャローデット大学大学院ろう者学修士課程を修了した皆川愛氏、フィリピンのろう文化を調査した図書館司書の山下恵理氏を招き、ろう者を取り巻く言語ヘゲモニーやデフゲインといった概念を参照しながら、多様性の観点から“ろう”そのものの意味を探りました。



ディスカッションの様子



「アートを通して考える3」チラシ

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

ろう者の世界に音楽はあるのか？ディスカッションを通して考えを提案

目で育ってきたろう者が感じるオンガクとは何か。その問いに対する考えを提案するため、ろう者当事者たちが集まって議論を重ねました。育ってきた家庭や学校環境での経験、そこで養われた特徴や感覚のほか、「目で生きる人」のオンガクワークショップ（令和2年度）、東京オリンピック閉会式におけるろう通訳者たちの手話、「ヴァンサンへの手紙」（平成27年）や「LISTENリッスン」（平成28年）等の映画に登場するろう者の動きから感じるものなど、これまで個々人が心地よさを感じてきたものから共通点を探ることで、ろう者特有の表現が何に由来し、「歌」や、「音

楽」とどのような共通点や違いがあるのか、当事者同士が互いの感覚や考えを共有したことで、ろう者が感じるオンガクについての議論がこれまで以上に深められました。ディスカッション報告会には、情報公開後数日でろう者・聴者あわせて日本全国から120名以上の申し込みがあり、その関心の高さがうかがえました。音を中心とした芸術としての音楽とは異なる、視覚を中心としたオンガクについて考える契機となり、今後議論がより活発化していくことが期待されます。

「アートを通して考える3」ではろう者・難聴者当事者の世界により迫るアプローチを試みた

「アートを通して考える3」では、ろう者と聴者の違いだけでなく、両者の中にある多様性について、さらに思考を深めるセッションを開催しました。そうすることで、言語や文化、身体の境界を超えて互いに向き合うさまざまな視座を養い、一人ひとりが持つ複雑さをより深くまなざすことを目指しました。トークセッションやワーク・イン・プロGRESSを

通して、聴者たちのみならず、ろう者・難聴者当事者に新しい視座を提供したことで、互いの知覚や身体性の共通点や相違とその社会構造について考察する機会を寄与したとともに、ろう者・難聴者当事者のエンパワーメントに繋がりました。

事業実施における工夫

当事者であるろう者が主体となって事業を担当し、自らを育てながら事業を進めることに重点を置きました。マイノリティである当事者がマジョリティになる状況を作ること、実りある生き活きとした事業成果につなげました。コロナ禍による影響は本事業においても大きいですが、視覚的要素の強いITは多くのろう者が得意としており、オンライン参加を募るワークショップ等では全国のろう者の参加を可能にするため、より充実した事業成果が得られました。オンラインWS、会議等においては手話通訳のほかUDトークを採用し、情報や学びの精度と質を向上させています。



第一回トークセッション 当日の様子

新型コロナウイルス感染症の影響

有識者によるディスカッションをZoomオンラインで行い、報告会をウェビナー形式で実施。また、トークセッションをZoomオンラインで実施しました。

主催団体ホームページ等に感染防止対策を掲載のうえ事前に来場者等へ周知しました。

・トット基金HP：<http://www.totto.or.jp/>

・育成×芸術×手話HP：<https://www.tsa-deaf.com/>

自閉症患者や認知症高齢者、その家族、介護者等による対話型絵画鑑賞事業及び物語創作プログラムの普及と成果の海外発信事業

一般社団法人 アーツアライブ

所在地：東京都渋谷区

URL：http://www.artsalive.jp.org

首都圏で実績のある認知症対象の対話型鑑賞「ARTRIP」を全国の地域の美術館に普及するために、実態調査アンケートを実施。また、認知症高齢者の感性や想像力を活かした物語創作「フォトストーリー」事業を日本、イタリア、オーストラリアの3か国でオンラインで実施し、創作した物語を冊子として出版。イタリアの専門家によるワークショップとレクチャーを企画し、自閉症を患う人々を対象にした美術館でのプログラムの事例を紹介することで、美術館学芸員や一般の方に、自閉症児が美術館に来て楽しむ為に必要なことを考える機会を提供。

実施内容

●ARTRIP対話型鑑賞の全国の美術館への普及事業

①実態調査アンケートの実施

内容：美術館における認知症対象のプログラム実施の実態調査、及び今後のプログラム実施に対する希望調査アンケートを実施しました。

対象：220館、回答率10%

結果：8館の実施希望美術館がありました。また、実施の際の課題も抽出することが出来ました。

②美術館でのARTRIP実践、認知症とアートの講演

開催日：2021年12月20日、2022年1月26日、2月14日、16日、20日、21日、26日

場所：山梨県立美術館、小樽芸術村、三重県立美術館、横須賀美術館、米子市美術館、高松市美術館、熊本市現代美術館

内容：展示室内における認知症当事者対象のARTRIP実践と、過去の記録動画の視聴をしました。また、一般公開レクチャー「アート×美術館×認知症：アートリップの事例より」を実施しました。

参加人数：ワークショップ22名(+見学55名)、公開レクチャー174名

参加費：無料



広報たかまつ2月号

●自閉症対象の美術館プログラムについてのワークショップとレクチャー

内容：自閉症の特徴・美術館にとっての意義・具体的な実践例の紹介と、イタリアにおける自閉症対象美術館プログラムの実態・日本における自閉症児を取り巻く環境・美術館に連れていく際の課題についての講演を行いました。

①オンライン・ワークショップ(日伊同時通訳付)

開催日：2022年2月5日

②公開レクチャー「美術館×アート×自閉症:イタリアの先端事例から学ぶ」

開催日：2022年2月6日

参加費：無料

●国際交流事業、国際発信事業、認知症当事者文化交流事業

①日本、イタリア当事者オンライン文化交流会

開催日：10月24日、11月28日、12月12日

対象：日本とイタリアの認知症高齢者とその家族
内容：「旅」をテーマに各人が写真を一枚持ちよりプレゼンし合った後、日本とイタリアの曲一つずつを紹介し合いました。またイタリアのコレオグラファーの即興ダンスに合わせて体を動かしました。

②フォトストーリー「三国物語」の出版(3か国語)

内容：「フォトストーリー」のメソッドを使って、日本、イタリア、オーストラリアの高齢者が、それぞれの国のファシリテーターが選んだ「旅」をテーマにした3つの絵や写真を元に、独自の物語をグループで創作し、全部で12個の物語を各3か国語に訳して、まとめて冊子として出版しました。

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

美術館における認知症と自閉症対象のプログラム実施の有無、今後の希望と実施する際の課題の把握

実態調査と実施希望調査では、8割以上の回答者が、今まで実施はしていないものの、今後実施希望であることがわかりました。実施できていない理由としては、やりかたがわからない、予算がない、人材がない、ということで

した。今年度の認知症対象ARTRIPはコロナ禍もあり、3館で実施予定でしたが、8館から応募がありました。自閉症対象のプログラムへの参加希望よりも、認知症対象プログラム実施への関心がより高い結果となりました。

ARTRIPの現場を体験することで、実施への自信の獲得、レクチャーで地域の関心を引き起こした

美術館担当者の協力で、複数の自治体の高齢者福祉部署が、HPに掲載したり、家族会に声をかけるなどしてくれ、美術館と地域の福祉部門の協働が実現しました。また、館の教育普及担当者だけでなく、館長はじめ、職員も一緒に見学したり、受付から送迎までのシミュレーションを体験することで、美術館関係者にも実現への確かな手ごたえを感じてもらうことが出来ました。更に一般向けの講演会

では、地域の新聞社等の取材もあり、地域全体での告知と関心を引き起こすことが出来ました。実施しなかった近隣の美術館の学芸員の参加も多く、コロナが落ち着いたら是非実施したいとの希望がありました。更に講演視聴者のうち数名が、後日養成講座を受講してくれ、実施への意欲を高めることが出来ました。

イタリアの先端事例から美術館における自閉症対象プログラムの事例を紹介

10年前よりイタリアで実施されている自閉症対象のプログラムを、事例を含めて聞き、ギャラリー内での特徴・意義と、有効な参加型のプログラムの内容を知ることが出来ました。また、自閉症児の父であり、支援団体の代表でもある金子訓隆氏の話は、日本とイタリアの違いを浮き彫りにし、今後のヒントを得ることが出来ました。アンケートからは「継続が大切、専門家を入れる、当事者を計画段階で巻き込む」ことの重要性が理解され、またスタッフ育成や美術分野以外の具体例を更に知りたいとの声も聞かれました。

一般公開のレクチャーは同時通訳、オンラインで3時間という長時間にも関わらず、81名の方が視聴し、アンケート回答率も40%と高く、「日本で不本意に育まれてきた「自閉症」というネガティブな印象を取り払うための格好のプログラムだと思った。」「彼らの活動や発言自体に意味を持たせ、価値を与えることをミュージアムのスタッフも意識的にやっていかなければいけないと思った。もっと理解と知識を深めたい。」等、参加者の知識、関心や問題意識の喚起につながり、高い評価を得ました。



高松市美術館講演会の様子



横須賀美術館の様子

事業実施における工夫

アーツアライブが過去10年間に、実践して培ってきた場の作り方の実践ノウハウ等を、出来る限り、希望する美術館に体現しました。また、ARTRIPが与える認知症のBPSDの緩和や予防効果について検証し、参加者である認知症当事

者やその関係者、医療関係者にも関心を持ってもらうことが出来ました。更にアーツアライブ代表理事の広い海外ネットワークを生かして、自閉症対象プログラムの海外の最新事例を日本に紹介することが出来ました。

新型コロナウイルス感染症の影響

コロナ蔓延防止策中での事業実施になったために、ARTRIPが実施できず、やむなく過去に実施した時の映像を見てもらうことで対応したり、少人数向けの事業は、人数を減らし換気、マスク着用、ソーシャルディスタンスをとって実施することができたものの、一般向けレクチャーが対面でできたのは、4館のみになりました。

2月のイタリア人講師の来日が叶わず、やむなくイタリアと日本を結んでのZoomオンラインで実施しました。当初は逐次の予定でしたが、オンラインで長時間は厳しいので、急遽同時通訳にしました。幸い優秀な通訳者と、事前の十分な準備で、とてもスムーズに実施が出来ました。

団体名 公益財団法人 新国立劇場運営財団

所在地：東京都渋谷区

URL：https://www.nntf.jac.go.jp/

事業概要

障害の有無に関わらず、良質の舞台が楽しめる機会を広げることを目指す。チケットの購入、来場、観劇に至る各段階にあるハードルを下げ、舞台鑑賞をトータルで支援することを目的とする。これまでの結果を分析するなどして、今年度は、舞台に関する情報保障サービスのさらなる拡充を図る。新たに、実施回数の増加や、新技術の導入等に取り組み、過年度の継続にとどまることのない、新たな進展を目指す。さらに、宣伝、広報を積極的に行うと共に、ノウハウを開示し本事業を広くアピールする。

実施内容

●聴覚に障害のある方向けの観劇サポート

- ①演劇「東京ゴッドファーザーズ」
- ②演劇「反応工程」
- ③演劇「イロアセル」

開催日：①2021年5月22日 ②7月18日
③11月23日

場 所：新国立劇場小劇場

参加費：無料

内 容：新国立劇場主催の上記の演劇公演について、舞台に関する情報保障として下記サービス等を提供しました。

- ア)ポータブル字幕表示機貸出による、文字化したセリフ、音響情報の送付
- イ)会場内の掲示および案内サインの強化
- ウ)手話通訳、要約筆記者の配置
- エ)手話、字幕入りの宣伝動画作成
- オ)障害に対応した割引チケットの予約を電話に依存せずインターネットやFAXで完結できる仕組みの提供

●視覚に障害のある方向けの観劇サポート

- ①演劇「東京ゴッドファーザーズ」
- ②演劇「反応工程」
- ③演劇「イロアセル」

開催日：①2021年5月23日、24日
②7月21日、22日
③11月21日、27日

場 所：新国立劇場小劇場

参加費：無料

内 容：新国立劇場主催の上記の演劇公演について、舞台に関する情報保障として下記サービス等を提供しました。

- ア)公演前の舞台説明会開催(舞台を模した大道具、小道具に触る体験を含む)
- イ)「声のプログラム」の提供
- ウ)触れる模型の作成および模型を用いた舞台セットの解説
- エ)劇の進行と同時に物語を理解できるリアルタイム音声解説
- オ)最寄り駅改札口と劇場間の案内係による付添
- カ)新国立劇場が制作した公演を全国の劇場で上演する場合における、ノウハウ等の開示



手話通訳を交えた指差しでの受付の様子



事前舞台説明会：俳優の立ち位置によって変わる声の響きを感じていただく



事前舞台説明会：小道具のタッチツアー

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

障害の有無に関わらず、演劇を楽しむ～舞台、舞台以外にわたる情報保障～

●舞台に関する情報保障

①聴覚に障害をお持ちの方向けの観劇サポート
ポータブル字幕機を貸出し、文字化したセリフ、音響情報をリアルタイムで表示し、聴覚に頼らず舞台を楽しめる環境を提供しました。演出に合わせ、字の色、太さ、サイズを変え、また、表示する内容や切り替えるテンポを、舞台の台詞のスピードに合わせる等の工夫を行いました。

②視覚に障害をお持ちの方向けの観劇サポート
劇場の広さ、舞台セットについて、小道具・衣裳・舞台模型に触りながら解説するタッチツアーを事前説明会で実施しました。当日は、舞台の進行に合わせて別ブースより“生放送”で同時解説を行った他、見どころや出演者自身によるキャラクターの自己紹介を収録した、「声のプログラム」を提供して、視覚に頼らなくとも臨場感があり、より分かりやすく鑑賞していただけるよう努めました。

●舞台以外に関する情報保障

①聴覚に障害をお持ちの方向けの観劇サポート
劇場内でのアナウンス放送内容、劇場の見取図などを準備し、事前にメールでお送りしました。当日は、手話通訳者および要約筆記者を常駐させました。また、チケットのご購入はインターネットやFAXで完結できる仕組みを提供しました。

②視覚に障害をお持ちの方向けの観劇サポート
案内係を増員して、劇場内のご案内はもとより、最寄り駅改札まで付き添う等、案内体制を強化しました。また開場中、休憩中に、上演開始までの残り時間を適宜アナウンスしました。



貸出のポータブル字幕機

さらなる展開を目指して

リアルタイム音声ガイドでの骨伝導ヘッドホン活用や、オペラ、バレエ公演における可搬型ヒアリングループ、情報を個人のスマートフォンへ文字で表示させるシステム等の活用をしました。

また、関係協会との連携も行いました。従来、個々の舞台美術家に作成を依頼していた触れる舞台模型は、一般社団法人日本舞台美術家協会「触る模型」委員会に依頼することで、質の高い模型を安定して準備することができ

ようになりました。また、新国立劇場が制作した公演を上演する他劇場より、視覚障害者向けの観劇サポートを実施したい要望があったため、新国立劇場の持つノウハウを提供し、実費でサポートが実施できるよう計りました。これらの成果により、今後の新国立劇場における観劇サポートをより充実させる道筋をつけ、また、全国に観劇サポートが普及する一助を担うことが出来ました。

事業実施における工夫

「公演のみどころ」は障害の有無に関係なく共通です。よって、演出家、美術家、衣裳家、出演者等の意志を、十分に観劇サポートへ盛り込むことが求められました。そのため、舞台制作現場と協力関係を結び、観劇サポート担当スタッフと緊密に協業することに努めました。観劇サポートを担当するスタッフには、当該公演や障害に関する知識はもとより、舞台芸術全般に関する広範な理解が求められたため、十分な実績を有するスタッフ・事業者を確保、

育成し、環境を整えました。当財団は「迷ったら障害当事者に聞く」をモットーとしています。障害当事者、団体はもとより、先行して類似の事例を実施している団体から学び、積極的に事業へ取り入れていきました。また、来場されたお客様のご意見を伺い、既存事業の改善、新規事業の研究などに結び付けることを心がけました。

新型コロナウイルス感染症の影響

イベント開催制限により、収容人数を抑制せざるを得ず、チケットの販売を途中で中止せざるを得ない公演が生じました。視覚に障害がある方へのサポートについて、あらゆる出来る限りの対応を行いました。

社会的養護のもとにある障害児等による地域間交流から生まれるパフォーマンス作品の創作と発表

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

所在地：東京都豊島区

URL：https://www.children-art.net/

2つの地域(東京都小平市、埼玉県さいたま市)にある児童養護施設で暮らす子どもたちや、地域で暮らす障害のある施設退所者等が、音楽やダンス、美術などの文化芸術活動を通して交流し、共に作品創作を経験するワークショップを行う。そして成果を伝える動画の公開や、ドキュメントブックを作成・発行することで、様々な理由で社会との接点を持ちづらい人たちが思い思いの表現活動に取組み、彼らの社会参加の促進が期待できる。

実施内容

●ワークショップの実施

開催日：2021年10月10日、11月6日、28日、12月18日、26日、28日、2022年1月6日、10日、16日、2月6日、19日

場所：二葉むさしが丘学園(東京都)、児童養護施設カルテット(埼玉県)、オンライン(Zoom)

対象：児童養護施設に暮らす子どもたち、地域で暮らす施設退所者など

参加人数：計22人(二葉むさしが丘学園 8人、児童養護施設カルテット 14人)

参加費：無料

内容：2施設の子どもたちや、施設を退所して就労している障害のある若者などが交流を図りながら、音楽やダンス、美術などの表現活動に取り組む中で、関係を深めながら創作活動を行いました。実施場所については、外出の制限があるため、状況に応じてオンラインを活用しながら実施しました。また、内容に関してより丁寧にワークショップが行えるよう、ダンス・音楽・美術の講師が常に一緒に参加するのではなく、一緒に実施する回もあれば、ダンスのみ、音楽のみ、美術のみで実施する回を一部設定しました。

●発表公演

開催日：2022年2月28日

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、施設外での活動や外部からの出入りに制限がある状況が続いていたため、ワークショップの過程や創作したパフォーマンスの成果を録画し、動画での一般公開も行いました。一般公開することにより、本事業の理解者や支援者を拡大しつつ、障害児等の文化芸術活動による社会参加を促しました。

●ドキュメントブックの作成

参加者の言葉や、創作したものを中心にドキュメント化して、障害児等の文化芸術活動による社会参加を促すツールとしました。また、当NPOのウェブサイトに公開し、事業の効果や意義を社会へ広く周知するために活用しました。



Zoomで2施設をつないで画面越しに動きでコミュニケーション



二人組でお互いの人差し指の間隔を保ったまま動くワーク



太鼓やウクレレ、ギターで演奏

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

社会的養護のもとにある障害児等の、アート活動を通じた他者との交流と創造体験

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、児童養護施設への外部からの出入りや、交流に制限がある中での実施となりました。しかし、継続して参加している子どもたちや施設退所者の意欲は高く、オンラインになっても前向きに取り組み、また画面越しでも施設外の他者との関わりを楽しみながら参加していました。音楽、ダンス、美術などいろいろな表現活動を経験す

る中で、個々の得意なことがより活かされ、またお互いの表現を認め合う機会にもなっています。他者とのコミュニケーションの機会が減り、コミュニケーションの方法にも制約のある日常になってしまいましたが、音楽やダンスを共有し、一緒に何かを創作する時間や場を共有することで、他者との創造的な関わりを楽しむ場となりました。

動画やドキュメントブックの公開による活動の周知

最終回には、創作したパフォーマンスを録画し、後日、一般公開しました。また、3年目の活動をまとめたドキュメントブックを発行しました。さらに参加者の声や表現がより届くものとなるよう、個人情報の保護に配慮しながら、美術の活用など工夫して動画を作成しました。

動画やドキュメントブックは、当NPOのHPでも公開し、広く一般に成果を伝えることで、活動の賛同者や支援者の獲得につなげつつ、当事者の社会参画を促すツールとしていきます。



Zoom越しにアーティストとダンス



お互いにつくったダンスや音楽を鑑賞しあう

事業実施における工夫

毎回ワークショップの振り返りでは、児童養護施設の職員、アーティスト、事務局スタッフが参加して、ワークショップを進める上での課題や、子どもたちの反応や近況を共有しながら意見交換して、適宜実施内容に反映していきました。また、アーティストのネットワークを活かして、異なるジャンルのアーティストが関わることで、より子どもたちの

興味・関心を広げることができ、様々な体験をすることで、子どもたちの新たな一面が引き出されました。また、オンラインの実施に際しては、スタッフが機材のセッティングのため施設に向いた他、職員ともそのノウハウを共有し、ストレスなく実施できるよう試行錯誤を重ねました。

新型コロナウイルス感染症の影響

児童養護施設への外部からの出入りや、子どもたち同士が施設を行き来して交流することについて制限が続きました。しかし、講師やスタッフの出入りができるようになり、対面とオンラインでの交流を併用しながら、参加者同士のコミュニケーションを図りました。また、発表については、美術のワークショップで仮面や舞台装置を作成して活用することで、個人情報の保護にも配慮しながら、動画で公開できるようにして、広く一般に成果を伝えることができるようになりました。

事業名 アルテ・エ・サルデーテ「マラー／サド」 ～日伊精神障害者共同演劇配信プロジェクト～

団体名 特定非営利活動法人 東京ソテリア

所在地：東京都江戸川区

URL：<https://soteria.jp/>

事業概要 江戸川区で精神障害者支援を行っているNPO法人東京ソテリアが、エミリア・ローマニャ州立ローマニャ地域保健連合公社精神保健局の患者達によるプロフェッショナルな劇団である「アルテ・エ・サルデーテ」を招聘して演劇公演をおこなう。日本人の精神障害者当事者および医療従事者(医師・看護師など)も各地公演に参加して共同で演劇を作り上げる。講演の他に、各地にて上映会と出演者のトークセッションを企画。

実施内容

2020年5月から国内稽古を行い、2020年10月に公演を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2021年10月に公演予定を延期しました。2021年も招聘公演が叶わない状況の中でも、各地(東京・浜松・名古屋・大阪・仙台)ごとに稽古を重ね5つのシーンを演じ、それを撮影した映像とアルテ・エ・サルデーテの演劇映像を編集し、一つの映像作品としての演劇を作り上げました。招聘公演をおこなうはずだった日に、各地にて上映会と出演者のトークセッションを企画し、映像に多言語化した字幕を入れ込み、配信を行いました。



駆け付けた華原朋美さんからメッセージをいただく



東京会場開始直前の様子

●上映会+トークセッション

開催日：2021年9月29日、10月10日、11日、13日、17日、30日

場所：東京：イタリア文化会館
浜松：クリエート浜松
名古屋：名古屋市公会堂
大阪：ビッグアイ(国際障害者交流センター)
仙台：太白だんだん
ローマニャ アレーナ・デル・ソレ劇場

参加人数：東京：187名+関係者32名

浜松：90名+関係者15名

名古屋：151名+関係者35名

大阪：96名+関係者26名

仙台：60名+関係者21名

●演劇映像配信(多言語対応)

開催日：2021年12月～ 配信

内容：バリアフリー字幕+演劇手話通訳

日本語、英語、イタリア語、中国語、タガログ語、ビルマ語(ミャンマー語)、ベンガル語、の字幕をつけ、配信しました。

<https://theatreforall.net/movie/maratsade/>



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

演劇映像作品制作「マラー／サド」

招聘公演が叶わない状況の中、各地(東京・浜松・名古屋・大阪・仙台)ごとに稽古を重ね、イタリアローマニャのアルテ・エ・サルデーテ劇団のナンニ・ガレツ監督の提示した5つのシーンを演じ、それを撮影した映像と、アルテ・エ・サルデーテの演劇映像を編集し、一つの映像作品としての演劇を作り上げました。招聘公演を行なうはずだった日に、各地にて上映会と、出演者のトークセッションを企画しました。

出演者の属性は精神障害者当事者および、精神保健領域で従事する医療職および福祉職です。日本人が参加したことにより次の効果を期待しました。

- ・日本人の観客にとって、本公演が「外国の出来事」ではなく、「自分のこと」として感じられる
- ・日本人参加者の参加までのエピソードとその心理的背景を共有することが、日本の精神保健の現状の普及啓発につながる
- ・参加する日本人参加者のリカバリーに、直接的に寄与できる
- ・日本でも今後、精神保健領域に演劇等の芸術活動が根付くための一助となり得る

演劇映像配信(多言語対応)

2021年12月に配信を開始。バリアフリー字幕に加え、演劇手話通訳、日本語、英語、イタリア語、中国語、タガログ語、ビルマ語(ミャンマー語)、ベンガル語 の字幕を付け、多言語化することで、広く多くの人に鑑賞していただける機会を作ることができました。また、精神保健に

関する普及啓発資材としてアジアでの活用も視野に入れることができるようになりました。当初予定にはありませんでしたが、映像の仕上がりが大変良かったため、急遽ローマニャでも上映会が開催されました。

事業実施における工夫

本事業の実施により、一般社会の中で精神障害への偏見を減らすことに大きく貢献するものと考えて、実施を決定しました。また、障害者アートの枠から飛び出し、一般のアートの中に障害者が活躍していることを示すことにより、新たなアートの可能性を認識することにつながると考えました。一般市民に対し、アートを通してメンタルヘルスを考えるきっかけを提供するという点において、今までにない保健医療福祉と芸術のコラボレーションであるため、注目度も高く、保健医療福祉と芸術双方において、今までに関係を結ぶことが少なかった領域が双

方結び付くことにより今後の展開も期待できます。精神科病院のない国イタリアとの協働ということで、企画のもつメッセージがより鮮明になったとも考えています。精神科病院大国、精神科の多剤大量処方の問題を抱える日本にとって、本企画の実施は非常に意義深いものがありました。精神科病院の長期社会的入院については本国も動き出し徐々に変わろうとしています。そのような今だからこそ、この企画が持つ意味は多くの人に響くものと考えられます。

新型コロナウイルス感染症の影響

企画した招聘公演を実施することはできませんでしたが、そのための対応策として、映像作品化することを事前に協議していたため、稽古を継続することができました。直前まで、集客が可能なか等不安も大きく、決まらないことが多い中で芸術活動は本当に大変でしたが、その分かわった人々の心に強く残る体験となりました。また、イタリアローマニャとは、準備段階から上映会当日までオンラインで接続し、共同で制作をおこない共に作り上げる形を大切にしました。

ホスピタルシアタープロジェクト2021ーすべての子どもたちと家族のための多感覚演劇の上演ならびにアートマネジメント人材育成事業

特定非営利活動法人 シアタープランニングネットワーク

所在地：東京都多摩市

URL：http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn

劇場での鑑賞が困難な知的障がい児や肢体不自由児などが、周囲に気兼ねすることなく、きょうだい児を含む家族とともに鑑賞できる演劇を創造し、提供することを目的とした事業。ソフト面でのバリアフリーをめざし、ひとり一人がその子なりに楽しめる五感を刺激する多感覚のインクルーシブ・シアターを創造し、上演した他、アートマネジメント・インターンシップを実施。また、オンラインでのシンポジウム、事前に小道具等を送付することで公演をオンデマンドで体験できる配信を実施。

実施内容

●すべての子どもたちと家族のための多感覚演劇「水の記憶」上演・ツアー

開催日：2021年10月2日、3日(横浜市西区・Umiのいえ)／11月20日、21日(新宿区・シャロームみなみ風)／11月27日、28日(世田谷区・コミュニティカフェななつのこ)／12月5日(江東区・放課後等サービスブルーワン)／12月11日、12日(八王子市・島田療育センターはちおうじ)／12月19日(大田区・放課後等サービスボジティブ) 計18公演

対象：知的障がい児、肢体不自由児、重度心身障がい児、医療的ケア児といった、劇場での鑑賞ができない子どもたちとその家族

参加人数：大人・見学者99名、子ども・障害児76名、招待(障害者)5名

参加費：子ども1名+大人1名 2,000円／
同伴 大人1名1,000円、子ども1名500円
見学者2,000円

内容：昨年度の「森からの贈りもの」の経験から、アクリルシートによるシールド無しでいかに安全かつ美しく楽しい体験を届けられるかを主眼とした集団創造を行いました。(プレパフォーマンス10～15分、パフォーマンス30～35分)。事前に一人一人のニーズを探るとともに、自閉症スペクトラムの子どもたちのための事前資料ソーシャルストーリーも用意しました。

●アートマネジメント・インターンシップの実施

対象：大学生

参加人数：1名(+東京芸術劇場インターン生1名)

内容：舞台芸術やアートマネジメントを学ぶ学生が、創造過程・理念、感染症対策、観客とのコミュニケーションに至るまで、実際に参加し、体験として学びました。また、毎年、東京芸術劇場で教育普及事業を主に学ぶインターン生の公演見学、公演後のディスカッションを実施していますが、そこにもインターン生が参加しました。

●オンラインイベント

①シンポジウム「多感覚演劇のめざすかなた」

②配信「水の記憶～お家で多感覚演劇遊び」

開催日：①2022年2月19日

②2022年2月20日～28日

参加費：①700円 ②1,500円

内容：シンポジウムは、シェアリングを目的とし、地方からも多くの参加者を得ました。配信では、公演で活用した小道具の一部を申込者に事前に送付することで、公演のダイジェスト版の映像にあわせて、家にいながらにして多感覚演劇の遊びを体験できるようにしました。



光る滝



自分で水の妖精に顔を描く (撮影:奥秋圭)



滝から湧きあがるシャボン玉

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

誰もが苦しい時期に、安全で美しい鑑賞の場の提供

自粛生活が続く中で、障がい児や重度肢体不自由児、医療的ケア児等、最も弱い存在を抱えるご家族は、想像もつかないほどのストレスを抱えて生活してきました。このような状況にあっても、すべての子どもたちには遊びや楽しみが必要であり、安心して参加できる場の提供は、大変喜ばれました。「公演の前で子どもの様子が全く変わっている」「心地良かったのかトローンとしながら声を出していた」「素敵な音楽の中で過ごせてとても楽しかった」

「光の使い方が美しかった」「目からの情報、耳からの情報の両方を使って子どもの個性によって入りやすい情報の受け取り方ができた」「体ごと楽しんでダメと言わなくて良いのは本当に助かる。すべての感覚が使えてなかなかできない体験だった」「手にすることができるので、子どももその場に「居やすくなる」というのが発見だった」「最初は少しだけドキドキしているようだったが、すぐに引きこまれていった」等の感想を頂きました。

「観客の存在なしには決して完成しない作品」から学ぶ、観客とのコミュニケーション

言葉では観客の重要性やバリアフリーを語っていますが、本質的なバリアフリー化はまだ道が遠い状況です。本事業はソフト面のバリアフリー化を通して、観客と寄り添うものです。この事業に参加したアートマネジメントのインターンシップ生からは、「私が一番衝撃を受けたのは、お客さんは一人ひとり全く違う人間であるという発見です。そんなのは当たり前だと思うかもしれませんが。(中略)多くの通常の劇場では、番号のついた客席に座られ、上演中は基本的に音を出さないことを強いられます。観客は一個人である前に、均一的に「同じであること」を強いられるのです。これによってクリエイターは自分の見せた

いものを、作りたてのクリーンな状態で観客に届けることができます。彼らは自分の用意してきた作品が、観客の手によって変えられてしまうことを恐れるのです。(中略)私が参加させていただいた今回の作品は、観客の存在なしには決して完成しない作品です。あらかじめ決められた台詞や、細かい筋書きがあるのではなく、パフォーマーの方たちは観客と対面することで、毎回、初めて、新しい自分の役割を見つける…(中略)作品自体をお客さんとともに作り上げるのがホスピタルシアタープロジェクトなのだと感じられました。」と報告書に記載してもらいました。

事業実施における工夫

昨年度に続き、マスクを舞台衣装の一部として取り入れました。子どもが自由に動き回っても安全な空間とともに、感染症対策としてパフォーマンスの中に手指の消毒を取り入れました。子どもだからといって、アニメやわかりやすい音楽を選曲せず(イメージが固まってしまうため)、大人でも楽しめるクラシックと新曲を用意。それぞれにとって心地よい、選べる観客席の設定や、呼吸を飛ばさないためにシャボン玉を吹くのではなく、マシンを活用しました。感覚を刺激する小道具については、できる限り、家庭でその遊びを再現できるものを意図し、入手しやすい素材を活用しました。参加者には、イベントへのワクワク感や一体

感が増すように、何か水色か青色のものを身につけてご参加いただくようにしました。柔軟なプレパフォーマンスを設定することにより、子どもが空間や人に慣れるようにし、自閉症の子どもたちのためには事前資料ソーシャルストーリーをHPに掲載しました。事前に苦手なもの、配慮の必要な事項(アレルギー、点滅する光や大きな音等)を確認し、観客席にいられない子どもには、パフォーマーが1名寄り添い、取り残されないようにパフォーマンスや遊びを提供しました。どんな事態が生じても対応できるように、目的と何が重要なのかをカンパニーでシェアして実施しました。

新型コロナウイルス感染症の影響

感染状況の急激な悪化が続く中、8・9月の公演をすべて延期し、再スケジュール化を余儀なくされました。民間の施設をお借りしているからこそ、スムーズに新たなスケジュールを組むことができたと考えています。当初のスケジュールには、1か所公共施設での開催も含まれていましたが、東京都の酸素ステーションとなってしまう、再スケジュールの際、見通しが立たないため、放課後等サービスでの上演に変更しました。

団体名 公益財団法人 現代人形劇センター

所在地：神奈川県川崎市

URL：http://www.puppet.or.jp/

事業概要

時代と共に聴覚障害者の社会包摂は進んでいる。しかし生きづらさを抱えたまま高齢になったろう者や、あるいは独自の言語取得により多様な表現手段を身に着けた高齢の聴覚障害者の存在について、多くの人々の日常の中で顕在化されているとは言い難い。本事業の主旨は、聴者とうろう者の協働による人形劇団「デフ・パペットシアター・ひとみ」が長年にわたり培ってきた芸術表現と高齢ろう者の歴史や経験を接続し、広く発信することである。高齢ろう者を対象としたリサーチやワークショップで得られたエピソードをもとに劇団員がパフォーマンスを発表し、その模様を撮影・ダイジェスト編集して動画サイトに公開する。

実施内容

●リサーチおよびワークショップ

芸術家チーム(デフ・パペットシアター・ひとみ/花崎攝)が神奈川県川崎市在住のろう者を対象に、数回の対面調査を実施しました。個人的なエピソードのみに限らず、高齢ろう者を取り巻くさまざまな状況についてお話を伺うことができ、パフォーマンスの内容についても助言を頂きました。これらをもとに、愛知県・岡山県の高齢ろう者団体を対象にワークショップを実施しました。

<対面調査>

調査の際は以下の点に留意しました。

- ・必ず手話通訳担当者を配置する
- ・対象者の話しやすい場所でお話する
- ・調査当日の話のテーマを事前にお知らせしたり、テーマに沿った思い出のものを持ってきてもらうなど話に入りやすいよう配慮する
- ・お話をいただいた内容を記録する

<ワークショップ>

日時：①2021年8月19日、20日
②2021年9月24日

場所：①就労支援事業所「桃」(愛知県)
②高齢ろう者サロン「ももハウス」(岡山県)

内容：実施したワークショップでは、両日ともに20名強の高齢ろう者が参加しました。「子どものころの遊び」をテーマに身体や絵での表現を行い、参加者それぞれの記憶を掘り下げました。

2日目の最後にはいくつかの思い出の場面をグループごとに寸劇として構成し、参加者間での発表を行いました。

●成果発表会「とびだせ！思い出のカケラ」

上記リサーチやワークショップを通じて得られた高齢ろう者のエピソードをもとに、芸術家チームが創作したパフォーマンスを発表しました。発表会は神奈川県川崎市、愛知県春日井市の2ヶ所で行い、実際にリサーチやワークショップに参加された方を中心に、一般にも広報を行いました。

開催日：①2021年12月19日
②2021年12月23日

場所：①大山街道ふるさと館(神奈川県)
②文化フォーラムかすがい(愛知県)

参加費：無料

内容：発表会では、高齢ろう者サロン「ももハウス」(運営：NPO法人岡山聴覚障害者支援センター)と発表会の会場をオンラインで繋ぎ、相互の交流を行いました。

ワークショップの様子



成果発表会の様子



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

「語り直し」による自己の再発見と相互理解

デフ・パペットシアター・ひとみは、聴者とうろう者が共に創作・上演活動を行う人形劇団であり、これまでも手話や音声言語、そしてさまざまな非言語による表現を探求してきました。今回のリサーチおよびワークショップでは、こうした経験を活かし、手話や身体表現、絵画などの多様な手法を用いて高齢ろう者自身の記憶の掘り下げを行いました。参加者から多く聞かれたのは、「自分でも長らく忘れていたことを思い出した」、そして「普段から親しくしている参加者同士でも新たな側面を知ることができた」という感想でした。それは、同世代を生きたくろう者同士の共

感や、反対に、置かれた環境によって全く異なる体験をしていた驚き等でした。ワークショップで訪問した施設の職員からも、「思い出を語る利用者さんがとてもいきいきとしていた。こうした活動を継続的に実施したい」との声をいただきました。

また、発表会では実際にリサーチ、ワークショップにご参加いただいた方々をお呼びし、パフォーマンスをご覧いただきました。参加者それぞれの思い出のエピソードを新たな形で体験していただいたうえで、その観劇体験を基にした対話も深めることが出来ました。

高齢ろう者という存在について、広く発信する

高齢者およびろう者のそれぞれの生活や文化についての社会的な認知度は、日々向上しています。しかし、高齢になったろう者という存在について考える機会は、当事者と直接の接点を持っている方を除けば、多いとは言えません。高齢ろう者の個人史を伺うと、それはときに日本の聴覚障害者、ひいてはさらに多くの障害者や異文化をとりまく歴史と関係しています。しかし差別や分断の歴史が大きな影を落とす一方で、今ほどに合理的配慮という言葉が知られていなかった時代においても、今とはまた違う形で、地域の中で聴者とうろう者がおおらかに共生してい

たことを伺わせる愉快的エピソードも少なくありませんでした。

今回の芸術家チームによる発表は「高齢ろう者」という一様な在り方を表現するものではなく、あくまで様々な高齢ろう者のお話の寄せ集めとして創作しました。パフォーマンスの様子はダイジェスト化し、劇団のYouTubeページにて発信しました。こうした発信から多くの人々が彼らを知り、彼らの思い出を追体験し、決して一様ではない彼らに思いを馳せることで、現代の社会包摂をも見つめ直す端緒とすることができるものと思います。

事業実施における工夫

ろう者を対象とした聞き取りの際には手話を用いました。また、高齢のろう者では受けた教育等の差異によって手話表現に大きな違いが見られることが多々あります。今回のワークショップでは情報の正確さを期すため、日常的に親しくコミュニケーションされている施設スタッフの方々に多大なご協力をいただきました。さらに、日本手話は書き言葉を持たず、文字による表現を苦手とするろう者が多いことを考慮し、絵を通して自己表現を行うワークショップを実施しました。



ワークショップの様子(オンライン)

新型コロナウイルス感染症の影響

計画されていた高齢者施設の訪問・交流に大きなハードルがありました。特に入居型の施設では、多くが家族以外の面会謝絶や外部者の見学停止を実施しており、ついに今年度は訪問することが叶いませんでした。また、高齢ろう者の集いの場となるサロン活動も中断している場合が多く、新規の繋がりを増やすのが大変難しい状況でした。部分的にオンラインでの交流を取り入れ、PCR検査や検温、消毒を徹底することでなんとか事業を実施出来ました。

事業名 熊川宿若狭美術館を拠点とする芸術文化推進事業

団体名 特定非営利活動法人 若狭美&B ネット

所在地：福井県三方上中郡若狭町
URL：http://wakasa-monozukuri.net/

事業概要 障がい者アーティストの制作拠点「若狭ものづくり美学舎きらりアート部」を県内に拡大、2カ所にサテライト教室を開設し多数のプロ級作家を育成して、福井県障がい者アート作品公募「きらりアート展」の充実を図る。また、当法人が運営する熊川宿若狭美術館において、福井県きらりアートアーカイブ事業を推進するとともに、障がい者アート、子ども美術、現代美術を同時同列に展示し、障がい者アートの鮮烈な独自の世界を発信し、真の地域共生社会の実現に取り組む。

実施内容

●第12回福井県きらりアート展公募展開催(若狭町社会福祉協議会連携事業)

日時：2021年10月14日～25日
場所：福井県若狭町「パレア若狭ギャラリー」
内容：若狭町主催の「ハート&アート・フェスタ」の主要なイベントとして開催、昨年よりも32点増加し、166点の応募がありました。入賞した作品は、入賞選抜展として、県庁ロビー、美浜町なびあす、ネットヨタ福井店、熊川宿若狭美術館で開催しました。

●福井県「きらりアーティストアーカイブ資料集 No.4」編集

昨春、作成・発行した「きらりアーティストアーカイブ資料集No.1、No.2、No.3」に続き、今年度は、個人15名、2団体の活動を調査し、続編のNo.4を発行しました。

●若狭ものづくり美学舎きらりアート展活動 若狭教室・春江教室・越前(一陽)教室

平成23年春に開設した若狭ものづくり美学舎きらりアート部を、今年度から、福井県全体に広げる計画で、サテライト教室を開講しました。受講生全員が福井県きらりアート展に応募、多数入賞しました。



きらりアート部の制作の様子
(サテライト春江教室)

●熊川宿若狭美術館企画展

計6回の展示会を開催しました。
①障がい者アート「きらり織」展
開催日：2021年4月3日～7月12日
入場者数：1,986人

②障がい者アーティスト「藤原孝」展
開催日：2021年7月23日～9月27日
入場者数：2,231人

③障がい者アーティスト「中西軍治」展(1)
開催日：2021年10月2日～11月8日
入場者数：4,300人

④障がい者アーティスト「中西軍治」展(2)
開催日：2021年11月12日～12月20日
入場者数：9,807人

⑤障がい者アート「若狭ものづくり美学舎きらりアート部+α」展
開催日：2022年1月14日～2月14日
入場者数：678人

⑥「第12回きらりアート展選抜展」
開催日：2022年2月25日～3月28日
入場者数：574人

●2021年度 熊川宿若狭美術館活動報告書発行
平成30年5月に開館し活動を続ける熊川宿若狭美術館の年度毎の活動報告書レポートを発行し、関係者に配付しました。

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

障がい者アートの魅力を発信し、地域共生社会づくりに貢献

第12回福井県障がい者アート作品公募「きらりアート展」の開催、年間6回に及び熊川宿若狭美術館における障がい者アート、子ども美術、現代美術を同時同列に展示する企画展の開催などによって、障がい者アートの評価が高まり、

障がい者への理解が深まっています。障がい者アート作品が今年度から若狭町ふるさと納税の返礼品となるなど、「障がい者アートを我が家の玄関に」を合い言葉にコレクションが地域全体に広がっています。

障がい者アーティストの制作の場を広げ、多くのプロ級作家を育成

若狭ものづくり美学舎きらりアート部は、福井県嶺北地域の坂井市春江町と越前市でサテライト教室を開講し、障がい者アーティストが倍増、指導者、サポーターも倍増しました。福井県きらりアート展で多数が入賞し、他に坪内一真が

福井県総合美術展で審査員賞を受賞、熊川宿若狭美術館で開催された藤原孝と中西軍治の個展が脚光を浴び、江戸雄飛がNHK Eテレ「no art no life」で放映されるなど、プロ級作家を多く輩出しています。

障がい者アート、子ども美術、現代美術を同列に展示し、多くのファンを獲得

熊川宿若狭美術館における障がい者アート、子ども美術、現代美術を同時同列に展示する企画展の充実は、障がい者アートをはじめ3つの現代美術としてお互いの評価を高め合っています。また、このような美術館の展示は、他美術

への関心を深め合うとともに、多様な美術にふれあうことが出来る魅力ある観光スポットとして、日本遺産・重要伝統建造物群「熊川宿」を訪れる観光客を巻き込んで、多くの障がい者アートファンを広く獲得しています。



ギャラリートーク



第12回きらりアート展



事業実施における工夫

当法人の若狭ものづくり美学舎で、きらりアート部、一般部、幼児・児童部のアート制作活動を広く展開、またそれらに関連する福井県障がい者アート公募「きらりアート展」、障がい者アート展、子ども美術展、現代美術展等を企画開催。その中で福井県きらりアートアーカイブ事業を展開し、

確かな情報をもとに、当法人が運営する熊川宿若狭美術館で集約する形で、障がい者アートを主に、3つの現代美術を同時同列に展示するなど、障がい者アーティストの育成、展示(発信)、コレクションとすべてを連携させながら取り組み、真の共生社会実現を目指しています。

新型コロナウイルス感染症の影響

美術館の展覧会については、展示場の消毒作業を1日3回実施するほか、殺菌灯を設置し換気扇と合わせて三密を回避するなど十分な対策をしました。また来場者には、手指消毒や検温、観客の展示室への入室を10人までとして予定通り実施。ギャラリートークは人数制限をして実施しました。アーカイブ事業については、予定の訪問先のお断りもあり、9月末まではスムーズな取り組みが出来ませんでした。

「表現未満、プロジェクト」 共生社会実験場・街の文化創造発信拠点「たけし文化センター連尺町」

特定非営利活動法人 クリエイティブサポートレッツ

所在地：静岡県浜松市

URL：http://cslets.net/

「表現未満、」とは、多様な人々の表現(たとえそれが取るに足りないといわれるものでも)を大切にできる社会を目指す文化活動である。今年度はコロナ禍で大きな打撃を受けた中心市街地において街のステークホルダーとともに、衰退のシンボルと化している広大な空き地で、「表現未満、」を主体としたアートイベントを開催した。また、表現の場を失ってしまった市民に対して、「たけし文化センター連尺町」(障害福祉施設併設)を開放し、ともに表現活動を楽しむ機会や障害のある人と出会い、表現し合う機会を創出する。

実施内容

●オン・ライン・クロスロード

開催日：2021年11月3日～11月7日

場所：松菱跡地(静岡県浜松市/中心市街地)

参加人数：3,000人(延べ)

内容：コロナ禍において活気を失った浜松中心市街地のシンボルであり、20年間空き地となっている松菱跡地(1,400坪)を借りて、アート、街づくり、食をテーマに地域のステークホルダーとともにアートイベント(オン・ライン・クロスロード)を行いました。コロナの状況もあり開催が危ぶまれましたが、多くの方々のご尽力によって盛大に行うことが出来ました。また20年間塩漬け状態となっている空き地を開放したことには新聞各社(全国2紙、地方紙2紙)が特集を組むなど多くの反響がありました。

同時開催

1. オン・ライン・ワークショップ(11月3日)

2. 推し★たん!! (11月6日)

「表現未満、」を集め講評する、雑多な音楽の祭典「～スタ☆タン!!Z～全国ツアー」の浜松版を実施しました。

3. 砂と砂利と音(音楽ステージ)(11月6日・7日)

市民の表現の場として開放し、音楽、語り、パフォーマンスなど多様な市民の表現が繰り広げられました。

4. 松菱商店(マルシェ)(11月4日～7日)

街のステークホルダーの協力をもとに15ブースのマルシェを開催しました。

5. 松菱跡地を歩こう!遊ぼう!(11月4日～7日)

会場を開放し、多くの市民がオン・ライン・クロスロードを歩いたり、くつろいだり、遊んだりできる場を提供しました。

6. 街づくりを考えるトーク(11月5日)

街のステークホルダーや有志の皆さんの主催で、これからの街について、松菱跡地の今後を話し合い、オンラインで配信しました。

7. 「表現未満、」リサーチプロジェクト 障害・文化芸術・共生社会～(11月4日)

5人の研究者と「表現未満、」を考えるトークセッションを実施しました。

●たけし文化センター連尺町を市民に開放

中心市街地にあるたけし文化センター連尺町を市民の表現活動の場として開放しました。また定期的に音楽ライブ、クラブイベント、トークイベントを実施し市民に表現の場を提供しました。

<市民を対象とした講座の実施>

①パフォーマンス体操

開催日：2021年4月～2022年3月(月1～2回)

参加人数：延べ250名

参加費：無料

<市民を対象とした音楽イベントの開催>

①玄関ライブ

開催日：2021年4月～2022年3月(月1回)

参加人数：延べ300名

参加費：無料

②クラブ・アルス

開催日：2021年6月・11月、2022年2月

参加人数：1回30名

参加費：無料

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

市民(障害者およびアートNPO団体)が街を開いた

コロナ禍により沈滞してしまった中心市街地で、20年間閉じられていた松菱跡地を開放し、誰もが通ることができる道をつくり、市民が遊び、くつろぎ、表現する場を設けたことで、モノを売る・買うといった商売だけではない街のあり方を、改めてこの街に提示することが出来ました。文化・芸術によって、賑わいや場づくりができ、この街の指標となる可能性を示すことができました。障害者施設を運営するNPO法人がこうした事業を市民と協働して行ったことは、街の人々から驚きの声を受けました。平成28年から行っ

てきた「表現未満、」プロジェクトは、6年間の事業を通して多様な人たちの表現活動が共生社会実現に大きな役割を果たせることを示しました。特に今年度行ったオン・ライン・クロスロードは、コロナ禍を経てより一層市民に届き、その必要性が顕在化する結果となりました。多くの反響があり、今後、中心市街地に産業振興だけではなく、福祉の視点を盛り込んだビジョンを指し示すことも当法人に望まれています。次年度も地域のステークホルダーと協力しながら事業を進めていきたいと考えています。

障害福祉施設の地域資源化～街の文化創造発信拠点となる

中心市街地にあるたけし文化センター連尺町を、コロナ禍で表現の場を失った市民に開放し、音楽ライブやパフォーマンスを常時行ったことは、文化・芸術が人々の生きる力となることを印象付けました。また、エッセンシャルワークである障害福祉施設がこうした発信をし続けたことにより、障害者施設が地域の文化創造発信拠点となること、そ

れが地域の心のセーフティネットにもなることを強く印象付けることが出来ました。ますます増える障害者利用者に対応しながらも文化拠点として次年度以降も継続して様々な事業に取り組んでいきます。またこうした拠点を、地域と協力しながらこの街に1つでも多く創り出していくことも当法人の責務です。



音楽イベント「玄関ライブ」を開催



街づくりを考えるトーク



クラブ・アルス

事業実施における工夫

コロナ禍において、障害福祉施設と文化施設運営の両立はますます難しくなっています。しかし、コロナ禍だからこそ、思うように事業を行うことができない文化施設やアーティストたちと連携しながら、施設を開き、多くの困りごとを抱えている人や、表現活動を行いたい人々を受け入れていく

べきであると考えます。そうした活動により、障害のある人だけでなく、街の多くに人たちにとっても大切な拠点となることは、障害者の社会的な地位を変え、共生社会を推進していく力となると考えています。

新型コロナウイルス感染症の影響

コロナ禍において万全を期しながら、中止することなく事業を行いました。そして一人の感染者も出ませんでした。滞り者への抗原検査、PCR検査の徹底、会食を伴う交流のチェック(人数制限、検査の要請など)、スタッフだけではなく多くの関係者への周知やルールの徹底を行いました。経費の加算は見られたものの、感染者を出すことなくイベントが行えることがわかりました。

障害のある人の表現の場や発表の場、支援者以外の人との交流を絶つことは、彼らの健やかな生活を害するものであることもわかってきました。人に会うこと、表現することを決して止めることなく、万全を期す方法を今後も探っていきます。

団体名 特定非営利活動法人 ポパイ

所在地：愛知県名古屋市

URL：https://www.mo-ya-co.info/

事業概要 Presenceとは「今ここに在る」という意味。「今ここに在るけれど目に見えない・当たり前すぎて意識していないもの」をテーマに「近くの音：音楽」「近くの植物：美術」「わたし：ダンス」の3つのトピックと期に分け、ワークショップを行い、プロセスを一般参加者にオンラインで視聴してもらう。また、ビデオ撮影し、外出困難な重度障害者と、その人たちをケアするスタッフの参加、他事業所との新たな連携を開示することで、アーティストや国内外の事業所との連携のあり様や方法を参照として示す。それらを通して障害者による文化芸術活動の推進と認知を大きな目的に据え、障害者が事業所にいながらも参加できる芸術活動と国際交流の機会創出を目的とする。

実施内容

●ワークショップ

特定非営利活動法人ポパイ(名古屋)、ルーセラシ・サービス(オーストラリア)、埼玉福興株式会社(埼玉)の3団体で連携し、オンラインを使った芸術活動と国際的な連携を新たに示したワークショップを実施できました。

①美術ワークショップ「近くの植物」

開催日：2021年5月～7月(法人ごとに毎週実施)

参加人数：各法人、障害当事者10名+スタッフ

ファシリテーター：ニシムラマホ(ポパイ)、
マーク・パース(ルーセラシ・サービス)、
若月秀一(埼玉福興)

②音楽ワークショップ「近くの音」

開催日：2021年7月～9月(法人ごとに毎週実施)

参加人数：出演者35名

ファシリテーター：野口桃子・沖直子(ポパイ)、
アーロン・シャナハン(ルーセラシ・サービス)、
天内雅子(埼玉福興)

③ダンスワークショップ「わたし」

開催日：2021年10月～11月(法人ごとに毎週実施)

参加人数：各法人、障害当事者10名+スタッフ

ファシリテーター：高木理恵(ポパイ)、
アンナ・キーン(ルーセラシ・サービス)、
小林みゆき(埼玉福興)

コーディネーター：山口光(ポパイ)、クレア・アベルト(ルーセラシ・サービス)、新井利昌(埼玉福興) ※各回共通

●一般参加者のオンライン視聴

一般傍聴者を募集し、各ミーティング及びワークショップをオンライン視聴で参加できるようにしました。

①音楽ワークショップについてのミーティング

開催日：2021年7月30日

参加人数：スタッフ、一般参加者15名

②音楽ワークショップ振り返りミーティング

開催日：2021年9月14日

参加人数：スタッフ、障害のある方4名、一般参加者6名

③ダンスワークショップについてのミーティング

開催日：2021年10月14日

参加人数：スタッフのみ(一般参加者募集せず)

④ダンスワークショップ振り返りミーティング

開催日：2021年11月25日

参加人数：スタッフ、一般参加者3名



美術ワークショップの様子



音楽ワークショップの様子



ダンスワークショップの様子

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

芸術活動の機会創出

重度の障害があるメンバーは以前から外出や芸術活動の機会が少なかったのですが、コロナの影響で更に激減しました。そのため、今年度の事業では、アーティストに事業所に出向いてもらい、メンバーと出会うところからスタートし、テーマに即したワークショップを創り、共に体験するという一連の企画をしました。人や環境に合ったワークショップ内容を考案して、実際に実施していくと、想定と異なることが

顕在化し、それに合わせた変更も起きました。障害のあるメンバーもアーティストも新たな体験を多く得られ、スタッフも障がいのあるメンバーや芸術活動に対して、新たな気づきを得ることができました。成果を求めるのではなく「やってみる」ことから派生した臨機応変さと素直な発見を生み、誰にでも参加できる芸術活動となりました。

芸術活動によるエンパワーメント

上記のような体験を重ねていくうちに、芸術活動によるメンバーへの新たな気づきや、コミュニケーションや関係性の変容が起きました。例えば、参加したスタッフから「普段一緒に過ごしているメンバーの新たな一面を知り、その人の関心事や微細な反応、生命そのものを実感した」という感想がありました。これは正に本事業のテーマに据えていたものでした。当法人・連携団体ともに、これらの活動の意

義や効果を体感することとなり、次年度以降もそれぞれの場で継続して実施していくことを決めました。アーティストも継続的な関わりを希望しています。これほどの波及は想定していませんでしたが、障害者との芸術活動の機会創出や促進に留まらず、芸術が人々をエンパワーメントする事例となったことを驚きと共にとっても嬉しく思っています。



埼玉福興での開催の様子



ルーセラシ・サービスでの開催の様子

CONFUSION
INCLUSION
- Presence -



CONFUSION INCLUSION～Presence～ ダイジェスト映像

事業実施における工夫

成果を求めるのではなく「やってみる」ことに重きを置きました。想定はしても到達するゴールは決めず、あくまでテーマに沿いながら参加者の様子やファシリテーターであるアーティストの感覚を大切にして、柔軟且つ臨機応変に進

めました。そのことが、当たり前だと認知していたことや、見過ごしていたことに気付く機会に結び付き、コミュニケーションや関係性の変容、その人自身の喜びに繋がったと思います。

新型コロナウイルス感染症の影響

コロナ感染拡大によるロックダウンにより、連携団体のオーストラリア ルーセラシ・サービスが活動できなくなり、オンライン振り返り会の延期が一度ありました。また、取り組みの方法を知っていただくためにワークショップの打ち合わせも開示したいと考え、実施しましたが、日程変更が起きたり、当初予定していた内容が変更になったりと、タイミング良く行えず傍聴者に十分には伝えることができませんでした。

事業名 障がいのあるアーティストによる支援学校の文化芸術推進事業

団体名 社会福祉法人 素王会アトリエ インカーブ

所在地：大阪府大阪市

URL：http://incurve.jp/

事業概要

本事業は、支援学校の生徒が文化芸術活動に親しむことができる観賞・創造の機会を提供し、アート活動を通じた社会参加の可能性を広げることを目指して行う。「東京2020オリンピック・パラリンピック公式アートポスター」のアーティストのひとりに選ばれた新木友行さんによる授業を行い、アーティストとしての活動やアートを通じた社会参加について話してもらう。また、自由に絵を描くワークショップを行い、作品を体育館に展示。支援学校の生徒がアートを体感する機会を作る。さらに、授業の内容を冊子にまとめ、大阪府内の支援学校へ配布する。

実施内容

●支援学校での授業の開催

開催日：2021年6月28日

対象：大阪府立住之江支援学校高等部3年生と教員（約50名）

内容：「東京2020オリンピック・パラリンピック公式アートポスター」のアーティストのひとりに選ばれた新木友行氏が、大阪府立住之江支援学校の「総合的な学習の時間」において高等部の生徒に向けた授業を行いました。80分（40分×2コマ）の授業で、アーティストとしての活動や作品に込めた想いをお話しし、アートを通じて社会と繋がる姿を紹介。また、アートの楽しさを感じてもらうことを目的に、新木さんと生徒が自由に絵を描き、完成した作品について発表しあう参加型のワークショップを行いました。テーマは「自由なアート」。好きな画材を使って、心の赴くまま絵を描く時間を共有することが出来ました。さらに、東京2020パラリンピック公式アートポスターに選ばれた作品をはじめ、新木さんの代表作品を体育館に展示しました。

●冊子・動画の作成・配布

開催日：2022年2月～3月

対象：大阪府内の支援学校高等部の生徒

内容：授業の様子と新木さんのアーティスト活動をまとめた冊子を作成し、大阪府内の支援学校（約20校）に無料配布しました。冊子には、授業の内容、新木さんの活動・作品、生徒の感想、教員へのインタビューを掲載。支援学校の生徒が読みやすい内容となるよう、フォントやカラーに配慮するとともに、画像を多く使用し、視覚的に理解しやすいデザインにしました。また、補足資料としてナレーションをいれた動画を作成。文字情報が届きにくい方にも分かり良いものになるようにしました。



授業の様子(動画)



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

支援学校にアートを届け、将来の可能性を広げる

新木さんの存在を通して、支援学校の生徒やその支援者に、アート活動を通じた社会参加の可能性を感じていただくことが出来ました。新木さんは、自身も身体・知的に障がいがあり、大阪府内の特別支援学校を卒業後、インカーブに所属。約20年間にわたり創作活動を続けてきました。自身の才能を活かし世界を舞台に活躍する新木さんが、アートを通じた社会参加の姿を伝えました。授業後に参加

者から「将来の選択肢が広がった」との感想をいただきました。障がいのある方の文化芸術活動を推進するためには、「アートに触れる機会を持つこと」「アートを通じた社会参加の存在を知ること」が不可欠です。アート活動を行う福祉事業所が地域の支援学校に出向き、作品発表や活動紹介をすることで、障がいのある方の文化芸術活動を促進することにつながったと考えます。

アートに触れる機会の創出

新木さんの代表作である「東京2020オリンピック・パラリンピック公式アートポスター」や「約2mの大型作品」を体育館に展示し、参加者がアートに触れる機会を感じていただきました。支援学校は一般の学校に比べ、外部講師を招いたり卒業生が登壇したりすることが少なく、卒業後

の進路について考える機会が生徒自身の周囲に限られている場合が多いです。支援学校卒業後アーティストとして世界的に活躍している人と出会い、その活動について直接聞いたり実際の作品を見る機会は少なく、「アートを身近に感じる事ができた」との感想をいただきました。

冊子配布によって波及効果を狙う

本事業の内容をまとめた冊子を大阪府内の支援学校高等部の生徒に配布し、「アートを通じて社会参加する可能性」と「アートに触れる機会の提供」に貢献することを目指しています。冊子には新木さんの紹介だけでなく、支援学校

の先生方へのインタビューや、授業に参加して下さった生徒の感想などを掲載。次年度以降、他の支援学校にも対象を広げ、大阪府内に成果を広げていくことを目標としています。



事業実施における工夫

アートを通じた社会参加を身近に感じてもらえるよう、支援学校の先輩である新木さんに授業を依頼しました。授業では、生徒が興味を持てるよう、創作風景や展覧会などの映像を多く紹介しました。また、自由に絵を描き、完成した作品について発表しあう参加型のワークショップを開催。アートの楽しさを体感できるとともに、新木さんと生徒がアートを介して交流し合える内容としました。より多くの方が読みやすいものになるよう、本文中のフォント

はユニバーサル仕様のフォント・カラーに配慮し、識別しにくい色の組み合わせを避けています。また、読みやすい冊子になるよう、本文で使用する漢字は「小学校6年生習字程度」とし、すべての漢字にルビを振っています。さらにデザインはページを開いたときに一目で理解でき、生徒の心に長く残るような冊子を目指しました。補足資料として、ナレーションをいれた動画をQRコードで添付し、文字情報が届きにくい方にも分かりやすいようにしました。

新型コロナウイルス感染症の影響

感染状況に配慮しながら、授業の開催や形式（オンライン等）を検討しました。

新木さんと生徒の事前顔合わせをオンラインで設定し、機材準備や接続テストを実施しました。

授業中は、生徒同士のソーシャルディスタンスを確保し、窓を開けるとともに大型扇風機を常時稼働することで換気を実施しました。また、講演者および参加者のマスクの着用を徹底し、三密を避けるため1・2年生はビデオ中継で参加しました。冊子掲載に伴う教員へのインタビュー・デザイナーとの打ち合わせもすべてオンライン・電話で行いました。

障害のある児童や成人の身体的芸術活動(ブレイクダンス)の創造と発表の機会を確保・充実させる取り組み

日本アダプテッドブレイン協会

所在地：大阪府大阪市

URL：<https://yozigenz.com/jaba>

「心身や表現の多様性を認めオリジナリティの高さを讃える。」ブレイクダンスの風土を、障がいを持つ成人・児童に伝えて、障がい者が中心となったダンスコンテストとワークショップを開催する。「アートファンクブレイン」は心身に障がいを持つ人だけでブレイクダンスコンテストを障がい者スポーツセンターにて行い、「アートファンク大阪」は自由な参加形式かつオールジャンルのショーケースダンスコンテストを一般の施設で行う。「ごちゃ混ぜワークショップ」は体を動かして自己表現する工夫を自然にストーリー仕立てで参加しやすくしたワークショップを実施。

実施内容

●アートファンクブレイン

開催日：2021年6月27日

場所：大阪市長居障がい者スポーツセンターおよびオンライン配信(アーカイブ)

対象：心身に障害を持つ人

参加人数：28人(ダウン症、脊椎損傷、発達障害、脳性まひ、他)

YouTube配信+アーカイブ868回

参加費：無料

内容：健常者に混じるのではなく、障がい者が中心となったダンスバトル(コンテスト)を開催しました。

●アートファンク大阪

開催日：2021年9月26日

場所：グラッフィホール(大阪市住之江区)

対象：障がい/健常の垣根を無くした全ての人

参加人数：72人YouTube配信+アーカイブ554回

参加費：無料

内容：健常者/障がい者/その組合せの自由な参加形式のショーケースダンスコンテスト アクセス(公共交通機関から乗り入れ)が良く、多目的トイレと付近に緊急医療体制が整っているテナントビル内にあるダンスホールにて開催しました。

●夏休みごちゃ混ぜワークショップ

開催日：2021年8月21日

場所：大阪市長居障がい者スポーツセンター

対象：障がい児童とその家族

参加人数：5家族(15人)

参加費：無料

内容：ストリートダンサー/楽器奏者/パントマイム/元タカラジェンヌのアーティスト達で、障がい児・者に様々な文化芸術体験をショーケース形式で提供。各障害の身体的/精神的/知的負担を減らすべく多種多様な文化・芸術・音楽の自己表現の種類を用意して専門家に指導してもらったワークショップ、最後は全員がみんな一つのストーリーを作る筋書き仕立てのイベントを実施。障害特性により種目によっては参加に躊躇する児童もプロのパフォーマーの指導で最後には全てのジャンルに取り組むことに成功しました。



障がい/健常、ダンスのジャンル、垣根無しのダンスバトルコンテスト



障がい者だけのブレイクダンスに絞ったダンスバトルコンテスト



アートファンク ビューティ「明日のワタシを強くする」

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

オンラインによる情報発信で、広い地域に波及

障がい者が主役となった文化芸術事業を、日本で一番最初に建てられた大阪市長居障がい者スポーツセンターで開催できたことは、大きな成果です。新型コロナ感染防止のために施設に入場制限(体育室40名、観覧席30名)がありました。YouTubeによるオンライン配信も行い、審査員演技とアーカイブを含め多くの視聴がありました。大阪まで来難い地方在住者や移動困難な障がい者にもアクセスが可能だった点をふくめて大成功でした。これら広範囲な情報発信により、モデルとして大阪府・西日本と広

い地域に波及し、複数の地域で同様のイベントが開催される運びとなりました(既にアートファンク(地域)として開催が広まりつつあります)。これについては、全国大会開催も予定されています。障がい者スポーツセンターでのダンスイベントのリアル開催+オンライン配信は啓蒙活動にも有効でした。実際に新聞雑誌取材と掲載、学会発表によって大阪府から開催継続の誘致を受けたり、協賛企業からの声かけで関東への足掛かりも得られました。

障害者ダンスをエンターテインメント化

新型コロナ感染防止のため既存ホールが使えず、感染防止に適した吹き抜け2階構造のグラッフィホールにて昨年度に引き続き開催。独自に入場制限(フロア100名、観覧エリア75名程度)を施したため、ほぼ満員の状態でした。他の施設では開催が不可能であった点を考慮すると

継続開催は成功でした。障がい者ダンスをエンターテインメント化する事により、ユニバーサル社会実現のために必要な障がい者と健常者を繋ぐ間口を広範囲かつ官民・医療・福祉・スポーツへ多層化した発信が出来ました。



事業実施における工夫

医療福祉の専門家および公務員が事務局に居たため、開催場所のアクセシビリティや多目的トイレ、緊急医療体制の担保などの判断が容易に出来ました。事業実施期間中

のまん延防止措置/緊急事態宣言に対応できる柔軟な開催内容(Web配信+アーカイブ映像)を用意していたことも開催進行に強い自信となりました。

新型コロナウイルス感染症の影響

ダンスイベントは相対する時間が短く接触が無いので、対策をして開催できましたが、身体接触が避けられない児童対象のイベントや、長時間同室にいる障がい女性のワークショップは、大人数の収容は困難になりました。児童対象のイベントは人数を5家族に限定、女性のワークショップは現地10人以内で、他はオンライン配信としました。

ダンスバトル(コンテスト)は、ホール3ヶ所の外気口に換気用工場扇を設置、使い捨て床マットの敷設(入場時の靴裏消毒、車椅子タイヤの消毒)、会場の入退場をそれぞれ1つに限定し、手指の消毒も設置するとともに、入口にて体温チェック、氏名と電話番号の記名、マスク・ディスポグローブ(配布)の着用を実施し、イベント中の扉を全開して定期換気、巡回での消毒も行いました。

事業名 舞台芸術鑑賞サービス ショーケース&フォーラム

団体名 一般社団法人 日本障害者舞台芸術協働機構

所在地：大阪府大阪市

URL：https://jdp-arts.org/

事業概要 鑑賞を支援するサービスの知識共有と技術移転を目的に、名古屋と福岡の2カ所でショーケース&フォーラムを実施。第1部のショーケースでは、地域で活躍する劇団の短編作品を上演。日本で初となる遠隔音声ガイドや字幕システムを体験してもらう。第2部では、地域の舞台芸術に関わる方たちを招いたトークディスカッションを開催。それぞれが考える「理想の劇場」というテーマから、劇場の役割について考え、終演後には、字幕システムについての技術講座を開催。広く障害のある人も鑑賞できる環境づくりの必要性と具体的な実践方法について発信する。

実施内容

短編演劇の上演ならびにトークディスカッションに、多様な鑑賞サービスを実施して参加者に体験いただきました。短編演劇上演では、日本の演劇で初となる「遠隔音声ガイド」を実施・披露しました。

●名古屋会場 上演
開催日：2021年10月14日
対象：舞台芸術関係者、ほか
参加費：1,000円
場所：名古屋市昭和 문화小劇場

【第1部】
短編作品「9分ループ」上演
作・演出：鹿目由紀
出演：劇団あおきりみかん(松井真人、カズ祥、川本麻里那、平林ももこ、正手道隆)
音声ガイド：藤井佳代子(劇団青年座)

【第2部】トークディスカッション「理想の劇場をみんなで考える」
パネリスト：鹿目由紀(劇団あおきりみかん 主宰)、山本麦子(愛知県芸術劇場 企画制作部 プロデューサー)、堤佳奈(三重県文化会館 事業課 演劇事業係)、
ファシリテーター：吉野さつき(愛知大学文学部現代文化コースメディア芸術専攻 教授)

【フォローアップ研修】システムの導入方法を説明



名古屋会場/
トークディスカッション

●福岡会場 上演
開催日：2021年10月20日
場所：アクロス福岡 円形ホール

【第1部】
短編作品「スワイプ」上演
構成 田坂哲郎/西覚 演出 木村佳南子

出演：田坂哲郎、ぼち、ケニー、長野哲也、村岡勇輔
音声ガイド：水野ゆふ(Pカンパニー)

【第2部】
トークディスカッション「理想の劇場をみんなで考える」
パネリスト 田坂哲郎(非・売れ線系ビーナス 主宰)、糸山裕子(特定非営利活動法人アートマネージメントセンター福岡 代表理事)、三浦康晃(特定非営利活動法人まる 事業マネージャー)
ファシリテーター 大澤寅雄(株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 主任研究員)

【フォローアップ研修】システムの導入方法を説明

●動画配信
開催日：2021年11月7日~13日
*名古屋会場分を配信



福岡会場/
短編作品「スワイプ」

鑑賞機会	創造機会	発表機会	作品評価	権利保護	販売支援
交流促進	相談体制	人材育成	情報収集	連携協力	

事業の効果

新しいサービス「遠隔音声ガイド」

視覚障害のある人への鑑賞時の情報サービスの一つに音声ガイドがあります。これまで、音声ガイドを実施するための課題は、「専門人材・実施環境・コスト」の3つであるとされてきました。特に、専門人材の確保は大きな課題で、実施したくても地域に音声ガイドの専門人材がいない場合は、他の地域から移動してきてもらう必要があります。しかし、そのためには別途、旅費交通費が発生してしまい、

コスト的な課題が増幅することになります。また、コロナ禍においては都道府県を跨いで移動自粛など、新たな問題も発生しました。今回の遠隔音声ガイドナレーターは、東京の自宅から参加。遠く離れた会場(名古屋と福岡)に、ライブでナレーションを届けました。今後、遠隔音声ガイドサービスが広がることで、音声ガイドを導入するハードルが下がることが期待されます。

鑑賞サービスが「おもしろい！」と思ってもらえることで広がる可能性

作品を提供してくれた地域の劇団が、鑑賞サービスの導入に積極的でした。今回は劇団あおきりみかん(名古屋)と非・売れ線系ビーナス(福岡)に協力いただき、書き下ろしの作品を提供いただきましたが、いずれの脚本・演出家も字幕や音声ガイドといった鑑賞サービスを「おもしろい！」と受け止めてくれました。非・売れ線系ビーナスに

おいては、鑑賞サービスを作品の一部に取り入れることで、鑑賞サービスなしでは鑑賞できない作品を創作しました。実演団体にこういった意識が広がることで、劇場の自主事業だけでなく、貸し館として利用する公演でも障害のある人が参加できる環境が広がっていくことが期待できます。



事業実施における工夫

鑑賞サービスを鑑賞者の立場で体験いただくだけでなく、その後の実践につなげてもらうことを目的にフォローアップ研修を実施。導入方法や実施方法を詳しく解説しました。サービス導入のハードルを下げることを目的に、メーカーと連携して期間限定キャンペーン価格などを設定して告知しました。舞台芸術関係者に情報が届くように、公文

化施設協会や舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)、出演者などと連携して広報に努めました。また、地域の福祉団体と連携して障害のある当事者にも情報を届けました。その際、「届け方」と「届く内容」にも工夫をしました。さらに、視覚障害のある人を最寄り駅まで送迎するなど、移動・接続サービスにも配慮しました。

新型コロナウイルス感染症の影響

本番前に「緊急事態宣言」ならびに「まん延防止等重点措置」は解除されましたが、当初の計画通り客席数の半分を定員としました。大阪から他の都道府県に移動するスタッフは、移動前日に抗原検査を実施、その他、一定のコロナ対策(マスク着用、入口での検温、手指消毒の呼びかけ、フィジカルディスタンスの呼びかけ、他)を実施しました。

障害者の舞台芸術支援と支援人材の育成に関するプラットフォーム Open Arts Network Project (オープンアーツネットワークプロジェクト)

社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会

所在地：大阪府和泉市

URL：https://www.big-i.jp/

障害者の芸術文化活動は、全国においても支援活動や取り組みが活性化され、機会や場も増えてきた。こうした活動を今後も継続・発展させていくことによって、障害のある人々の芸術文化活動、参加を促進し、誰もが公平に享受することができる環境を醸成し、芸術文化を通じて共生社会の実現へとつなげていく。そのために、障害者をはじめとする多様な人々が芸術文化を享受できる環境を整備できる人材の育成のため、芸術文化(劇場・音楽堂等)、福祉(福祉施設、支援団体等)、双方の分野に関わる人々を対象に研修会やシンポジウム、情報発信を行う。

実施内容

●第4回Open Arts Network Project シンポジウム

「共に生きる社会のための芸術文化」

開催日：2022年1月24日

場所：としま区民センター(東京都)

参加人数：聴講者21名

参加費：無料

内容：多様な人が芸術活動に参加できる環境を実現するため、障害と芸術に関する政策提言に向けて現状の課題解決に向けた取組、工夫、地域とネットワークづくりなどについて報告と意見交換を行いました。開催4年目となる今年度は、誰もが平等に文化創造を行える権利と、障害のある人々が、文化芸術の享受及び文化芸術活動へアクセスできる権利の両面から障害者施策を編み直しました。障害のあるアーティストや、法学、舞台芸術の関係者を交えて、多様性が“保障”される社会とは何かを、様々な立場や視点から、これからの政策提言のあり方を考えるシンポジウムを開催しました。

●劇場・音楽堂等における社会包摂

芸術×福祉 地域ネットワークの構築(九州地区)

<芸術×福祉 九州ネットワーク会議>

開催日：2021年10月27日、11月30日、
2022年1月13日、2月15日

<実践現場>

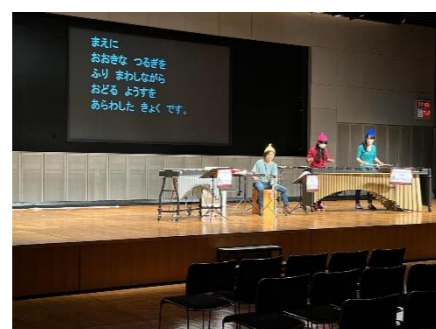
開催日：2022年3月12日

場所：アクロス福岡

内容：当施設ビッグ・アイが、劇場・音楽堂等における鑑賞支援人材の育成の場、実践研修の場として、実施している「知的・発達障害児(者)にむけた劇場体験プログラム」を実践的な学びの場としました。知的・発達障害のある人をはじめ、多様な障害の特性やその支援について、九州地域の劇場・音楽堂等と支援センター(厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業)と意見交換や情報、活動事例を共有するとともに、公演現場にスタッフとして参加することで、実践現場における工夫や課題、その解決方法を共に考える機会となりました。



シンポジウムの様子



芸術×福祉 劇場体験プログラム



ネットワーク会議の様子

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

文化芸術から考える 多様性が“保障”される社会とは

障害者等の文化芸術活動を推進するための施策を展開する文化庁、厚生労働省、自治体や障害のあるアーティスト、福祉団体、劇場・音楽堂等、舞台芸術団体、研究者などが参加し、それぞれの立場から障害者の文化芸術活動の現状や課題を意見交換し、鑑賞の場や実践現場での支援や活動につながる情報共有の場となりました。また、障害のある人の文化芸術活動について考え続ける糸口を見出す機会となりました。福祉と芸術の両方の側面がある、障害のある人の文化芸術活動について考え、議論と実践を繰り返す

ていく必要性や意義を発信できたシンポジウムとなりました。本シンポジウムでは、今後、障害者の文化芸術活動における参加者、登壇者からの意見や課題等は、有識者、支援者、実践者等で構成している「Open Arts Networkメンバー」で検証し、とりまとめを行い、令和5年度に予定されている「障害者文化芸術活動推進基本計画」の改定や国の施策への提言として2022年度に提出できるよう引き続き取り組んでいく予定です。

地域の福祉と芸術の現場をつなぎ、地域における障害者の文化芸術活動に関する課題を解決する

障害のある人の文化芸術活動は、地域による格差や地域ごとにその課題も変わってきます。障害者の芸術活動団体や支援団体の数、また活動も増える中、他分野を横断した地域内の情報共有や課題、事業における工夫や実践事例など共有できる場が少ないのが現状です。今年度は地域の中で、障害者の文化芸術活動を実施、もしくは検討している劇場音楽堂等と、厚生労働省障害者芸術文化普及支援事業の支援センターを担う福祉団体をつなぎ、文化芸術活動の推進を図るために必要な協働や連携を創出するこ

とを目指しました。本事業では、意見交換や懇談、講義だけではなく、実際の公演現場にスタッフとして九州全域からメンバーが参加しました。障害のある人を鑑賞者として迎える現場だからこそ「みえる」課題や工夫、また、芸術、福祉双方の分野での専門性や経験を活かしていくことで互いに「学び合える場」となりました。事業を通じて来年度事業での連携や協力、事業活動の相談など、具体的な取り組みも始まっています。

事業実施における工夫

障害のある人の芸術文化活動の支援や推進を行うのは、芸術分野、福祉分野両分野において「難しい」と考えている人が多いと思われます。地域にある、それぞれの専門性を持つ団体や個人がつながり、協働していくことで、解決できることも多く、また多様な活動や広域に普及していくことができると思います。芸術、福祉両分野の方々と共に事業づくりに参加し、実践経験を積むことで芸術、福祉双方の専門性を持つ人材が生まれると思っています。



実践現場として使用したアクロス福岡

新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症の第6波の時期がシンポジウムの開催や芸術×福祉ネットワーク会議の実践の場となりました。シンポジウムでは、予定をしていたグループワークは感染リスクが高いと判断し、事前に参加者から意見、課題などをいただき、登壇者が回答や意見をだすというプログラムに変更しました。芸術×福祉ネットワーク会議では、予定していた講師が急遽、登壇できなくなったことでプログラムを変更したことや、県を超えて移動する人、福祉施設で勤務する人もいることもあり、オンライン、対面のハイブリッド型での実施としました。新型コロナウイルス感染症予防、拡大対策としては、手指消毒、マスク、人と人との距離の確保、健康チェック(登壇者、講師、スタッフ)、検温の実施のほか、登壇者、講師、スタッフはPCR検査、抗原検査を実施しました。

日本・アジアの障害のある人の舞台芸術作品と先進的な鑑賞支援に関する海外発信

社会福祉法人 大阪障害者自立支援協会

所在地：大阪府和泉市

URL：https://www.big-i.jp/

近年、全国の芸術団体、福祉団体等による障害のある人の舞台芸術活動・参加への支援が増える中、表現力や技術そのものの指導やトップレベルを目指せるアーティストへの支援については、未だ充分とは言えないのが現状である。そこで、障害のあるトップレベルの若手アーティストが高みをめざし、自身の芸術性や表現力を磨き、活躍できる機会の創出を図るとともに、障害のある優れたアーティストによる作品を海外へ広く発信することを目的に実施。また、障害の有無に関わらず鑑賞するための取り組みや工夫、ノウハウなどを国内外へ広く発信し、周知していくことを目指す。

実施内容

●障害のあるトップアーティストによるコンテンツ制作 (制作期間：2021年5月～11月／配信：2022年3月)

近年、全国の芸術団体、福祉団体等による障害のある人の舞台芸術活動・参加への支援が増える中、表現力や技術そのものの指導やトップレベルをめざせるアーティストへの支援については未だ少なく充分とは言えないのが現状です。そこで、障害のあるトップレベルの若手アーティストが高みをめざし、自身の芸術性や表現力を高め、活躍できる機会の創出を図ることを目的に、プロのダンスカンパニーDAZZLEの脚本・構成・演出・振付指導のもとダンス映像作品を制作しました。参加アーティストは聴覚障害、肢体障害、自閉症、発達障害など障害のあるダンサー8名で、制作された作品はYouTube・SNSを通じて国内外に配信しました。

参加アーティスト：「アジア太平洋障害者芸術祭」「東京パラリンピック開会式」などに出演したアーティスト(西村大樹、東野寛子、鹿子澤拳、根間麗華、竹田凧沙、光陽師想真、梶本瑞希、森田かずよ)

脚本・振付・演出：長谷川達也(DAZZLE)

手話通訳：橋下一郎、武井誠、久保沢香奈

●多様な人による舞台芸術作品の上映会の実施 in マレーシア

開催日：2022年2月27日

場所：Kuala Lumpur Performing Arts Centre(klpac), Pentas2

内容：マレーシアのクアラルンプールパフォーミングアーツセンターにて、昨年度に制作したDANCE DRAMA「breakthrough Journey」公演映像作品の上映会と関係者によるトークセッションを開催しました。マレーシア、シンガポール、日本のディレクターや作品に出演した障害のあるダンサーが集結して舞台芸術活動について話をしました。各国では、新型コロナウイルス感染症による入国制限等もあり、日本、シンガポールのスピーカーがオンラインで参加し、観客もオンライン視聴できるハイブリッド型の開催としました。スピーカーの手話通訳は、聴覚障害のスピーカーがいる日本とシンガポールで配置し、鑑賞者への手話通訳はマレーシアで配置しました。また、ライブ配信ではリアルタイムで英語字幕を写し、聴覚に障害のある外国人の方々にも視聴いただけるようにしました。



上映会・トークセッションの様子



上映会・トークセッションの中継システム

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

高みをめざす、障害のあるアーティストたちの活動の場を広げるために

障害のある国内トップレベルのアーティストたちのダンス映像作品を通じて表現活動、文化芸術を世界に発信することが出来ました。出演したアーティストたちは自身の芸術性や表現力、技術を磨き、アーティストとしてのスキルを向上する機会となり、また次に続く人たちのモデルとなりました。本事業に出演しているアーティストの多くは2020パラリンピック東京大会の開閉会式に出演しており、その経験や本事業を通じて、国際的な芸術祭やコンク

ールなどへ活動の場を広げたいという意欲にもつながり、パラリンピックのレガシーとしての成果も得られたと思います。また舞台芸術、ダンス活動における専門用語のわかる手話通訳者や段差、トイレの形状、リラックスできるスペースなど個々の障害特性に応じた環境をつくり、アーティストとして自身の力を十分に発揮できる場を創造し、関係する人たちに障害への理解とアーティストとしての可能性を伝えることができたと思います。

文化芸術を通じて共通する社会課題を考え、解決にむけたモデルを国際発信する

自閉症、ダウン症、聴覚障害、多発性硬化症など障害のあるダンサーが日本各地から出演し、多様な作品を国外に発信することが出来ました。また、芸術性・エンターテインメントとしての評価も高かったことから、障害のあるアーティストの活動の場を広げるきっかけにもなりました。障害のある方も表現活動の場における環境が整備され、機会があればアーティストとして活動できる可能性があることを発信出来ました。トークセッションでは日本、アジアでの障害者の文化芸術活動において必要とされる支援やそれぞれが持つ課題、また、「障害」への理解について、マレーシア、シンガポール、日本の演出家、振付家、有識者、

アーティストなど、それぞれの立場から議論する場となり、国内外に発信できたことは、障害者の文化芸術活動支援につながるきっかけになりました。マレーシアの会場にはマレーシア国内の支援団体や国際交流基金、在マレーシア日本大使館など今後の活動の協力を期待できる団体ともつながれたことやマレーシアのテレビ局RTMTV2の取材もあり、事業終了後も本事業の発信が拡充でき、波及効果も高まりました。また、障害の有無や言語の違いに問わず、フリートークで多言語(日英)によるリアルタイム字幕をはじめ経験した人が多く、先進的な日本の鑑賞支援の技術を周知できる機会となりました。



事業実施における工夫

東京、シンガポール、マレーシア、フィリピン(リアルタイム文字入力者) 4カ国(地域)をつなぎ、関係者が集まらずに、リアル会場での開催とライブ配信が実施できたことは、日本の先進的な技術と、これまでの障害のある人との事業経験があったからだと思います。世界的なコロナ禍で、国

を超えて一つの場所に集まる事業が難しい中、インターネットを通じた開催もスタンダードになっていくのではないかと思います。ライブ配信では、制作する側が福祉的な視点をコーディネートしながら、配信業者と協働することも一つの方法だと思っています。

新型コロナウイルス感染症の影響

参加者及び観客の、手指消毒・検温・マスクの着用、会場内の消毒・換気は徹底しました。そのほか、公演の際は、出演者、スタッフ全員のPCR検査や抗原検査を実施しました。コロナの感染が拡大している時期には、ワークショップは、オンラインでの実施や、オンラインと実来場のダブルで行うなど、出来る限り中止をしない方向で事業を行いました。感染が拡大していた2月の公演は、実施/中止の判断をいつ、何の判断で行うのかとも迷いましたが、メンバー内での会議を重ね、延期等せず予定通り実施することを決めました。

事業名 日本センチュリー交響楽団 特別支援学校コンサート

団体名 公益財団法人 日本センチュリー交響楽団

所在地：大阪府豊中市

URL：https://www.century-orchestra.jp/

事業概要 普段、オーケストラの生演奏を聴く機会が少ない、大阪府立の支援学校を対象としたコンサートを実施する。当団の自主事業として10年以上継続して実施しており、昨年度までに延べ11,120名以上の児童生徒・教員が参加している。学校形態や児童生徒の特徴に制限はなく、様々な障がいのある児童生徒の参加が可能。演目には耳なじみのあるクラシック作品からポップス曲の他、聴衆参加型コーナーなど幅広い内容を組み込み、オーケストラを身近に体感してもらえるようにする。コンサートホールでの公演及び病院分校などの学校から移動することが難しい児童生徒に向けて、学校訪問型の室内楽コンサートを行う。

実施内容

●学校訪問型アウトリーチ室内楽コンサート

開催日：①2021年5月18日
②2021年5月19日
③2021年6月2日
④2021年6月3日
⑤2022年2月2日

場所：①大阪府立むらの高等支援学校
②大阪府立東住吉支援学校
③大阪府立高槻支援学校
④大阪府立守口支援学校
⑤大阪府立枚方支援学校

対象：大阪府下の支援学校の児童生徒・教員

参加人数：①高校2年生(32名)
②高校1～3年生(19名)
③中学3年生(40名)、高校3年生(40名)
④中学1～3年生(65名)
⑤小学6年生(21名)、中学3年生(36名)、
高校3年生(40名)

参加費：無料(事前申し込み制、5校まで)

内容：昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により当選5校のうち1校のみの実施となりましたが、今年度は予定していたすべての学校に訪問することが出来ました。クラシック作品からポップス曲まで多彩なジャンルの音楽を演奏し、演奏に合わせたリズム打ちなどの参加型コーナーも組み込みました。また楽器紹介では、現代の楽器だけではなく、普段はなかなか見ることのない古楽器で編成されたアンサンブルをお届けできた公演もあり、学校によって様々な工夫を凝らした内容で実施することが出来ました。

●オーケストラコンサート

開催日：2022年1月31日
場所：国際障害者交流センター(ビッグ・アイ)
対象：大阪府下の支援学校の児童生徒・教員
参加人数：541名
参加費：無料(事前申し込み制)

内容：昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染予防のため収容人数を半数程度に調整し、参加校・参加学年を選定していただきました。取り纏めは代表校にお願いしています。今回は、耳なじみのあるクラシック作品を中心に、オーケストラサウンドをお楽しみいただきました。オーケストラのためのオリジナル作品で、テレビCMやBGM等で一度は聞いたことがある有名な作品ばかり揃えましたが、敏感な感性・感覚を持った子供たちにはステレオで聴く場合と生演奏の違いを存分に感じ取っていただけたのではと考えています。また楽器紹介や指揮者体験コーナーなど鑑賞以外の様々な視点からオーケストラに触れていただけるような工夫をしました。



オーケストラコンサートの様子

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

移動が難しい生徒にも身近に感じてもらうように

普段コンサートホールへ出かけることが難しい子どもたちにも音楽を届けたいという思いで、毎年継続的に行っている事業です。楽団が学校へ出向き、各校の体育館や音楽室等で行なうため、子どもたちにとっては慣れ親しんだ環境で安心して演奏会を楽しんでいただけます。また室内楽は近い距離で楽器を観察でき、音の振動や迫力をより間近で体感することができます。そして、座席で静か

に演奏を聴くだけでなく、参加型プログラム(リズム打ち、振付け共演等)もバランスよく取り入れることにより、双方向性のある音楽体験をしていただけるように工夫しました。この事業を継続的に実施することで、特別支援学校とプロの実演団体との関係性をより強く身近なものにしていくのではないかと考えています。

音楽の力、コンサートの力を実感

毎年1,000名以上に鑑賞機会を提供することを目標としておりますが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、例年の半数程度になりました。日頃接する機会が少ないオーケストラを身近に感じていただけるよう、障がいの有無に関係なく、楽しく参加できるコンサートを目指しており、管弦楽曲の演奏の他に、楽器紹介や指揮者体験コーナーも組み込みました。コンサートを聴くのが初めての児童生徒にとっても、無理のない音楽体験を提供することで、障がいのある人たちの社会参加の促進が期待できると考えています。また、参加校には学校の恒例行事と

して当事業を捉えていただいています。音楽の力、またそれを実演するオーケストラの響きが、児童生徒の感性、音楽を楽しむ力や習慣の育成にも寄与できると考えています。実際にコンサート中の生徒たちは体全体で音楽を感じ取っており、充実した表情が多く見受けられ、先生方からも大変好評をいただきました。以前より当事業は社会貢献事業として行ってきており、児童生徒・教員からは参加料を徴収せず、実施しています。今後も可能な限りコンサートを継続していきたいと考えております。



室内楽コンサートの様子



参加生徒の感想文(一部)

事業実施における工夫

聴覚や視覚に障がいのある児童生徒には、出来るだけオーケストラの様子や音の振動が伝わりやすい座席で鑑賞していただけるように工夫しました。また、障がい者が利用しやすい設備が整ったビッグ・アイを使用し、前席をフラットにして車椅子やベッドのまま鑑賞していただきました。登壇する3名の代表生徒には、楽団の公演担当が事前に段取りや導線をお伝えすると共に、生徒の個性や状況を直接確認する時間を確保しました。それによって、コンサートは予測できないことが起こる怖いものだという印象をなくし、各生徒が自分のペースで安心してステージに上がっていただけるように心がけました。本番前には、

インタビュー可否やステージ上でのサポートについて、関係者間で共有し、実施しました。また、視覚支援学校や聴覚支援学校には、事前に司会進行の台本を共有し、点字への書き換え作業や手話通訳のための資料として活用していただきました。目で見ることが難しい生徒にも楽器の形や大きさ、演奏者の様子などがイメージしやすい言葉を届けるよう努めました。さらに事前に担当の先生方から、演奏形態や言葉がけ、演奏曲等、様々なリクエストに可能な限りお応えできるよう、綿密なヒアリングを行いました。

新型コロナウイルス感染症の影響

1月中旬から再びコロナが広まりつつありますが、学校側もコロナ禍における行事開催に向けての体制が整ってきており、昨年度に比べるとかなり前向きな参加意思を示していただいていると感じています。参加人数の制限や感染症対策など、学校ごとの条件を一つ一つ丁寧に確認し、双方が安心して実施できる環境を整えることに努めました。

事業名 **こんにちは、共生社会** (ぐちゃぐちゃのゴチャゴチャ)

団体名 **特定非営利活動法人 ダンスボックス**

所在地：兵庫県神戸市

URL : <https://dancebox.studio.site/>

事業概要 関わる人すべてが新たな視点や価値観を見出し、社会的弱者に対する理解を深めると共に、社会における真の共生とは何かを考える機会となることを目的に、障がいのある人や様々なルーツを持つ人、多世代の地域住民と共に事業を展開。劇場ArtTheater dB KOBEを拠点に劇場を小さな社会と捉え、また、まちを大きな劇場と見立てて、鑑賞・体験事業を実施するほか、障がいのあるプロフェッショナルなダンスアーティストやパフォーマーと協働した公演やトークプログラムを開催。

実施内容

●トライアル・ダンス公演

「未知なる 見たことのない 美しさ」【Mi-Mi-Bi】

開催日：2022年2月5日、6日

場所：ArtTheater dB KOBE

内容：身体に障がいのある個性豊かなパフォーマー8名が、自身の身体・表現の可能性に向き合い、演出家を招聘せず、自ら創作した「ソロ作品」と、協働して創作した「グループ作品」を上演しました。上演中の字幕、アフタートーク時の手話通訳をはじめ、クリエイション時の手話通訳や透明マスクなど、情報保障にも努めました。障害もバックグラウンドも異なるパフォーマーが、互いにリスペクトしながら妥協せず対話を続け、協働メンバー、手話通訳者がパフォーマー間のコミュニケーションとクリエイションを潤滑に進める役割も担いました。出会いから何が生まれるのか、その未知なるところへの挑戦そのものが、とても豊かで貴重な時間となりました。

●やさしいコンテンポラリーダンスクラス

開催日：2021年4月～2022年3月
(月1回 計12回開催)

場所：ArtTheater dB KOBE、
神戸アートビレッジセンター

講師：西岡樹里

内容：昨年よりスタートしたダンスクラス。ダンス体験の第一歩となるよう、間口を広げて開講。上手/下手、出来る/出来ないが基準ではなく、その人がその場に居るから生まれるダンスを互いに楽しみ合える、安心できる場所として定着しました。参加者は、3歳から70歳前後の方まで、職種も様々。一人で参加していただくことも可能で、毎年広がりが出ています。

●その他の主な事業

・鑑賞事業

山下残「そこに書いてある」公演

開催日：2021年10月16日、17日

内容：観客が一人一人、膝の上で本をめくりながら鑑賞するダンス公演。ダンサーのほか、地元のおやじアカペラグループ、聴者聾者ミックスの多世代手話歌チームが出演し、全編手話通訳付き、視覚障がい者のための鑑賞ガイド(トライアル)も実施しました。

・五感でめぐる下町芸術祭

「見えない人と楽しむ1日」

開催日：2021年10月9日

「サイレントでも楽しもう！ダンス公演と芸術祭」

開催日：2021年10月17日

・聴覚支援学校でのダンスコミュニケーションワークショップ

開催日：2021年12月14日

・Mentor Project 2021「トーク・セッション」by Claire Cunningham 身体障がいのある振付家育成プログラム(クリエイティブ・アート実行委員会との共催)

開催日：2021年2月9日



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

障がいのあるパフォーマー・振付家がプロフェッショナルに活躍する時代へ

国内の障がい者のパフォーミングアーツシーンでは、健常者が障がい者を起用して上演される公演が多い中、パフォーマー自ら、自身の身体だからこそ表現できる作品を創作し上演したことは、個々にとって貴重な創作機会であり、新たな活動への一歩を踏み出すこととなりました。さらに、Mentor Project 2021として、英国を拠点に活躍するクリア・カニングハムのトークセッションを経て、世界で活動を志すアーティストが生まれることも期待しています。障がいのあるプロフェッショナルなアーティスト

が活躍することにより、社会の障がい者への理解が深まることと、特に若い世代の障がい者当事者が表現活動に興味を持つ機会にもなります。今年度のプロジェクト参加者は、社会に対する意識も高く、今後に期待できます。この一年で、情報保障への取り組みは、字幕・手話通訳・視覚障がい者のための鑑賞ガイドなど、大きく進みました。様々な事業を通じ、舞台上も客席側も、障がいのある人もない人も、ミックスな環境を生み出すことができました。

劇場から、まちが変わる。日常が変わる。共生社会、実践中！！

障がいの種別を越えたコミュニケーションや協働のあり方や、相手をどう理解するのか・相手にどのように伝えるのかは、そのまま社会に置き換えることが出来ます。知らないことに出会う戸惑いと、一歩踏み込んだ時の喜びは自分を豊かにし、またそのことを誰かと共有するという、自分が

変われば、社会が変わることへの、実践に繋がっています。日常的に障がいのある人が劇場に出入りし、劇場でのプログラムと、まちへ出ていくプログラムの双方向で事業を展開したことで、まち全体が共生のグラウンドに、今なりつつあります。



やさしいコンテンポラリーダンスクラス



山下残「そこに書いてある」公演



トライアル・ダンス公演

事業実施における工夫

当団体の特徴は、劇場という、非日常空間が拠点であること、そして、日常的に障がいの有無を問わず、国内外のコンテンポラリーダンスのアーティストが出入りする場所であることです。障がいある/ないに関わらず交流する場と雰囲気づくりは大事にしています。そして、劇場のある新長田は、韓国やベトナムほか様々なルーツの人が暮らし、高齢者も多く、個性あふれる福祉事業所もあるまちです。コンパクトで人情の厚いまち、顔の見える関係がまちにあることが強みです。事業を組み立

てるときは、関わる全ての人、どのように主体的に関わることが出来るのかを考えています。「誰かのために何かをする」のではなく、一緒にやる。今年度は公演を行う際も、協働メンバーとして手話通訳やアーティストの方、テクニカルスタッフが、どうすれば皆対等に進められるかを試み、とにかく対話することを心がけました。また、介助専門のスタッフは置かず、関わる人や、居合わせた人皆が助け合いながら進めました。

新型コロナウイルス感染症の影響

参加者及び観客の、手指消毒・検温・マスクの着用、会場内の消毒・換気を徹底しました。そのほか、公演の際は、出演者、スタッフ全員のPCR検査や抗原検査を実施しました。コロナの感染が拡大している時期には、ワークショップは、オンラインでの実施や、オンラインと実来場のダブルで行うなど、出来る限り中止をしない方向で事業を行いました。感染が拡大していた2月の公演は、実施/中止の判断をいつ、何の判断で行うのかとても迷いましたが、メンバー内での会議を重ね、延期等せず予定通り実施することを決めました。

事業名 NEW TRADITIONAL : 障害のある人の表現と伝統工芸の相互発展

団体名 一般財団法人 たんぽぽの家

所在地：奈良県奈良市

URL : <https://tanpoponoye.org/>

事業概要 福祉と伝統工芸、地域でのものづくりが協働することの可能性に着目し、実例(製品)づくりや展覧会等を実施。また、製品の販売はオンラインだけでなく、複数の実店舗での販売に取り組む。さらに過去2年の同事業の取り組みを総括するフォーラムを実施。これらの取り組みを通して、これまで地域の中でもつながることのなかった福祉・デザイン・伝統工芸の担い手たちが出会い、連携する機会を創出し、誰もが自分の仕事や地域に誇りをもつことができる社会をつくること、国内外へものづくりを通して新しい生活文化を提案することを目指す。

実施内容

●実例づくり

和紙を用いた作品、シルクペーパー、土染めによる紙/布、の3つの制作に取り組みました。

①和紙を用いた作品

協力団体: アートスペースからふる、中原商店(和紙製造)、torinoko
ディレクター: 川崎富美(デザイナー)

②シルクペーパー

協力団体: Good Job!センター香芝
デザインディレクション: 長岡綾子(デザイナー)

③土染め/布

協力団体: 平城京跡歴史公園/奈良市埋蔵文化財調査センター
ディレクション: 高橋孝治(プロダクトデザイナー)

●展覧会「NEW TRADITIONAL展in鳥取 和紙という銀河から、届く光」

開催日: 2022年1月21日~30日

場所: Am'sギャラリー、ギャラリーからふる

参加人数: 450名(2会場合計)

内容: 鳥取市の福祉施設「アートスペースからふる」と、地元で活動するデザイナー川崎富美氏をはじめ、伝統を受け継ぎながら和紙の新たな魅力を探求している因州和紙の職人らとの共働によって、和紙の可能性を広げる実験に取り組み、そのプロセスと成果を展示しました。会期中には和紙の仏像づくりのワークショップや、オンライントークを実施しました。

●フォーラム「ニュートラ談義online」

開催日: 2022年3月6日、3月11日

内容: 障害のある人とともに、素材や工法にこだわり、ものづくりに取り組む事例を紹介し、ものづくりの原点に触れ、価値を共有すること。届け方や売り方を考えること。そして伝統工芸と福祉をつなぐこと。それぞれの立場から課題と可能性を考えました。

●展示販売

過去2年間、本事業の取り組みで生まれた製品をインテリアショップなどで販売しました。生活空間のなかでの使い方やより魅力的な見せ方・売り方の検討を重ね、ショップオーナーの意見も取り入れながら柄や製法を工夫しました。



インテリアショップでの展示販売



奈良の土を使った土染め

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

ものづくりの原点をたどり、地域の特性をいかにしながら新しい伝統工芸のあり方を模索した

本事業では、これまでの伝統工芸のものづくりをそのまま継承するだけでなく、それぞれのものの素材や作り方をたどり、今の生活にあったデザインや作り方をあらためて考えることで、新しい伝統をつくることを目指しています。その視点から、素材と工法の組み合わせを原点から考え直す機会をつくりました。障害のある人が関わりやすい素材や道具、障害のある人だからこそ生まれる商品の魅力を模索し、提案することが出来ました。今年度は鳥取の因州和紙のつくり手と地域の障害者福祉施設との協働や、

昨年度の常滑の土のものづくりから発想を得て、奈良の平城京の発掘現場で採れた土を使い、染色や紙漉きなどのものづくりに展開。また福祉施設での養蚕をとおして、絹糸という素材の原点にある、生き物の命を育み、命をいただいてものづくりをすることについて考える機会をもち、取り組みを発信する機会をつくりました。これらの活動から障害のある人もない人も共に地域の歴史や文化を学びながら、新しい伝統をつくっていく足掛かりとなりました。

ものを販売したり、活動を伝えることで、ものづくりの循環をつくった

今年はこれまでNEW TRADITIONALで生まれた商品を販売する企画を多くつくることに力を入れました。新型コロナウイルス禍という状況ではありましたが、百貨店やギャラリー、ショップなどでの卸売りや雑貨小売業者でのディスプレイも実現。活動を伝えるトークなどと組み合わせ、商品のうまれた背景や物語も伝えられるよう留意しながら販売しました。売り手、伝え手の意見を取り入れながら

商品開発や価格設定をしたり、その成果を共有するような機会(展示や勉強会など)をつくり、関心のある人たちに伝えることが出来ました。また、伝統工芸を福祉の仕事に生かす事例に取り組む団体の事例をもとに学び合うオンラインセミナーを実施し、本プロジェクト以外のさまざまな活動と交流する機会をつくりました。



土染めのワークショップ



「NEW TRADITIONAL展 in 鳥取」の様子

事業実施における工夫

全国各地での福祉団体と、地域のものづくりをコーディネートするディレクターのネットワークがあることで、さまざまな地域で展開することができています。また、本事業を複数年継続したことにより、ネットワーク自体もさらに広がっています。本事業で大事なものは、福祉事業と地場産業、伝統産業など、異分野をつなげるコーディネート的

な役割。各業界のもつ特性やスケジュール感覚などを理解しながら共通の目標を見出すことで、持続可能なものづくりやプロジェクトを進めていくことが出来ました。また、異分野による共働だからこそ、活動のプロセスや、事業に関わる人の感想など、情報を共有していくよう心がけました。

新型コロナウイルス感染症の影響

展覧会やトークイベントはすべてオンラインでの配信に切り替えました。オンライン配信にあたっては、情報保障としてUDトークを導入しました。

事業名 障害者アートの権利保護と作品販売等に関するハンドブックの制作

団体名 一般財団法人 たんぽぽの家

所在地：奈良県奈良市

URL : <https://tanpoponoye.org/>

事業概要 創作活動をしている障害のある人やその支援者が、知的財産権について学び、権利保護の意識を持ちつつ、ライセンスビジネスや作品の販売等を自ら展開していくことを支援する。権利保護に関するセミナーの開催と並行し、国内外のアートマーケット動向調査や、先進的な取組を行っている団体や個人を対象にヒアリング調査を行い、作品の販売やライセンスビジネスを行う際に課題となっていること、仕組みや契約方法、実績事例などをまとめてハンドブックを制作。また、ハンドブックを教材として活用した学習会を実施することで、権利保護や作品販売等のノウハウの普及に努める。

実施内容

●権利保護セミナーの開催

①基礎編(6回)

障害者芸術文化活動普及支援事業(厚生労働省)の実施経験のある事業者等と連携し、著作権と所有権の違い、その他、作品の展示や販売で知っておくべき知的財産権にまつわる基礎知識に関するオンラインセミナーを隔月で開催しました。

開催日：2021年7月28日、10月8日、12月10日、2022年2月9日、3月11日、14日

②応用編(4回)

過年度の事業で開発した2つのアナログゲームを用いて、知財活用の体感を伴うワークショップ形式のセミナーを以下の4地方を重点対象にして開催しました。宮城(北海道・東北エリア)、愛知(東海・北陸エリア)、鳥取(中国・四国エリア)、福岡(九州・沖縄エリア) 各エリアで受け入れ可能団体1カ所と協議し実施しました。

開催日：2021年7月23日、10月9日、11月24日、2022年2月10日

●ハンドブックの制作と普及

障害者アートの先進事例や作品販売のノウハウ、権利保護の観点から気を付けるべきこと等を網羅した実用的なハンドブック「身近な事例から学ぶ、知的財産50のQ&A」を制作しました。

調査・取材先：

国内外のアートマーケットの動向調査(4件)
作品販売等に関する動向調査(4件)
デジタルアート制作に関する動向調査(3件)
国内の障害者アート関連組織の先進事例の調査(21件)

●学習会の実施

ハンドブックを活用した学習会をオンラインで実施しました(計3回)。

①基礎編：身近な事例から学ぶ、知的財産Q&A

開催日：2022年3月14日

②実践編：障害のある人のアート活動にまつわる契約と対価

開催日：2022年3月15日

③知財学習総括編：まもってひろげる～知財学習のこれから

開催日：2022年3月17日



制作した
ハンドブック



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

オンラインセミナーで伝えた「まもってひろめて」の精神

新型コロナウイルスの影響もあり、今年度はオンラインによるセミナーの機会を積極的に設けました。弊法人でも広報を行いました。全国各地にある共催団体の方々がセミナーを必要とするところにお声がけし、普段なら出会うことのない人たちが各回集まりました。終了後行ったアンケートへの回答率が高く、反響があったことがうかがえました。権利について解説することが表現の萎縮につながることは避けたいと、弊法人では常日頃より考えてきまし

たが、「まもってひろめて」の精神が少しずつ伝わっている手ごたえを得ました。「以前、同様の権利擁護のセミナーに参加したが今回参加し、自身の誤認があったことに気づいた。やはり、引き続き学んでいくことが大切だと改めて実感した」「普段から疑問に思っていたこと、思っていなかったこと両方のことで、そうなんだ！と驚きがあった。」などの声を頂きました。

「身近な事例から考える、知的財産50のQ&A」の制作と普及

ハンドブックの制作過程において先進事例を収集すべく、30以上もの団体、個人にアンケートや電話、Zoomや対面等を通じてヒアリングを行いました。それ自体が互いの知的財産に対してリスペクトする貴重な経験となりました。

福祉施設関係者はもちろんのこと幅広い読者層を獲得し、広く普及するために50のQ&A全篇にひとコマ漫画をつけて親しみを図りました。



権利保護セミナー基礎編、オンラインセミナーのひとコマ



権利保護セミナー応用編、ゲームワークショップのひとコマ

事業実施における工夫

当法人は、障害のある人の能力と社会的イメージを向上させるための様々なアート・プロジェクトを実践し、国内外の障害のある人のアート活動に関わる団体と個人のあいだに広範囲な情報ネットワークを形成してきました。

その強みを生かして本事業においても様々な団体、個人から事例収集を行い、得た知見をハンドブックに掲載することが出来ました。

新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルス感染症の影響が比較的少なかった夏から秋にかけて、権利保護セミナー応用編にあたる対面型のゲームワークショップを行いました。冬以降に鳥取のセミナーを企画しましたが、対面型の企画は新型コロナウイルスが再び猛威を振るい始めたので実施できませんでした。座学だけよりも、ゲームを通じた体験があったほうが、知財活用の問題をより自分ごとに行えるように思われるだけに、残念でした。また成果報告を兼ねた学習会についても、対面とオンラインのハイブリッドで企画していましたが、オンラインのみの実施となりました。

障がいの有無に関わらず文化芸術を楽しむ参加しやすい環境づくりを目指してスタートした「インクルーシブシアター・プロジェクト」。今年度は県内に活動を広げ、島根県西部において同財団が指定管理者を務めるいわみ芸術劇場も拠点とし、地域の当事者や支援者のネットワーク形成と学びの場を創り、障がい者の芸術への参加機会創出やその支援につなげていく。また、目の不自由な人とのダンス事業、障がいがある人の芸術鑑賞機会の創出、またその芸術鑑賞を支える人材育成、特別支援学校等におけるアウトリーチなどを継続して行う。

実施内容

●Meetup!石見～「まちと福祉と芸術文化」についてのオープンミーティング#02～

開催日：2021年11月27日

場所：川登芸術村

対象：福祉、教育、芸術、まちづくり、伝統芸能分野の方、個人で障がい者の芸術活動に関心のある方

参加人数：35名

参加費：1,000円

内容：異業種の参加者同士が互いに越境し、つながることで地域での障がい者芸術活動のこれからについて共有・協力を深める場として実施。

<午前の部>

参加者と一緒に地域や個々の取り組みなどの情報共有

<午後の部>

音楽と美術のワークショップ「音絵」

●「にぎやかな日々」江津会場／益田会場

開催日：2021年5月23日、

2022年2月13日

場所：江津市総合市民センター

益田市総合福祉センター

対象：障がい児・者、及び関係者、地域住民

参加人数：(江津)150名／(益田)

参加費：無料

内容：障がいの有無に関わらず芸術体験、鑑賞できる音楽会として開催。

<第一部>

みんなで音を楽しんでみよう！参加自由の音楽会

<第二部>

にぎやかな音楽会

(地元演奏家・当事者団体による演奏会)

●映像×ダンス公演「或る椅子の、つぶやき」上演、舞台映像配信

開催日：2021年7月3日

会場：島根県民会館大ホール

演出・振付：田畑真希

参加人数：145名

内容：2021年3月に公開したダンス映像短編集「或る椅子の、つぶやき」の映像作品と生の舞台のコラボレーションしたダンス公演を行いました。田畑真希氏をはじめとする3名のプロダンサーと、視覚障がい者2名を含む一般参加者5名、そしてミュージシャン2名が出演し、約一週間で作品を創り上げました。介助者割引、音声ガイド等鑑賞サポートを実施。取り組みを多くの方に知ってもらうため、舞台映像を2021年12月からYouTubeで配信しています。(無料・音声ガイド版あり)



コンサートの様子（にぎやかな日々）

映像×ダンス公演
「或る椅子の、つぶやき」舞台映像



音声ガイドなし



音声ガイド有り

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

ジャンルを超えた繋がり場と実践の場への連動

島根県西部では人口減少、少子高齢化などの課題を抱えており、障がい者の芸術活動においても、地域の人材がそれぞれのジャンルを越境し、ネットワークを形成しながら継続性ある取組を目指すことが重要と考えています。そのため、まずは活動に関心のある異ジャンル同士が繋がることを目的としたオープンミーティングの開催と、そこで生まれた連携体制とノウハウを共有し、実際に「にぎやかな日々」という当事者参加・来場型の公演を開催することで、出会いから実践へと結び付けています。本年度の

オープンミーティングでは、福祉(39%)、教育(6%)、まちづくり(12%)、芸術分野(41%)とジャンルを超えた繋がりに対するニーズが現れる結果となりました。終了後には参加者同士が自主的に音楽会企画を立ち上げるなどの効果も生まれ、新たな地域基盤へと結びついています。また、「にぎやかな日々」では、オープンミーティング参加者の演奏家、音楽療法士の出演や、福祉・まちづくり関係者が主となり広報・運営を行うなど地元の人材を活かすことで、地域に開かれた取り組みへと発展しつつあります。

多様な人が集い、自由でのびやかな表現や交流が生まれる場所へ

平成28年からダンスワークショップ・ダンス公演を開催し、現在は障がいの有無に関わらず、多様な人が集い、自由でのびやかな表現や交流が生まれる場所として育ってきました。今年度は昨年にコロナの影響で延期となったダンス公演を念願叶って実施。障がいのある人となない人がお互いに刺激して生まれた表現と、振付家・ダンサーの田畑真希さんによる映像や影、鏡、現代サーカスの手法を取り入れたユニークな演出で、この仲間と場所こそ生まれる素晴らしい作品となりました。「仲間のダンスを観たい、

感じたい」という希望から始まった音声ガイド解説も継続して実施しました。コロナ禍で障がいのある人が安心して表現・鑑賞できるための環境も重要な要素であり、演出家、ダンサー、舞台スタッフ、制作スタッフ、そして視覚障がい者支援の専門家や視覚に障がいがある当事者団体、鑑賞サポートの専門家との連携、信頼関係を大事にし、事業を実施しています。今後もこの場所を継続し、多様な人が混ざりあってこそ生まれる表現活動を推進していきたいと考えています。



映像とダンスのコラボレーションシーン



島根県西部でのオープンミーティングの様子

事業実施における工夫

島根県西部で地元人材と連携し、多様性のある公演や場所づくりを目指して取り組みました。①「異ジャンル同士が出会い、一緒に手探りすること」、②「これまで地元で行われてきた障がい者の芸術活動と連携すること」、③「当事者・家族の新たな居場所を創出すること」を実践するため、基盤となる繋がり場を継続して開きました。公共ホールとして工夫した点は、芸術・福祉・教育・まちづくりなどジャンルを横断した横の繋がりをコーディネートすることです。各ジャンルそれぞれに障がい者の芸術活動に

おけるニーズや捉え方、成果の考え方が異なります。しかし、各々が地域を担う人材であることを自覚し、ジャンルを越境して繋がることできれば、より広く多様性を受け入れる活動に結びつけられると考えています。そのコーディネーター役として、各人材の専門性やキャリアを尊重しながら対話することに重きを置いています。対話を重ねることで関係者全体が主体性を持ち、横の繋がりが基盤にあることで、持続性ある地域活動となるよう各企画を展開しています。

新型コロナウイルス感染症の影響

ダンス公演では、医療関係者など職場や家庭の状況で参加できなかったダンサーが多く、大きな影響がありました。その他、予定していた時期が、一部事業の実施を断念。コロナ禍であることで地域的に実施が困難であったり、仕事、家庭との関係やガイドヘルパーの手配が難しいなどの理由から、難しい状況が続いています。状況が落ち着いたらぜひ実施していきたいと考えています。

事業名 障がいのある人との表現活動の実践によるモデルづくり

団体名 NPO法人 シアターネットワークえひめ

所在地：愛媛県松山市

URL : <http://tne-ehime.org/>

事業概要 障がいのある人との表現活動として、A:障がい者とのドラマ製作と、B:精神障がい者として作成した幻聴幻覚カードを活用したワークショップを実施した。ABともに、参加した障がい者は自分らしい表現やワークショップに取り組む中で、新たな自分を発見したり、この事業に関わるアーティストなどとの交流により、互いの視野の広がりや理解を深めていた。障がい者の個性に配慮した十分な意見交換の時間を設けることが重要と認識し、ABともに参加者個人に合わせたアウトプットをうみだす独自の取組となると考える。

実施内容

●障がい者とのドラマ製作(障がい者施設への地元アーティスト派遣)
開催日:2021年12月14日
場 所:愛媛県立みなら特別支援学校城北分校
高等部3年生の担任や分校長と、アーティスト等との話し合いを実施。3年生を送る会で発表する作品と一緒に作っていくことを決定しましたが、学校から、コロナウィルスの影響で実現できない旨の連絡があり、アーティスト派遣を断念し、3月の報告会において、予定していたパフォーマンス鑑賞及び交流のための作品「アタシノアタシ」を上演するための準備(作品の打合せ)を実施しました。

●幻聴幻覚ワークショップ
①ワークショップ
開催日:2021年11月10日~2022年3月9日 計7回
場 所:シアターねこ(愛媛県)
県外アーティストだけでなく、今後の広がりを想定し、地元アーティストにも講師を依頼し、公開ワークショップを含め7回実施しました。ワークショップ参加者は、幻聴幻覚がある主に統合失調症の人だけでなく、発達障がいなど、幻聴幻覚のない当事者も参加しました。カードを使って自身の幻聴幻覚を紹介するだけでなく、幻聴幻覚のない人は、幻聴幻覚についての感想を互いに話し合ったり、日常の暮らしで感じていることなど、回を重ねるごとに自由に話すようになりました。詩の朗読を希望したり、歌を用意してきたと突然歌い出す参加者や即興芝居に、アーティストより早く対応する人など、日頃ではみられない一面が出現してきました。当初は予定になかったワークショップの公開にも参加者はチャレンジすることが出来ました。

②幻聴幻覚カードの作成
就労継続支援B型事業所風のねこの利用者が中心となって、幻聴幻覚を絵と言葉で表現しました。ワークショップで活用するためにA4サイズの大きなカードにして、35種類作成しました。また、カードを含めた報告書を作成し、県内外の公共施設、精神科病院やクリニック、福祉事業所等に配布。新聞等の掲載によって希望者に送付しました。

③報告会
開催日:2022年3月9日
場 所:シアターねこ(愛媛県)
幻聴幻覚カードの展示、今年度の取組みの紹介、みなら特別支援学校城北分校のために用意してきた作品「アタシノアタシ」(ダンス・アニメーション・音楽の体験)を上演しました。公開ワークショップに参加していた当事者も舞台上に飛び入り参加し、アーティストとともに、舞台上でパフォーマンスを体験することが出来ました。



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

今まで接点のなかった他者を知る機会

幻聴幻覚ワークショップに臨んだアーティスト2人は、今まで精神障がい者を対象としたワークショップを行ったことがなかったそうです。風のねこに通う精神障がいの人たちは、もの作りのアーティストとはコラボしてきましたが、演劇分野は初めてで、それぞれがおそろおそろワークショップに臨みました。精神障がいの人たちにとっては、日常おそらく会はずのない人たちに、自身の幻聴幻覚や症状を話すことに対し、まず話を聞いてくれるのだろうかという不安があったそうです。一方アーティストは、幻

聴幻覚とはいったい何なのか、そんなレアな体験を聞いていいのか、どのように対峙したらよいか不安だったようです。しかし実際、会ってみると互いの話を聞いてくれる、人と人が打ち解けていく様がワークショップの中ではじまっていた。それぞれいろいろな症状を持っているため、誰とでも簡単にコミュニケーションがとれる人ばかりではありませんが、まずは直接出会うことの大切さを実感したり、ゆっくり距離を縮めながら互いを知る機会となりました。

事業を継続していくためのフレームの発見

幻聴幻覚カードを活用しながら、参加者が日ごろからやりたいと思っていたことや、本人も気付かなかった表現がひょこっと顕在化することがありました。アーティストは即座にそれをキャッチして対応するという即興の醍醐味

が垣間見えます。幻聴幻覚カードづくりとワークショップをセットにして、他施設でも展開できる可能性がみえてきました。今後はこの手法で精神障がいのある人たちの表現活動につなげていきたいと思っています。

地元で当事者も含めた障がい者の表現活動に携わるチームづくり

幻聴幻覚カードを、当事者同士で話し合いながら当事者が作画する中で、リアルな体験が語られていました。そのこと考えると、今後も当事者チームは欠かせません。今後、

当事者とアーティストと一緒に複数のチームとなり、他施設に赴いて幻聴幻覚を表現する当事者を増やしていくことができると考えます。

アーティストの表現にふれる機会の創出

報告会では、幻聴幻覚ワークショップの公開と、「アタシノアタシ」を鑑賞し、当事者が別の観客と一緒に飛び入り参加して一緒に踊ることが出来ました。これは当事者の驚きもさることながら、その医療福祉関係者にとっても、当事

者の可能性を新たに発見することとなり、支援の幅の広がりを実感したという声が届いています。今後も鑑賞と交流事業も継続していきます。

事業実施における工夫

幻聴幻覚ワークショップ毎にアーティストやアドバイザー等とのプログラム会議を行い、参加者の個性に配慮した取組になるよう綿密な打合せを行いました。椅子や机の配置、休憩を多くとることなど考慮しながら、内容を組み立てていきました。また、協力受け入れ可能な学校の

調整等、愛媛県障がい者アートサポートセンターの協力や松山ブンカ・ラボ等によるアーティストの紹介及び事業のサポートによって、プログラムの変更等その都度相談しながら事業をすすめることが出来ました。

新型コロナウイルス感染症の影響

愛媛県全体の学校が外部関係者の受け入れができなくなることが頻繁に続き、事業全体が遅れ、また学校内で事業を実施することができずでした。地元アーティストを増やし、延期及び実施回数の変更や三密回避などプログラムを変えざるを得ませんでした。そのため2つの事業を1つの事業に絞り、対象を精神障がい者だけにし、ワークショップの回数を増やしました。アーティスト及び関係者には必要に応じて、ワクチン検査キットを事前にお渡しし、自主検査を行いました。ワークショップの開催では、受講者への体温測定、消毒、途中で換気・消毒など感染対策に常に配慮しました。

事業名 パーキンソン病患者によるダンス活動の普及事業～オンライン編

団体名 一般社団法人 パラカダンス

所在地：福岡県福岡市

URL : <https://www.facebook.com/danceforpd.japan>

事業概要 コロナ禍において実施してきたオンラインでの取り組みにより、全国各地からの参加者が増えたことを受け、その成果を発表する場、交流の場の創出と共に、新たに指導者育成にも力を入れる。そこでダンス経験者の他、ピアサポーターとなり得るパーキンソン病当事者、家族や介護職員など各方面からの参加者を募り、PDダンスファシリテーター養成講座キックオフを実施。また、医学的成果と芸術的成果の双方からの検証も行う。

実施内容

●月イチPDダンスワークショップ

参加費：無料
毎月1回に、福岡市内スタジオにおいてパーキンソン病に関わるすべての方を対象にオンライン（Zoom参加/YouTube視聴）と現地での開催を同時に行っています。オンラインでの定員はなし。毎回全国から30名程度の方にご参加いただいています。現地には状況に応じて5名程度が参加。この参加者の中から3月の舞台公演に出演。画面越しに踊っていても、毎回一体感が生まれて盛り上がるほどノリノリで参加してくださっています。

●週イチPDハウスダンス

参加費：無料
福岡市のパーキンソン病専門住宅型有料老人ホーム「PDハウス野芥」と「PDハウス有田」において、週に一度Zoomにて行いました。（今年度は各1回ずつ施設への訪問が叶いました。）同施設では入居者や施設職員に参加してもらい、高齢者施設におけるリハビリとしてのダンス活動の普及の端緒とします。



People Art Performance 2021-2022の様子
会場ではZoom出演者・ステージ・観客が一体となって踊った。

●PDダンスカフェ

開催日：2022年2月11日
場所：福岡大学病院・多目的室からオンライン（Zoom参加、YouTube視聴）配信
対象：パーキンソン病の方、ご家族、介護者などパーキンソン病に関わるすべての方々。オンラインでの参加が可能な方。
参加人数：Zoom参加/6名
YouTube視聴/リアルタイム67名
累積115回再生（3月25日時点）
参加費：無料

●PDダンスファシリテーター養成講座キックオフ

開催日：2022年2月12日
場所：オンライン（Zoom）のみ
対象：ダンスを踊ったことがあるパーキンソン病の方・ご家族や介護者・医療や福祉関係者でダンスを用いてリハビリを行いたい方。（Zoomでの参加が可能な方。前日のPDダンスカフェにご参加いただける方。もしくは、その映像を事前にご覧いただける方。）
参加人数：5名
参加費：無料（今後は有料を検討）

●People Art Performance 2021-2022

開催日：2022年3月13日
場所：ももちパレス 大ホール
参加者：Zoom出演/7名・現地出演/4名
来場数：141名
入場料：一般/2,500円（前売り2,000円）
学生・障害者手帳をお持ちの方/1,500円（前売り1,000円）未就学児/無料

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

調子悪かったけど、踊ってみたらスッキリとして動きも軽く、スムーズに！

このプログラムは、音楽に乗ってつい踊ってしまう、という構造になっているので、あまり深く考えずに、とにかくやってみようということで、終わってみると気分が良くなっていることを実感してもらえました。ダンス前とダンス後のアンケートより、「気分は落ち込みがありました。音楽、リズムで晴れて明るくなりました。」「今日は体中が痛いのですが、皆さんの笑顔を見て少しは明るくなりました。」「薬を飲む時間がすっかり過ぎていた！でも絶好調！」「最初はいつも off から入るので、調子イマイチですが、だんだん良くなってきます。」と明確な効果を得られました。また「一緒に踊っていると、つい頑張ってしまう。見ながら動く、動きやすく感じる。」「今日は少人数で、皆さんの笑顔もよく見えました。終わったあとは、スッキリとした気分

でした。」という感想から、みんなで集って行うということが相乗効果を生んでいるということが良くわかります。このダンスでは、動きが思い通りにいかなくても、イメージをすることがとても大事なのですが、「ダンスを気持ちよく踊りたいですが、体がついていきません。ついていけないイメージで踊ってます。」「ダンスに参加している時は昔を思い出して気持ちも身体もとても良く軽くなっています。」という感想から、その狙いが伝わったと感じます。私もあなたもどんな人にとっても普段調子が優れないときに音楽やリズムに合わせて身体を動かしてみることが効果を発揮するという事を社会に届けていきたいです。



事業実施における工夫

本事業は海外の事例から学んでおり、国内では先駆的です。芸術分野と医療分野、双方向からのエビデンスを残すなど独自の改良を続けています。また、今年度は新たにオンライン活動の発表方法を開発。ステージ後方のプロジェクターにZoom出演者を映しつつ、観客も巻き込んでの公開ワークショップ形式で作品を発表しました。毎年、記録映像にも力を入れており、一般公開することで認知度を上げていきます。右記の映像はNYのDance for PD

⑧フェスティバルにて世界に発信されました。今後も、さらに国内外の仲間達と繋がりながら、活動を継続させるための準備を進めていきます。



令和2年度記録映像



令和3年度記録映像

[YoutubeチャンネルURL]
<https://www.youtube.com/channel/UCwqMIpphqfvdP9CATTUVEYw>

新型コロナウイルス感染症の影響

昨年に引き続きオンラインでのワークショップを継続しています。参加者が多いときはZoom画面ひとつひとつが小さくなってしまっているので、盛り上がりはするものの、参加者ひとりひとりの表情や細かい動きは見え辛くなります。一方、参加者が少ない場合、一画面あたりの面積が大きくなることもあり、より深く繋がる事ができます。参加者はそれぞれのペースで慣れた場所から参加するため、都合に合わせて参加出来るようにいつでも開かれている場所として継続したいと思っております。

～障がいのある人もない人も共におどろろ～ 「はぐくみのダンス」

公益財団法人 都城市文化振興財団

所在地：宮崎県都城市

URL：http://mj-hall.jp

障がいのある人もない人も共に楽しめる「ダンス」を通して、地域の多様な人たちが集う場を作り、人々の文化芸術活動の機会を広げるダンスワークショップ。言葉や色などのイメージで各々の身体に合わせて動くことを楽しみ、共鳴し合う表現活動も取り入れる。踊る場があることを大切に、ダンスを通して人と人がつながることを目指す。また、障がいのあるファシリテーターと障がいのない生徒が共に行う身体表現ワークショップや、障がいのある人の世界に寄り添ったダンス作品を支援学校で上演するなど、同じ時間を過ごすことで、共感し合い新たな表現の価値を創出することを試みる。

実施内容

●障がいのある人もない人も共に踊ろう

「はぐくみのダンス」

開催日：2021年6月～2022年2月 計10回

場所：都城市総合文化ホール 練習室1

対象：年齢、性別、障がいの有無に関わらず誰でも

参加人数：合計62名

参加費：1回ごとに1人500円(一部無しの回もあり)

内容：年齢、性別、障がいの有無に関わらず誰でも参加できるダンスワークショップ。都城市にて活動する徳永紫保をファシリテーターに、市内外の障がいのある人もない人も参加して実施。それぞれの身体に合わせたストレッチなどで身体をほぐし、相手の名前を呼びながらアクションを起こすゲーム形式の動き、言葉やイメージで自由に動くなど、特に決まった形を作らず、その時その場を大切にすることで進めていくワークショップになりました。発表などを特に設けず、踊る場に集うこと、集う場をホールが創ることを重視しています。休息や終わった後の雑談の時間も「ダンス」と捉えた活動となっています。新型コロナウイルスの影響にて、Zoomを使ってリモートでも実施しました。



歩くことから

●聾のダンサー雫境さんとおどろろ

開催日：2021年6月8日、11月29日

場所：都城市立夏尾中学校、

宮崎県立白雲小中学校

対象：都城市内の児童生徒、表現活動経験者

参加人数：合計34名

参加費：無料

内容：聾のダンサー雫境(だけい)さんを講師に迎えて、言葉を使わないコミュニケーションで身体表現ワークショップを行いました。舞踏を軸にした身体の動かし方、呼吸に注目した動きなどを試みます。さらに、簡単なルールを決め4名ほどのグループで動きを真似るワーク、表現経験者には、イメージを重ねた短い連なる動きのワークなども行いました。講師の細かな身体の動きを手がかりに、自身と他者との身体を通したノンバーバルコミュニケーションを楽しみました。

●カンパニーデラシネラ「ドン・キホーテ」

聴覚支援学校公演

開催日：2021年11月2日

場所：宮崎県立都城さくら聴覚支援学校

対象：聴覚支援学校の児童生徒、教員、保護者

参加人数：合計85名

参加費：無し

内容：パントマイムを中心に豊かな身体表現での作品を創作・上演する、カンパニーデラシネラ(主宰：小野寺修二)の「ドン・キホーテ」を聴覚支援学校にて上演。コロナ禍の中でオリジナルの作品を聴覚に障がいのある方々の世界に寄り添う形で、台詞も音楽も無くしての上演に挑みました。

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

共に過ごす時間を生み出す「場」を創り続ける

障がいのある方の社会参加の機会を広げるため、文化芸術に何ができるのか？という問いから生まれたこの取り組みは、ダンスを通してその場に集まった多様な人たちがつながり、お互いの近状報告や地域の情報交換の場となりました。仲間と共に楽しむ時間の中で身体を動かすことは、リハビリとは違う心地よい身体的効果がありまし

た。一方で、ホールへのアクセスが容易ではない参加希望者などのサポート、コロナ禍にて外出が難しい状況にある参加者へのケアなどの障壁を越えるには、福祉や行政など分野を横断した協働が必要であり、今後の課題でもあります。日常に踊る「場」を創り続けることで、共生の歩みを進み続ける地域になることを目指していきます。

寄り添い想いを馳せる機会に

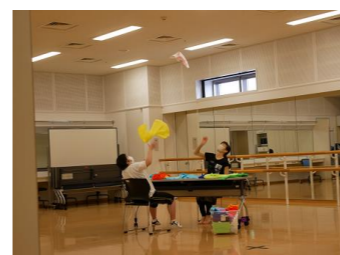
聴覚に障がいのあるファシリテーターとのワークショップは、言葉での事前説明などを最小限にするよう心がけました。その結果、参加者同士のコミュニケーションも非言語になり、相手が何を伝えようとしているのかを理解しようと、寄り添う姿が見られました。障がいのある人と初め

て触れ合う生徒の中には最初戸惑いもありましたが、動きを真似ていく中で、何かを伝えようとしている障がいのある人に、自分は何ができるのか？と課題や疑問を見出した生徒もあり、共生社会への想いを馳せる機会となりました。

開かれる表現の世界への可能性

地域の教育機関との連携にて、文化芸術鑑賞の機会の少ない、聴覚障がいのある児童生徒への鑑賞を初めて行なえました。上演作品はセリフや音楽を無くし、パフォーマーが聞こえない世界に入っの上演に挑み、アーティスト側にとって新しい表現の可能性が開かれることとなりました。また、身体表現だけで綴られる世界に、一瞬たりとも

見逃さないよう観ていた児童生徒の眼差しは印象的で、豊かな仕草で、驚きや喜びを作品と共に表現していた様子がかがえました。高学年は自らもパントマイムをやりたい、との意欲も生まれ、鑑賞の機会が文化芸術への参加に発展するきっかけともなりました。



日常の動きがダンスへ



身体の距離は保って、心の距離は近づいて

事業実施における工夫

当ホールは社会福祉法人都城市社会福祉協議会と包括協定を結んでおり、協力を得ることができました。また、障がいのある人とのダンス活動を行うファシリテーターが中にいるため、定期的なワークショップの実施ができました。参加者の中には、親子でワークショップを楽しんでくださる方々もいて、車椅子の動かし方や身体の支え方などを

教えながら様々な動きを試してもらうこともできました。また、付き添いのケアスタッフの方も終始見学されており、時々感想を聞いたり、休憩時間のケアなどを教えてもらうこともありました。参加者だけでなく周りの家族やケアスタッフも共に楽しむことができるよう心掛けました。

新型コロナウイルス感染症の影響

障がいのある方々の外出への不安、触れ合うことへの不安は大きく、参加したくてもできない状況がありました。特に複数の支援施設を利用している方は、それぞれの施設の方針に従わざるを得ません。当事者自身の意思だけの決定ではなく、様々な背景に影響されることが大きい場合もありました。障がいのある人の文化芸術活動を考える時、多様な分野の知恵が集まり、柔軟な選択肢や対応ができることを考えていきたいです。オンラインでのワークショップ実施も行いました。直接的な場を共有することはできませんでしたが、同じ時間を共に過ごすことで、孤独感や不安から離れることができ、人とつながる場が生まれました。さらには、自宅などの安心して参加できる環境のため、普段では見ることの出来ない、やわらかな表情、動きが発見出来ました。事業へのミッションやビジョンを持つことで、工夫や知恵、発想が豊かになっていくことを感じています。

音楽体験を通じた不登校児童生徒の社会的接点を作る音楽プログラムの開発と実践、及びその検証

一般社団法人 楽友協会おきなわ

所在地：沖縄県那覇市

URL : <https://www.facebook.com/people/一般社団法人-楽友協会おきなわ/100063571204178/>

楽友協会おきなわでは、さまざまな理由で学校にいけない子どもたちと、音楽ワークショップを通して交流を続けている。子どもたちの音楽体験を、居場所支援員と連携してプランをたて、ワークショップを行い、活動のハレの場として発表会を行う。子どもたちの興味関心を引き出し、認め、互いに活動し、その積み重ねを発表会で表現することで、自尊感情の向上につながることを目的とする。今年度は子どもの居場所に加えて、就労継続支援B型で若者の居場所「コミュっと！」もオンライン、訪問でのワークショップを実施。仮想空間でのワークショップ実施など、オンラインを生かした新しい手法にも取り組む。

実施内容

●オンライン音楽ワークショップ

① マインクラフトで「エリーゼのために」を作ってみよう

開催日：2021年9月22日

対象：那覇kukuluのこどもたち、うるまkukuluスタッフ

内容：教育用に開発されたオンラインゲームのマインクラフトを使い、「エリーゼのために」のメロディの一部分を制作し演奏した。サーバーを共有しマルチプレイで連携して作品を作りました。

②「Enjoy playing」

～興味のある楽器に親しんでみよう～

開催日：2021年8月～2022年3月

場所：那覇kukulu、うるまkukulu、b&gからふる田場

対象：各居場所に通所するこどもたち、スタッフ

参加人数：各回、4名～10名程度

内容：ギター、三線、ピアノの楽器のお話しとレッスンを実施しました。

③「楽譜を書いてみよう！」～学びたいを育む～

開催日：2021年12月～2022年3月

場所：那覇kukulu、コミュっと！

対象：各居場所に通所するこども・若者たち、スタッフ

参加人数：各回、5名～7名程度

内容：楽譜が読めるようになりたいとの声があり、スタートした事業です。基本的な音符やリズムの読み方、楽譜の書き方から、音階・音名、表情記号、コードなど、基礎を学び、簡単な作曲にも挑戦しました。

●音楽発表会

ゆかいな音楽家と、ときどきひきこもり2022

開催日：2022年2月23日

場所：那覇市ぶんかテンプス館ホール

(無観客 / オンライン配信)

*2事業所はオンラインでの参加。

出演者：那覇kukuluのこどもたち、うるまkukuluのこどもたち、コミュっと！、各事業所の支援員、鶴見幸代、楽友協会おきなわのメンバー50名程度

内容：前半は音楽発表会、後半は関係者の座談会を実施。コロナ禍におけるワークショップでの取り組み、4年間の変化などを振り返りました。



視聴している皆さんへ手を振る出演者



オンライン音楽ワークショップの様子

鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

自分の興味ごとを通して、コミュニケーション能力を高める

本事業では、徹底して子ども達の興味に沿ったプログラム展開をしています。ワークショップでは、部活動と称して子ども達の要望から新たな取り組みが生まれ、ヴォイストレーニング、ピアノ、ギター、三線、音楽基礎講座が個別でスタートしました。興味関心から活動が生まれたことから、「これが好き、これをやってみたい」など、子どもの自発的な意見がより聞かれるようになりました。「教える一教わる」関係性から自然にコミュニケーションが生まれ、支援員

とも、楽器練習など日々の居場所での活動の中に、音楽に関連したコミュニケーションが生まれています。これまでのグループでの創作ワークショップでは、その場限りで継続性があまり期待できませんでしたが、個人の興味関心に沿った活動が生まれたことで、より継続的な音楽プログラムとなり、子ども達にとって、これまでと違ったコミュニケーション能力を求められるシーンが増えたと考えています。

発表会を通して、達成感を味わう

コロナ禍で、各事業所のその他のイベントが全て中止となった中で、少しでも子ども達の楽しみを作りたいという支援員の意見を反映し、確実に開催できる方策として、昨年に引き続き、オンライン配信での開催が決定しました。三線、ギター、ピアノ、打楽器、バンドなどの、楽器演奏を中心とした今年度の発表会の特徴は、各事業所の連携プログラムになります。新規で交流がスタートした「コミュっと！」は、もともとバンド活動が盛んで、ヴォーカルが不在

でしたが、他事業所の子ども達がヴォーカルを努めました。また、沖縄民謡の「安里屋ゆんた」をそれぞれの事業所の音楽カラーを出しながら、リレー形式で演奏を繋げていきました。これは、オンラインのワークショップで発見した形式で、オンラインでもオフラインでも、演奏のレベルに関係なく楽しく音楽経験を共有出来ました。「b&g からふる田場」の子どもたちは、対面でのワークショップが限られたため、今回は主に鑑賞側として参加しました。



テレビで放映された発表会の様子



事業実施における工夫

不登校やひきこもりの児童・生徒の置かれている状況は変化しやすく、精神的に安定しない場合も多いです。そのため継続した取り組みが出来なくなる事も多く、計画は余裕を持ち、常に子ども達の変化に応じた対応が出来るよう柔軟に考える必要があります。音楽ワークショップは、導入期に子ども達の好きな音楽や興味のある音楽を取り入れながら、そこから間口を広げるような仕掛けを想定していくつか準備しました。支援員も一緒に楽器に触れても

らい、演奏技術を習得し、ワークショップ以外の時間でもサポートをしてもらうだけでなく、子どもとのコミュニケーションツールとなることを狙いとしました。事業を円滑に進めるにあたっては各事業所との連携、支援員との入念な調整が必須です。事業所・支援員との信頼関係を築き、子ども達と良好な関係性を築くことが本事業の土台となり、小さな活動の継続が結果し、発表会の達成感に繋がりました。

新型コロナウイルス感染症の影響

緊急事態宣言等期間の延長が相次ぎ、連携パートナーである施設が閉所を余儀なくされる等、ワークショップの開催を予定通り行うことが困難で、オンラインでの対応になってしまったこともしばしばでした。秋頃までは各々子ども達のやりたい楽器のレッスンを主に予定していましたが、初心者でまだ交流も出来ない子ども達へのレッスンはオンラインでは難しく、12月以降の対面で、ようやくワークショップを始めることが出来ました。また、事業所が度々閉所になったことから、精神的に不安定になった児童・生徒もおり、事業所に通えなくなるなどの影響が出ています。他にも、家庭環境の悪化、学校で思い切り遊べない等、子ども達がストレスを抱え、不安定な情緒が大きな問題となり、まずはセキュアベースとしての機能を取り戻すことに重点が置かれたため、ワークショップは後回しとなってしまった感が否めません。

団体名 一般社団法人 琉球フィルハーモニック

所在地：沖縄県那覇市

URL：https://ryukyuphil.org

事業概要 障害のある人とその家族、関係者が安心してオーケストラコンサートを楽しめる環境づくりの為に、音楽や福祉など各分野の専門家や障害当事者らによって「ゆいまーるミュージックプロジェクト」を組織。実践の場として「美(ちゅ)らサウンズコンサート」を開催。3年目となる今年は、2日間で有観客1公演、無観客ライブ配信1公演を、それぞれ2自治体の共催を得て開催。又、難病の方の新たな参加方法の実験を試みる。更に、障害のあるアーティストの活動の場を拡充し、共演者との相互理解及び交流を深めていく場とし、公演終了後には公演の様子やノウハウ、現場の声をまとめた冊子を作成して全国に広めるなど、文化芸術による共生社会の推進に取り組む。

実施内容

●無観客ライブ配信「美らサウンズコンサート2021 inうるま市」

開催日：2021年12月12日～2022年1月15日

場所：与那原町役場内上の森かなちホール
(ライブ配信)

参加人数：視聴者数1,699名

内容：うるま市において市内クラスターが発生し、開催ができなくなった為、会場を与那原町上の森かなちホールに変更し、無観客のライブ配信を行いました。ウェルカム演奏にはうるま市ジュニアオーケストラが映像にて出演しました。

●Zoomによる遠隔参加実験

開催日：2021年12月12日

場所：オンライン開催(Zoom)

対象：重度障害や難病で来場できない方

内容：前年度、プロジェクトメンバーから重度障害者や難病患者が自宅や施設から視聴に留まらない参加が可能になる試みの提案があり、今回はオーケストラの指揮体験をリモートで参加する実験を行いました。

●「ゆいまーるミュージックプロジェクト」会議

開催日：2021年8月15日、10月31日、
2022年2月6日

場所：オンライン開催(Zoom)

参加人数：31名

内容：前回の公演を踏まえた改善箇所や新たな取組、公演内容、周知方法や評価指標などを協議しました。新型コロナの影響による障害者の実情に即した対応策についても協議し、新たに試みるリモート指揮体験の実験についても話し合いました。コンサート後は、振り返りと評価、冊子内容、次回へ向けての方針を協議しました。

●「美らサウンズコンサート2021 in与那原町」開催

開催日：2021年12月11日

場所：与那原町観光交流施設アリーナ

対象：全ての障害・難病のある方、ご家族・介護の方等

参加人数：来場者数300名、出演者62名、
関係スタッフ約100名

参加費：無料

内容：会議を経て、入場者数を定員の半分に設定。手指消毒や検温の徹底などに加えて、琉球フィル独自に新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドラインを作成、COCOAや沖縄県が実施するLINEを活用した感染症対策ツール、非接触型受付システムの導入によりコロナ禍にあっても安心して来場いただけるよう、努めました。

また、那覇ジュニアオーケストラの子どもたちが、公演前のウェルカム演奏(30分)、会場でのボランティア(会場案内、受付誘導、椅子の消毒など)を行いました。



鑑賞機会

創造機会

発表機会

作品評価

権利保護

販売支援

交流促進

相談体制

人材育成

情報収集

連携協力

事業の効果

選曲から会場づくりまでバリアフリー化を実現

音楽療法士のアドバイスによる選曲・曲順、色覚障害のある人にもわかりやすい色使い、プログラムに読み上げアプリ用のテキストを掲載、土足での入場、手話通訳、UDトークの活用、ゾーニングの工夫(聴覚障害のある人のためのエリア、自由な姿勢・周りの目を気にせず鑑賞できるスペー

スなど)補助犬の入場可、演奏中の出入りや歓声・拍手の可、障害のある人の反応について事前に演奏者へ周知などを行いました。更に、コンサートの途中には音楽療法士と打楽器奏者によるドラムパフォーマンスで体をほぐすコーナーを設けたことにより後半もリラックスして鑑賞していました。

開催地域等との連携

本事業では、開催地域の教育委員会や福祉課、社会福祉協議会等との連携によって、会場や施設の提供、公演の周知、ボランティアの募集協力等を受けました。また、地元の高校生や大学生、一般の若い世代から熟年世代にわたり多くの

方がボランティアとして参加しました。初年度から継続して参加している方も多く、混乱なく事務局との連携がスムーズに行えました。

難病等で来場できない方の参加方法として選択肢が増えた

Zoomの画面を見てオーケストラが演奏する手法での指揮体験の実験を行いました。Zoomでは、会話程度であればほとんど違和感なくコミュニケーションを行えますが、音楽のタイミングには致命的な遅れが生じます。そこで、今回は体験者の指揮が始まる時に、オーケストラ側の音声をミュートにして、音の遅延による混乱をなくし、そばでスタッフがその指揮に合わせてメロディを歌いました。体験

者は、リプレイにより、実際の演奏を視聴しました。双方ともなるべく遅延を少なくするため、光回線に接続して更に事前確認を行い、本番に臨みました。

結果として、リアルでの指揮体験とほとんど遜色ない和気あいあいとした雰囲気好感を呼びました。今回の実験を通して、難病等で来場できない方の、公演への参加方法の選択肢としても十分に期待できることを実感しました。

これまで得られたノウハウを他地域でも活用できるようにしたい

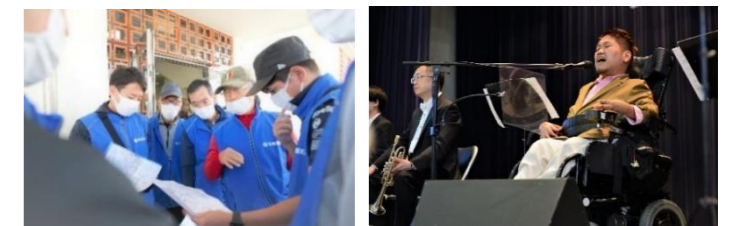
さまざまな立場の方が障害者を対象としたコンサートを開催できるように、第1回目の公演からコンサートのノウハウなどをまとめた冊子を作成し、全国の関連団体に配布を行ってきました。今年度は、いくつかのプロオーケストラや

文化団体からコロナ禍でのバリアフリーコンサートの開き方について問い合わせがあり、少しずつですが、その効果が現れてきています。

事業実施における工夫

メンバーのネットワークを活かし、開催地域の自治体や住民、福祉団体等と連携することが出来ました。障害当事者や家族、関係者などからの意見を参考にし、チラシやポスター作成においては色覚障害者に見やすい色使いとし、会場設営なども工夫しました。視覚障害者のための点字プログラムや読み上げアプリ用のテキストの掲載、聴覚障害者には手話通訳者やUDトークを活用しました。また、事前に

障害種のヒアリングを行い会場での案内に繋がりました。更に、コロナ禍で開催が難しい場合に備え、企業と連携して無観客のライブ配信に切り替えられるよう準備しました。



新型コロナウイルス感染症の影響

①ライブ配信を実施。②予約人数の把握。③QRコードによる非接触型予約確認システムを導入。④マスク非着用の許可を、当事者和其他の入場者にわかるように当事者に確認のシールを貼る。⑤受付で、検温・手指消毒・看護師による問診を実施。⑥COCOAと併せて沖縄県独自の新型コロナ対策パーソナルサポート(RICCA)の導入を推奨し、入場者連絡先と合わせてデータ化。⑦スタッフやボランティア・オーケストラのマスク等着用、受付の亚克力パーテーション設置。⑧入場時の手指消毒の他に、トイレの手洗い場や出演者控室などにも消毒液スプレーを配置。また、公演後に椅子とマットの消毒の徹底を実施。など、多くの対策を取りました。

令和3年度
障害者等による文化芸術活動推進事業 事例集

発行日 令和4年3月

発行 文化庁地域文化創生本部

〒605-8505

京都市東山区東大路通松原上る三丁目毘沙門町43-3

編集協力 株式会社日本旅行